

吉塚本町遺跡

福岡市博多区吉塚本町所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第 97 集

1992

福岡県教育委員会

吉塚本町遺跡

福岡市博多区吉塚本町所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第 97 集

1992

福岡県教育委員会



1. 吉塚本町遺跡調査地区 全景



2. 1号竪穴遺構内土鍾出土状態



1. 多量に出土した土罌



2. 駅弁関係茶瓶

序

本書は、福岡県中小企業振興センター（仮称）の建設に先立ち実施した発掘調査の記録であります。

調査の結果は、古墳時代から奈良時代にわたる建物や竪穴遺構・土墳等からなる集落跡の一部が検出され、土師器や須恵器、砥石・土錘など多数の生活に係わる遺物が発見されました。特に、多量に検出された漁網錘である土錘の発見は、海に近い本遺跡の往時に於ける生活の一端を物語っています。

発掘調査の報告としては、満足のいくものではありませんが、本書を通して地域の文化財ならびに歴史に対する認識と理解を深める一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々の御指導・御協力を頂いた福岡市教育委員会をはじめ、商工部経営指導課、国鉄清算事業団ならびに地元の方々に対して心から感謝申し上げます。

平成4年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

1. 本書は、福岡県中小企業振興センター（仮称）建設工事に係る事前の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、県商工部経営指導課の執行委任を受けて県教育委員会指導第二部文化課が実施した。
3. 遺構の実測は、井上裕弘・中間研志・池辺元明・日高正幸・飛野博文が、写真撮影は井上が行った。
4. 出土遺物の整理は、岩瀬正信氏の指導のもとに文化課甘木発掘調査事務所で行った。
5. 出土遺物の写真撮影は、岡紀久夫・上野周平氏が行った。実測は井上・日高が行った。
6. 製図は、豊福弥生・原かよ子・塩足里美・近藤美恵子氏の協力を得た。
7. 本書の執筆は、井上・日高が、編集は井上が担当した。

本文目次

I 調査の経過	1
II 位置と環境	2
III 遺構と遺物	3
(1) 掘立柱建物跡	5
(2) 竪穴状遺構	7
(3) 土塼	16
(4) 土塼墓	55
(5) 溝状遺構	57
(6) ビット・包含層出土の遺物	58
IV 吉塚操車場跡期の遺構と遺物	76
V おわりに	87

図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1	(1) 発掘区全景（北から）	3
	(2) 発掘区西半部全景（北から）	3
図 版 2	(1) 発掘区東半部全景（北から）	3
	(2) 発掘区北半部近景（西から）	3
図 版 3	(1) 発掘区中央部近景（西から）	3
	(2) 発掘区中央部南半近景（西から）	3
図 版 4	(1) 発掘区北西部近景（西から）	3
	(2) 発掘区中央部北半近景（西から）	3
図 版 5	(1) 1号掘立柱建物跡（南から）	5
	(2) 2号掘立柱建物跡（南から）	6
図 版 6	(1) 1・2号竪穴遺構と土壌群（西から）	7
	(2) 1号竪穴遺構（西から）	7
図 版 7	(1) 1号竪穴内土鏝出土状態（西から）	7
	(2) 2号竪穴遺構（西から）	11
図 版 8	(1) 3号竪穴遺構（北から）	13
	(2) 4号竪穴遺構（北から）	13
図 版 9	(1) 7号竪穴遺構（南西から）	14
	(2) 8号竪穴遺構（東から）	16
図 版 10	(1) 1号土壌（東から）	16
	(2) 3号土壌（西から）	18
図 版 11	(1) 8・9・39・47号土壌群（西から）	21
	(2) 9号土壌（東から）	23
図 版 12	(1) 11号土壌（北から）	23
	(2) 12号土壌（西から）	23
図 版 13	(1) 13号土壌（東から）	25
	(2) 14号土壌（北から）	25
図 版 14	(1) 16号土壌（北から）	27
	(2) 19号土壌（北から）	27
図 版 15	(1) 21号土壌（東から）	31
	(2) 22号土壌（南から）	31

図 版 16	(1) 23号土墳 (北から)	31
	(2) 24号土墳 (北から)	31
図 版 17	(1) 26号土墳 (東から)	33
	(2) 27・28・36号土墳 (西から)	33
図 版 18	(1) 27号土墳周溝 (北から)	33
	(2) 27号土墳周溝内耳環出土状態 (北から)	33
図 版 19	(1) 27・28・36・37号土墳群 (西から)	35
	(2) 36・37号土墳 (西から)	37
図 版 20	(1) 30号土墳 (北から)	35
	(2) 31号土墳 (西から)	35
図 版 21	(1) 32・33号土墳 (東から)	37
	(2) 34号土墳 (西から)	37
図 版 22	(1) 38号土墳 (南から)	40
	(2) 39号土墳 (北から)	40
図 版 23	(1) 7号竪穴と周辺の土墳群 (西から)	40
	(2) 40号土墳 (北から)	43
図 版 24	(1) 41号土墳 (東から)	43
	(2) 42号土墳 (西から)	43
図 版 25	(1) 47号土墳 (西から)	47
	(2) 49～51・54号土墳 (北から)	49
図 版 26	(1) 53号土墳	49
	(2) 54号土墳	50
図 版 27	(1) 34・35・55・58号土墳群 (西から)	50
	(2) 55号土墳 (西から)	50
図 版 28	(1) 56号土墳 (北から)	50
	(2) 57号土墳 (北から)	53
図 版 29	(1) 58号土墳 (西から)	53
	(2) 59号土墳 (北から)	53
図 版 30	(1) 9・39・60号土墳 (東から)	53
	(2) 61号土墳 (南から)	54
図 版 31	(1) 62号土墳 (北から)	55
	(2) 1号土墳墓 (東から)	55
図 版 32	(1) 1号土墳墓内刀子・土師器出土状態 (西から)	55

	(2) 1号土墳墓内上師器・青磁出土状態(西から)	55
図版 33	(1) 1号土墳墓(東から)	55
	(2) 2号土墳墓(東から)	56
図版 34	(1) 井戸土層断面(南から)	76
	(2) 井戸(南から)	76
図版 35	出土土師器・須恵器	11
図版 36	出土土師器・須恵器・緑釉陶器	29
図版 37	出土土師器・須恵器	57
図版 38	(1) 出土土師器・須恵器	69
	(2) 紡錘車・土玉・砥石	13
図版 39	(1) 土鍾①	9
	(2) 土鍾②	19
図版 40	(1) 土鍾③	38
	(2) 土鍾④	42
図版 41	(1) 土鍾⑤	64
	(2) 土鍾⑥	65
図版 42	(1) 土鍾⑦	66
	(2) 土鍾⑧	71
図版 43	土鍾・鉄釘	67
図版 44	(1) 耳環・鉄器	13
	(2) 石斧・砥石	68
図版 45	駅弁関係瓶	79
図版 46	瓶①	82
図版 47	瓶②	83
図版 48	瓶③	84

挿 図 目 次

本文対照頁

第 1 図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第 2 図	発掘区と周辺地形図 (1/5,000)	3
第 3 図	遺構配置図 (1/200)	折込み
第 4 図	1号掘立柱建物	5
第 5 図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	6

第 6 図	2号掘立柱建物	6
第 7 図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	7
第 8 図	1・2号竪穴遺構実測図 (1/40)	8
第 9 図	竪穴内出土土錘実測図 (1/2)	9
第 10 図	3号竪穴遺構実測図 (1/40)	10
第 11 図	竪穴遺構内出土土器実測図 (1/3)	11
第 12 図	4・7号竪穴遺構実測図 (1/40)	12
第 13 図	石製品・土製品・青銅器・鉄器実測図 (1/2)	13
第 14 図	8号竪穴遺構実測図 (1/40)	15
第 15 図	1~4号土壌実測図 (1/40)	17
第 16 図	土壌内出土土錘実測図 1 (1/2)	19
第 17 図	土壌内出土土器実測図 1 (1/3)	20
第 18 図	6~9号土壌実測図 (1/40)	22
第 19 図	10~13号土壌実測図 (1/40)	24
第 20 図	14~16号土壌実測図 (1/40)	26
第 21 図	17~20号土壌実測図 (1/40)	28
第 22 図	土壌内出土土器実測図 2 (1/3)	29
第 23 図	21~24号土壌実測図 (1/40)	30
第 24 図	26~29号土壌実測図 (1/40)	32
第 25 図	30~33号土壌実測図 (1/40)	34
第 26 図	34・35号土壌実測図 (1/40)	36
第 27 図	土壌内出土土錘実測図 2 (1/2)	38
第 28 図	36~38号土壌実測図 (1/40)	39
第 29 図	39~42・46号土壌実測図 (1/40)	41
第 30 図	土壌・ビット内出土土錘実測図 (1/2)	42
第 31 図	43・44・47号土壌実測図 (1/40)	44
第 32 図	土壌内出土土器実測図 3 (1/3)	45
第 33 図	48号土壌実測図 (1/40)	48
第 34 図	49~55号土壌実測図 (1/40)	折込み
第 35 図	57・58号土壌実測図 (1/40)	51
第 36 図	59~61号土壌実測図 (1/40)	52
第 37 図	62号土壌実測図 (1/40)	54
第 38 図	土壌墓実測図 (1/30)	55
第 39 図	土壌墓出土鉄器実測図 (1/2)	56
第 40 図	土壌墓出土土器実測図 (1/3)	56

第 41 図	溝・ピット内出土土器実測図 (1/3)	57
第 42 図	包含層出土土器実測図 1 (1/3)	59
第 43 図	包含層出土土器実測図 2 (1/3)	60
第 44 図	包含層出土土器実測図 3 (1/3)	62
第 45 図	包含層出土土器実測図 4 (1/2)	63
第 46 図	包含層出土土鍾実測図 1 (1/2)	64
第 47 図	包含層出土土鍾実測図 2 (1/2)	65
第 48 図	包含層出土土鍾実測図 3 (1/2)	66
第 49 図	包含層出土土鍾実測図 4 (1/2)	67
第 50 図	包含層出土石器実測図 (1/2)	68
第 51 図	表採及び攪乱層出土土器実測図 1 (1/3)	69
第 52 図	表採及び攪乱層出土土器実測図 2 (1/3)	70
第 53 図	表採及び攪乱層出土土鍾実測図 1 (1/2)	71
第 54 図	表採及び攪乱層出土土鍾実測図 2 (1/2)	72
第 55 図	発掘風景	73
第 56 図	昭和50年頃の妙見宿舎基礎穴配置と攪乱坑 (1/400)	76
第 57 図	昭和30年頃の吉塚操車場と発掘調査地区 (1/1,500)	77
第 58 図	井戸	78
第 59 図	井戸実測図 (1/40)	78
第 60 図	井戸出土鉄釘実測図 (1/2)	78
第 61 図	駅弁関係容器	79
第 62 図	瓶①	82
第 63 図	瓶②	83
第 64 図	瓶③	84
第 65 図	土鍾分類図	90

目 次

本文対照頁

表 1	吉塚本町地質柱状図	4
表 2	土鍾計測一覧表	74
表 3	駅弁関係容器一覧表	80
表 4	瓶一覧表	85
表 5	出土品の当時の値段	86
表 6	竪穴遺構一覧表	87
表 7	土壌一覧表	88

I 調査の経過

平成2年7月、県商工部経営指導課より中小企業振興センター（仮称）建設予定地内の文化財の有無について協議がなされた。当該地の文化財の有無については、隣接地である住宅・都市整備公団が建設予定の古塚駅東口団地内において、すでにその所在が確認されていたこともあり、発掘調査等の文化財の保護措置が必要であることを申し入れた。その結果、用地買収が完了する予定である平成4年9月頃に発掘調査を実施することで協議が成立した。

発掘調査は、平成3年9月18日から12月27日の間で実施し、引き続き出土遺物や図面等の整理作業を行った。

発掘調査の組織は次のとおりである。

福岡県教育委員会

総括

教 育 長	御手洗 康
教育次長	光安 常喜
文化課長	森山 良一
文化課課長補佐	国武 康友

庶務

文化課管理係長	岸本 実
同 主任主事	安丸 重喜

調査

文化課参事	石松 好雄（文化財保護室長兼任）
同 参事補佐	柳田 康雄（調査班総括兼任）
同 参事補佐	井上 裕弘（調査班総括補佐兼任）
同 技術主査	池辺 元明
同 主任技師	飛野 博文
同 文化財専門員	日高 正幸

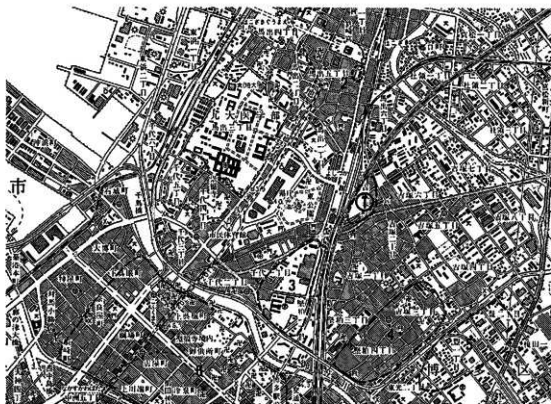
なお、発掘調査にあたっては、福岡市教育委員会埋蔵文化財課ならびに所属発掘作業員の方々の多大なご協力を得た。特に、福岡市埋蔵文化財課常松幹雄氏には大変お世話になった。また、福岡教育事務所中間研志からは実測の応援を得た。一方、古砂丘の形成に係る地質調査については、九州大学理学部下山正一先生、西南学院大学文学部磯崎先生、九州都市整備センター藤田洋氏にご協力いただいた。ここに記して感謝の意を表します。

Ⅱ 位置と環境

古塚本町遺跡は、福岡市博多区古塚本町に所在する。本遺跡は、南側隣接地に建設される住宅・都市整備公団の古塚駅東口団地の事前調査で新たに確認された遺跡で、奈良時代を主体とする集落遺跡といわれている。

遺跡は、市内東北部を流れる多々良川の支流である須恵川と字美川が形成した沖積地の西側に博多湾に沿って南北に延びる標高3～4 m 前後の古砂丘上に位置している。北側には、箱崎・馬出遺跡群の一つとされる箱崎遺跡がある。11世紀後半から15世紀にわたる遺跡で、隣接する富崎宮と関連する遺跡である。また、南には古塚遺跡群や堅粕遺跡群、豊遺跡群などが分布している。

一方、地下鉄建設に伴う事前の発掘調査で発見された古代・中世を中心とする広大な博多遺跡群があり、莫大な遺構や遺物が検出されている。とりわけ、中国陶磁器類の多量の出土は、対外交易が盛んであった古代・中世の博多の町の繁栄ぶりを偲ばせるものである。



1. 古塚本町遺跡 2. 箱崎遺跡 3. 堅粕遺跡群 4. 古塚遺跡群 5. 豊遺跡群
6. 博多遺跡群

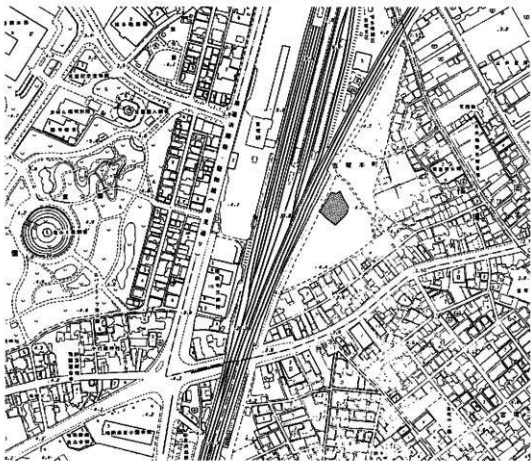
第 1 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ 遺構と遺物

当該地は、かつて、昭和50年頃には国鉄博多保線区の妙見宿舍があった場所である。それ以前は明確な記録等も残されていないようであるが、昭和40年前後頃までは吉塚操車場があった跡地といわれている。従って、これら施設建設時の基礎穴やゴミの埋め穴などにより、かなり破壊を受けていた。とりわけ、最後の施設である妙見宿舍として利用されていた頃の建物跡の基礎穴や攪乱がその大半を占めるようで、規則的に配置されている。

しかし、このような大きな破壊を受けながらも古墳時代から奈良時代を主体とした生活遺構を中心とする孤立柱建物跡・堅穴状遺構・土壇・土壇墓・溝など多数の遺構が検出されるとともに、多量の土師器・須恵器・土甕等の遺物が出土したことは幸いであった。

遺跡は、古い砂丘地に形成されたもので、現地踏査をいただいた九州大学下山正一先生



第 2 図 発掘区と周辺地形図 (1/5,000)

表1 吉塚本町地質柱状図

標 尺 m	標 高 m	標 度 m	層 厚 m	柱 状 状 態	色 調	地 質 名	観 察 記 事	土 層 名	性 質	年 代
	3.68	0.50	0.50		黒灰	盛 土	焼却残土である。	箱 崎 砂 層	文化層 (近世) 河口域河川性の砂	3,000 + 2,500BP
1	2.68	1.50	1.00		暗黄褐	中 砂	粒子は不均一である。 雲母片を少量含む。			
2	1.68	2.50	1.00		黄褐	粗 砂	粒子は不均一である。 雲母片を少量含む。			
3					暗黄褐	礫混り中砂	粒子は不均一である。			
4	-0.32	4.50	2.00				礫はφ2~3mm程度の重円礫である。	博 多 河 シ ル ト 層	海砂 内河のシルト層	6,000 + 3,000? BP
5	-1.32	5.50	1.00		褐	細 砂	細粒分を多く含む。			
6					暗灰	シルト混り 細砂	細粒分を多く含む。 貝殻片を混入する。			
7	-3.32	7.50	2.00					住 吉 層	三 角 積 層	10,000BP
8					暗褐	シルト混り 粗砂	粒子は不均一である。			
9	-5.32	9.50	2.00				φ2~6mm程度の重円礫が点在する。			
10					暗灰 + 黄灰	礫混り粗砂	礫はφ2~3mm程度の重円礫である。 色調は11m付近より淡褐色を呈する。	大 井 砂 層	段	
11	-7.32	11.50	2.00							
12	-8.32	12.50	1.00		暗褐	シルト混り 粗砂	粒子は不均一である。 φ2~3mm程度の重円礫が点在する。	須 崎 層	正	
13					暗緑褐	礫混り粗砂	礫はφ2~40mm程度の重円礫である。 少量のシルト分を含む所がある。			
14	-10.42	14.60	2.10					花 崗 岩	マ サ 土	
15	-12.67	14.80	0.20		黄褐	砂 礫	礫はφ20~40mm程度である。同位土。			
16							上部は風化が著しく、粘土化している所がある。			
17					暗緑灰	まき土	下部は砂状を呈するが、よく締まっている。			
18							色調は、23m付近から黄緑灰を呈する。			
19										
20										

の地質分析図(表1)によれば、箱崎砂層と呼ばれる中砂の上面に占地していることになる。この砂層の形成時期はB・P2,500-3,000年頃といわれている。この砂丘も発掘区東端では谷部を形成し、遺構もなくなる。北側の市の児童公園建設予定地での調査でも、谷部が東側か北側に延びていることが判っていて、遺跡の北の限界を示している。地形的には、西から東に、さらに北へと緩やかに傾斜し、用地東端部では地表下3mを越す谷部となっている。

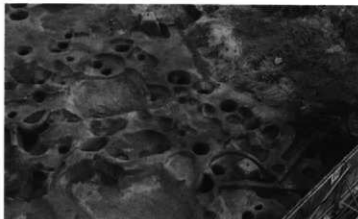
遺跡の層位は、地表下50-60cm前後が盛土や攪乱土、その下層は調査時に黄褐色砂層としたもので、南西側が10cm前後と薄く、北東から東側が40cm前後と厚く堆積し、古墳から奈良時代の包含層を形成している。その下層は淡黄褐色ないしは黄白色砂層ともいえる無遺物層となり、その上面が基本として遺構の切り込み面と思われる。従って、この砂丘の主丘部は西側にあって、遺跡の規模は南側と西側にさらに拡大する可能性がある。

一方、昭和50年頃の妙見宿舍として利用されていた建物跡の基礎穴や排水溝などは検出されたものの、吉塚撫車場時の遺構の存在は、時期は明らかではないが、井戸1基を検出しただけで、他は明確に確認できなかった。しかし、駅舎や操車場跡期の往時を偲ばせる駅弁容器をはじめ、駅弁用のお茶セット・酒瓶・ビール瓶・サイダー瓶・ラムネ瓶・牛乳瓶など、その他、生活全般にわたる主に明治・大正から昭和期前半の生活用具が、それらゴミ穴などから多量に発見されたことも成果の一つである。

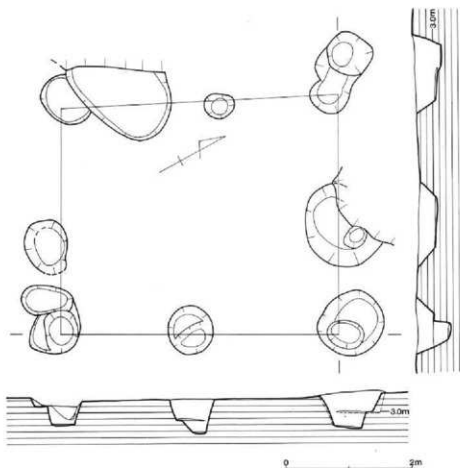
(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(図版5, 第4・5図)

発掘区南東端部から検出された2間×2間の建物跡である。梁間間平均195cm, 桁行間平均216cmを測る。柱穴は二段掘りと素掘りのものがある。桁行方位はN-26°-Eを指す。



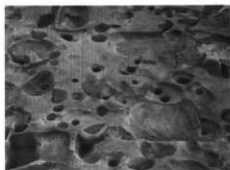
第4図 1号掘立柱建物



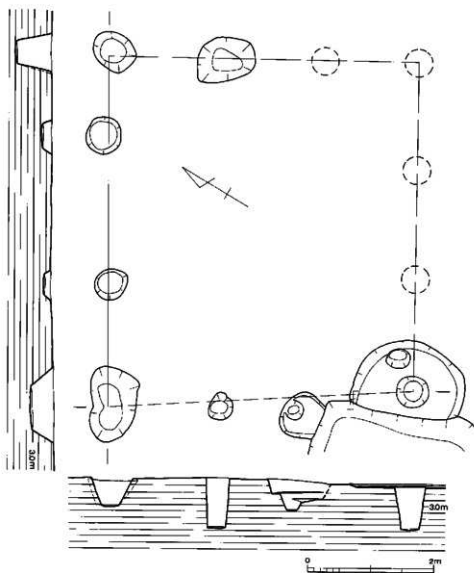
第 5 図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

2号掘立柱建物跡 (図版5, 第7図)

1号建物跡の北側から検出された方向を異にする建物跡で、柱穴がすでに削平されたもの、また、未検出のものもあるが、3間×3間の建物と思われる。梁間間平均166 cm、桁行間平均190 cmを測る。桁行方位はN-60°-Eを指す。



第 6 図 2号掘立柱建物

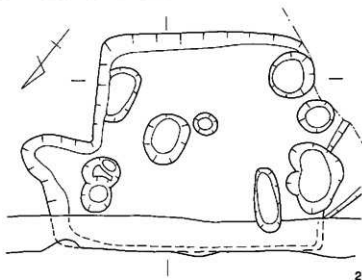
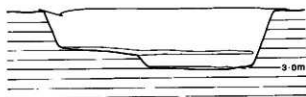
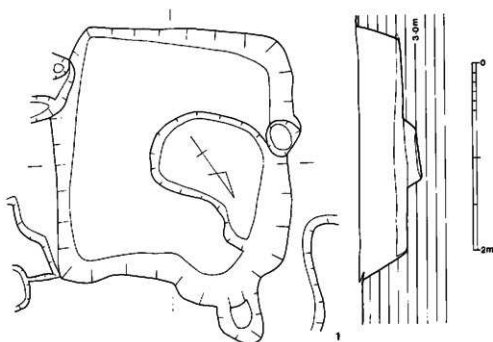


第 7 図 2号獨立柱建物跡実測図 (1/60)

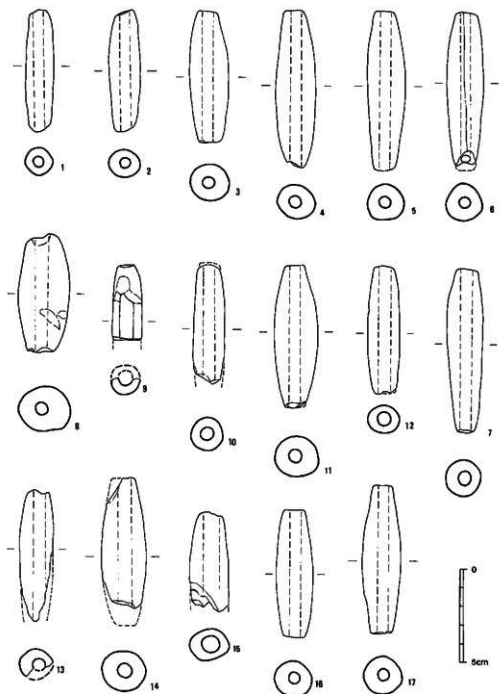
(2) 竪穴状遺構

1号竪穴 (図版6・7, 第8図1)

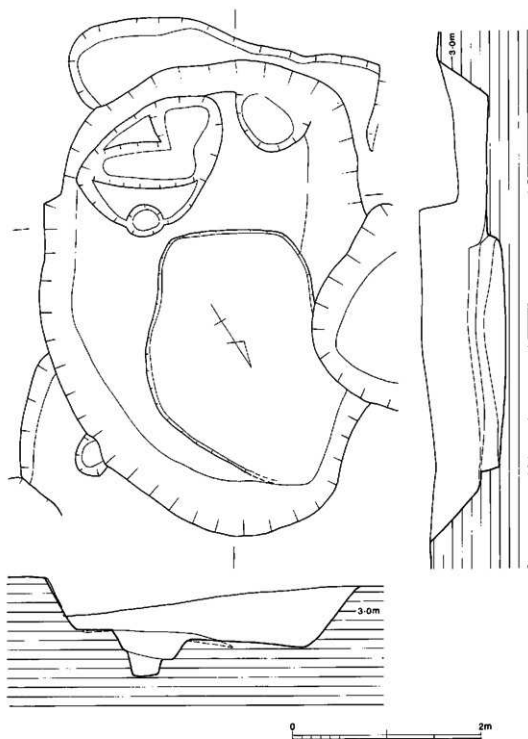
発掘区南西端部から検出された隅丸方形プランの竪穴で、床面西壁側に大きなビットが穿たれている。規模は、東西248 cm、南北265 cm、深さ51 cmを測る。埋土中からは、土師器・須



第 8 图 1·2号竖穴遗址平面图 (1/40)



第 9 圖 整穴内出土土鉢実測図 (1/2)



第 10 图 3号壁穴遺構実測図 (1/40)

恵器小片が若干と土鍾10点が出土した。

出土遺物 (図版39, 第9図)

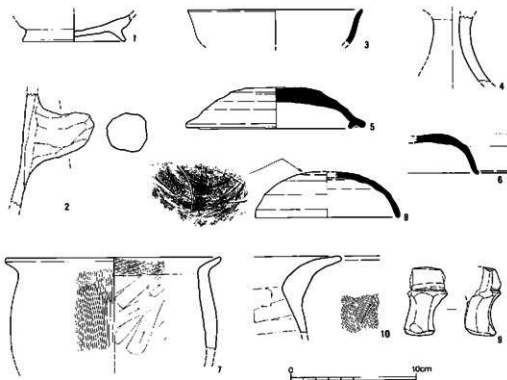
土鍾 (第9図1~7) 長さ・重さにより大きく3タイプがある。①長さ6.3~6.45 cm, 重さ13.2~14.3 gのもの(1・2), ②長さ6.9 cm, 重さ25.34 gのもの(3), ③長さ8.05 cm, 重さ27~28.77 gのもの(4~7)の3種類である。色調は淡黄灰色ないしは灰色を呈し, 焼成はいずれも良好である。

2号竪穴 (図版7, 第8図2)

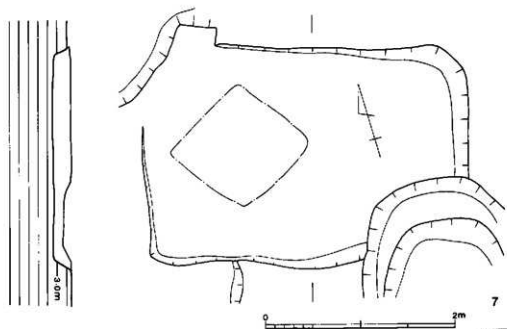
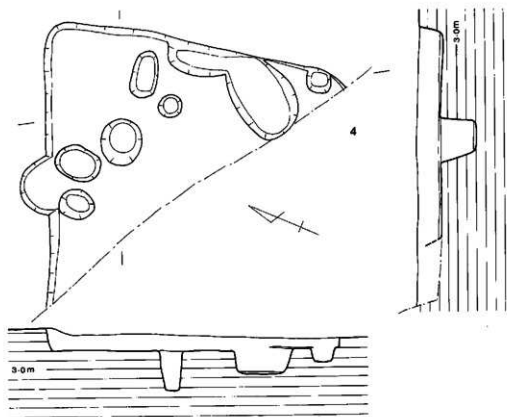
1号竪穴の南東側から検出された方形プランの竪穴で, 北壁は新しい溝で欠失している。床面上からは8個のビットが検出された。埋土中からは土師器小片が少量と土鍾1点が出土しただけである。規模は現存する部分で東西255 cm, 南北200 cm, 深さは南壁で25.5 cmを測る。

出土遺物 (図版39, 第9図)

土鍾 (第9図8) 大きさ・重さとも他と異なる特異なタイプである。長さ6.2 cm, 最大径2.8 cm, 重さ約38 gを測る。色調は黄褐色を呈し, 焼成はやや不良である。



第 11 図 竪穴遺構内出土土器実測図 (1/3)



第 12 圖 4・7号竖穴遺構実測図 (1/40)

3号竖穴 (図版8, 第10図)

2号竖穴の東側から検出された楕円形プランの竖穴で、西壁の一部は新しい攪乱坑で欠失している。床面は二段掘りで、東壁から南側がベット状をなし、南壁際にはビットが穿たれている。埋土中から土師器・須恵器小片が少量と土鍾片1点、紡錘車片1点が出土した。規模は東西343cm, 南北505cm, 深さ中央で88cmを測る。

出土遺物 (図版38, 第9・11・13図)

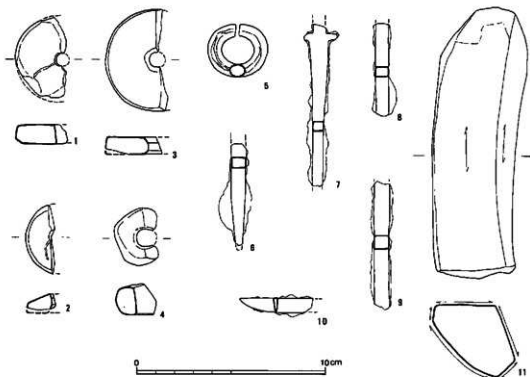
土師器碗 (第11図1) 外傾の強い高台付碗で、復原高台径8.2cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明で、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

土鍾 (第9図9) 半欠品で、現存長3.9cm, 最大径1.5cmを測る。色調は淡灰色を呈し、焼成も良い。

紡錘車 (第13図1) 半欠品で、滑石製の紡錘車である。復原径約4.6cmを測る。

4号竖穴 (図版8, 第12図)

発掘区南東端部から検出された方形プランをなすと思われる竖穴で、その大半は用地外のた



第13図 石製品・土製品・青銅器・鉄器実測図 (1/2)

め未掘である。現存部での規模は、東西305 cm、南北320 cm、深さ北壁で22 cmを測る。床面
上から8個のビットが検出されたものの、その配列からすれば柱穴かどうかは不明である。埋
土中からは少量の土師器・須恵器小片が出土したのみである。

出土遺物（第11図）

土師器把手（第11図2） 甔の把手の資料で、外面指ナデ、内面粗い刷毛で仕上げている。
色調は外面黄褐色、内面茶褐色を呈し、焼成は良好である。

5号竪穴（第3図）

4号竪穴に切られた状態で検出された竪穴で、北壁側の一部を発掘しただけである。床面か
らは3個のビットが検出された。規模は、確認できた部分で東西266 cm、南北135 cm、深さ北
壁で14 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器小片少量と土鏝4点が出土した。

出土遺物（図版39、第9図）

土鏝（第9図10・11） 11はほぼ完形品で、長さ7.4 cm、最大径2.15～2.35 cm、重さ33.14
gを測る大型タイプである。色調は淡灰色を呈し、焼成も良好である。

6号竪穴（第3図）

5号竪穴にその大半を切られた状態で検出された竪穴で、北壁側の一部を残すだけである。
現存部での規模は東西170 cm、南北52 cm、深さは北壁で18 cmを測る。埋土中からは土師器・
須恵器小片が若干出土した。

出土遺物（第11図）

須恵器杯（第11図3） 復原口径14 cmを測る杯身で、体部内外ともロクロヨコナデで仕上げ
ている。色調は灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。

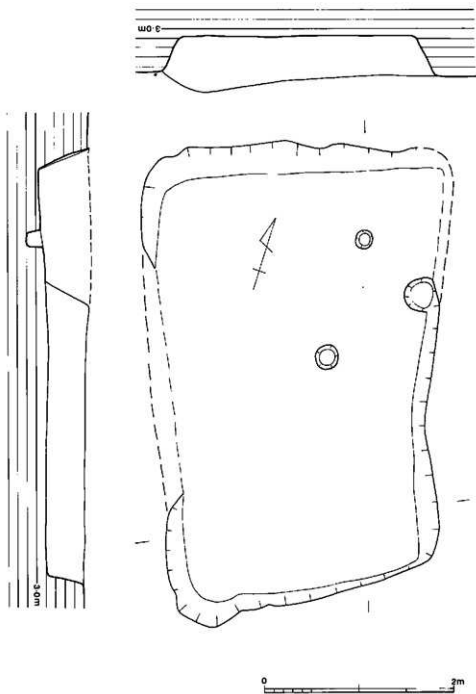
土師器高杯（第11図4） ラッパ状に開く高杯の脚部破片である。色調は褐色を呈し、焼成
は良好である。

7号竪穴（図版9、第12図）

発掘区中央よりやや北西寄りから検出された長方形プランの竪穴で、北西隅は削平され欠失
し、南東隅は40号土壌に切られている。埋土中からは須恵器・土師器とともに、土鏝6点が出
土した。規模は、東西345 cm、南北235 cm、深さは約16 cmを測る。

出土遺物（図版35・39、第9・11図）

須恵器杯蓋（第11図5・6） 5は身受けの返りを有す低平な杯蓋で、6は体部外面に不明
瞭ながらも屈折稜を有す杯蓋の小破片である。6は天井部外面静止ヘラ削り、7は回転ヘラ削
り、6の天井部内面と体部内外他はロクロヨコナデ、7は天井部内面をナデ、体部内外はロク



第 14 图 8 号竖穴遗构实测图 (1/40)

ロヨコナデで仕上げている。6は黄褐色を呈す、土師質の土器で、7は暗赤紫色で、焼成は良好・堅緻である。6は復原体部径14.1 cm、器高3.1 cmを測る。

土師器甕 (第11図7) 緩やかに外反するく字状口縁の小型の甕で、胴部外面は二次焼成を受けて赤変し、一部口縁部付近には煤の付着がみられる。調整は胴部外面刷毛、内面へう削り、口縁部は刷毛のあと内外をヨコナデして仕上げている。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。

土鍾 (第9図12-15) 12がほぼ完形である他は、いずれも一部欠損している。12は長さ6.6 cm、最大径1.5 cm、重さ16.13 gを測る。13・14の体部には製作時に形成された屈折稜がみられ、体部が変形している。15が茶褐色の他は、黄褐色を呈し、焼成は12が若干軟質の他は、良好である。

8号竪穴 (図版9, 第14図)

1号竪穴の北側にあり、3号土壌と6～8号土壌にそれぞれ切られた状態で検出された隅丸長方形プランの竪穴で、西壁と東壁北東隅を欠失している。床面からは小さなビット2個が検出された。規模は現存部で、東西295 cm、南北490 cm、深さは南壁で40 cm、北壁で57 cmを測る。出土遺物としては土師器・須恵器の小破片が少量と、土鍾5点がある。

出土遺物 (図版35・39, 第9・11図)

須恵器杯蓋 (第11図8) 体部外面に不明瞭ながらも屈折稜を有す杯蓋で、天井部外面は丸味をもち、へう記号が施されている。調整は天井部外面を回転へう削り、他はクロロヨコナデ仕上げである。復原口径11.5 cm、器高3.6 cmを測る。色調は暗灰色で、焼成良好である。

須恵器硯 (第11図9) いわゆる円面硯の脚部の破片で、獣脚の退化した型式である。脚部はへう削りで面取りし、縁台部との取付部は段を形成している。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。

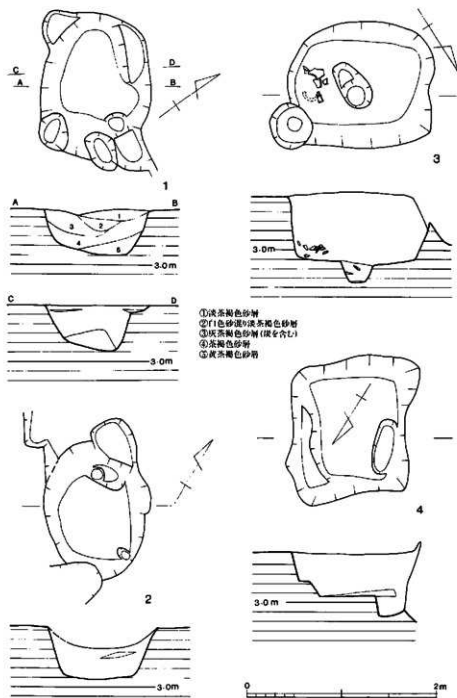
土師器甕 (第11図10) く字状に強く外反した甕の口縁部付近の小破片である。調整は胴部外面を細かい刷毛、内面はへう削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。内外とも煤の付着が著しい。色調は茶褐色で、焼成は良好である。

土鍾 (第9図16・17) 16は中型、17は大型のタイプで、長さは16が5.7 cm、17が7.75 cm、重さは16が22.78 g、17が27.58 gである。16の体部には製作時に形成された屈折稜がみられ、平坦面をなしている。

(3) 土 壌

1号土壌 (図版10, 第15図)

1号竪穴の南側から検出された楕円形プランの土壌で、西壁と東壁の一部で新しい時期の



第 15 图 1~4号土坑实测图 (1/40)

ビットが重複している。底面形は不整形で、北壁の一部にテラスを形成する。埋土中には炭化物が少量含まれ、獣骨小片も少量出土した。出土遺物としては土師器・須恵器小片が少量出土しただけである。規模は東西152 cm、南北116 cm、深さ北壁で47 cmを測り、少し深くなっている。

2号土壌 (第15図)

1号竪穴の北東から検出された楕円形プランの土壌で、底面北壁と南壁側からは小ビットが検出された。埋土中からは土師器・須恵器小片が少量と土鍬片1点が出土した。規模は東西112 cm、南北146 cm、深さ中央で55 cmを測る。

出土遺物 (図版39, 第16図)

土鍬(第16図18) 半欠品で、現存長3.85 cm、最大径1.95 cm、重さ10.64 gを測る。色調は黄灰褐色を呈し、焼成はややあまい。

3号土壌 (図版10, 第15図)

2号土壌の北側にあり、6号土壌を切った状態で検出された楕円形プランの土壌である。西壁は一部新しい撹乱坑と重複している。底面中央からはビットが検出された。出土遺物は底面よりわずかに浮いた状態で製塩土器や須恵器甕、土鍬などが出土した。土壌の規模は東西156 cm、南北135 cm、深さ72 cmを測る。

出土遺物 (図版35・39, 第16・17図)

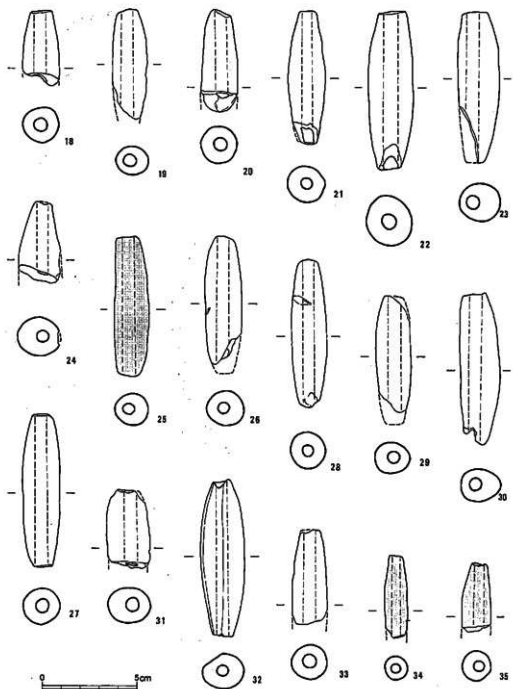
製塩土器(第17図11) 緩やかに外反したく字状口縁に球形の胴部がつく甕で、復原口径14.6 cm、現存部での器高は15.1 cmを測る。調整は胴部外面を粗い平行タタキ目、内面は刷毛、口縁部内外はヨコナデし、端部はつまみ上げ気味に仕上げている。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面は二次焼成のためか赤変している。

土師器甕(第17図12) 球形の胴部資料で、胴部最大径27.6 cmを測る。調整は胴部外面をカキ目、内面を青海波文のタタキで仕上げている。色調は茶褐色を呈す土師質の土器で、外面には煤の付着がみられる。いわゆる擬須恵土師器である。

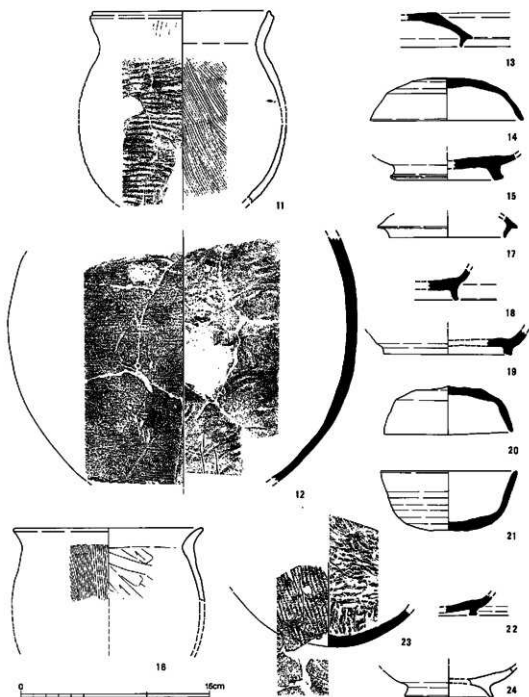
土鍬(第16図19) 3/4を残す欠損品で、現存長5.7 cm、最大径1.6~1.85 cm、重さ12.73 gを測る。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は不良である。

4号土壌 (第15図)

5号と6号土壌の間から検出された方形プランの土壌で、西壁側は新しい撹乱坑で欠失している。東壁には一段テラスを設け、床面北西隅には細長いビットが穿たれている。埋土中からは炭化物小片とともに、土師器・須恵器小片が少量と土鍬片が出土した。土壌の規模は東西135



第 16 圖 王城內出土土鐘實測圖 1 (1/2)



第 17 圖 土葬内出土土器実測図 1 (1/3)

cm, 南北143 cm, 深さ44 cm を測る。

出土遺物 (第17図)

須恵器杯蓋 (第17図13) 身受けの返りを有す低平な杯蓋の小片である。調整は天井部外面を静止ヘラ削り, 体部内外はクロロコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し, 焼成は良好である。

5号土壌 (第3図)

4号土壌の南側に近接して検出された楕円形ブランの土壌で, 西壁側にテラスをもっている。規模は現存部で東西145 cm, 南北70 cm, 深さ55 cm を測る。出土遺物は土師器・須恵器片が若干出土しただけである。

6号土壌 (第18図)

3号土壌に切られた状態で検出された方形ブランの土壌で, 北壁は欠失している。埋土中には4号土壌と同様, 炭化物小片が少量含まれていた。出土遺物としては土師器・須恵器片が多数と土鍬片2点が出土した。土壌の規模は東西164 cm, 南北180 cm, 深さ60 cm を測る。

出土遺物 (図版39, 第16・17図)

須恵器杯蓋 (第17図14) 体部外面に不明瞭ながらも屈折線を有す杯蓋で, 復原口径12 cm, 器高3.3 cm を測る。調整は天井部外面を回転ヘラ削り, 内面ナデ, 体部内外はクロロコナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し, 焼成は良好・堅緻である。

土鍬 (第16図20) 1/2強を残す欠損品で, 現存長5.2 cm, 最大径1.85 cm, 重さ14.55 g を測る。色調は黄灰褐色を呈し, 焼成も良好である。

7号土壌 (第18図)

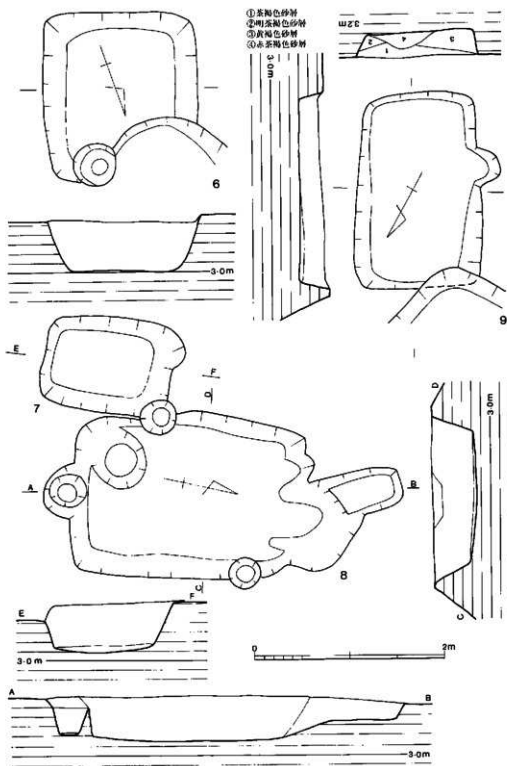
6号土壌の北側にあつて, 8号土壌の西側に近接して検出された隅丸長方形ブランの土壌である。規模は東西100 cm, 南北139 cm, 深さは中央がやや深く51 cm を測る。遺物としては土師器小片が若干出土しただけである。

8号土壌 (図版11, 第18図)

7号土壌の東側に接して検出された長方形ブランの土壌で, 北壁は数個のビットと重複し, 変形している。南西隅床面にはビットが穿たれている。埋土中からは炭化物小片とともに, 多数の土師器・須恵器片が出土した。土壌の規模は東西177 cm, 南北240 cm, 深さ46 cm を測る。

出土遺物 (第17図)

須恵器碗 (第17図15) 高台付碗の破片で, 高台は外傾し, 疊付けは傾斜している。復原高



第 18 图 6~9号土质实测图 (1/40)

台径9 cmを測る。調整は底部内外をナデ、他はロクロヨコナデで仕上っている。色調は外面黄褐色、内面淡灰色を呈し、焼成は良い。

9号土壙（図版11、第18図）

5号土壙の北側にあって、60号土壙の一部北西隅を切られた状態で検出された隅丸長方形プランの土壙である。規模は東西132 cm、南北206 cm、深さ27 cmを測る。埋土中には炭化物小片が少量含まれていたが、底面中央やや東壁寄りには酸化鉄を思わせる褐色土が堆積していた。出土遺物としては底面より浮いた状態で土師器片が少量と土玉1、土鏝7点が出土した。

出土遺物（図版38・39、第13・16図）

土鏝（第16図21・22） 一部が欠けているもののほぼ完形品である。21は中型品で重さ約21.71 g、22は大型品で約51.2 gを測る。

土玉（第13図4） 半欠品で、径約3.1 cmを測る。色調は淡黄褐色で、焼成も良い。

10号土壙（第19図）

8号土壙の北側から検出された長方形プランの土壙で、北西隅は新しい掘乱坑で欠失している。埋土中からは他の土壙と同様、炭化物小片が含まれ、出土遺物は少量の土師器・須恵器小片のみである。土壙の規模は東西122 cm、南北177 cm、深さ36 cmを測る。

11号土壙（図版12、第19図）

2号竪穴の東側から検出された楕円形プランの土壙で、北壁の一部を除き、その大半は新しい掘乱で削平されている。現存部での規模は東西196 cm、南北143 cm、深さは残りの良い北壁側では87 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器片が少量と土鏝1点が出土した。

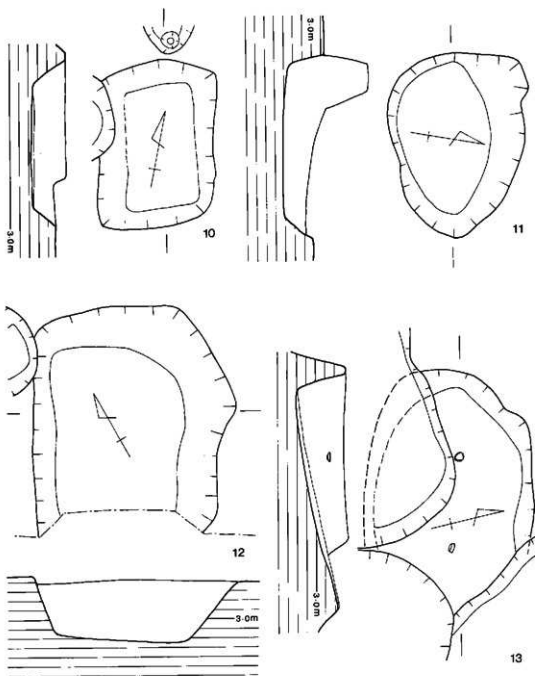
出土遺物（図版39、第16・17図）

土師器壺（第17図16） 緩やかに外反するく字状口縁を有す甕で、復原口径15.1 cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面へら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上っている。外面には煤の付着がみられ、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

土鏝（第16図23） 4/5を残す大型品の資料で、長さ7.9 cm、最大径2.3 cm、重さ約31.54 gを測る。色調は黄褐色で、焼成良好である。

12号土壙（図版12、第19図）

3号竪穴の南側から検出された隅丸長方形プランの土壙で、南側は用地外のため未発掘である。現存部での規模は東西が最大部で215 cm、南北238 cm、深さは東壁側が若干深く65 cmを測る。埋土中からは炭化物小片とともに、土師器・須恵器片が少量と土鏝片が出土した。



第 19 图 10—13号土坑实测图 (1/40)

出土遺物（第17図）

須恵器杯蓋（第17図17） 身受けの返りを有す杯蓋で、復原口径9.1 cmを測る。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。

須恵器椀（第17図18・19） いずれも高台付椀の破片資料である。18は外傾する高台で、19は短く直立する高台で、畳付けは内傾している。両者とも調整はクロコヨコナデ仕上げである。色調は18が淡黄灰色、19が灰色を呈し、焼成はいずれも良好・堅緻である。

13号土壌（図版13、第19図）

5号土壌の東側から検出された土壌で、南壁西半部を新しい攪乱坑、東半部は14号土壌に切られるなど、その大半を欠失している。床面も東から西側に傾斜し、床面よりかなり浮いた状態で須恵器の杯蓋・杯身が2個出土した。現存部での規模は東西261 cm、南北175 cm、深さは深い西壁側で52 cmを測る。

出土遺物（図版35、第17図）

須恵器杯蓋（第17図20） 体部外面の屈折稜が不明瞭な小型の杯蓋で、口径10 cm、器高3.8 cmを測る。調整は天井部外面を回転ヘラ削り、他はクロコヨコナデで仕上っている。色調は灰色を呈し、焼成も良い。

須恵器杯身（第17図21） 復原口径10.8 cm、器高5.7 cmを測る杯身で、外底部は回転ヘラ削り、内底部ナデ、体部内外はクロコヨコナデで仕上っている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。

14号土壌（図版13、第20図）

13号土壌を切った状態で検出された不整形プランの土壌で、断面はなだらかなU字状をなし、底面からは2個のビットが検出された。その内のP1は木の根の跡である。規模は東西195 cm、南北139 cm、深さ中央で59 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器片が少量と土鏝片2点が出土した。

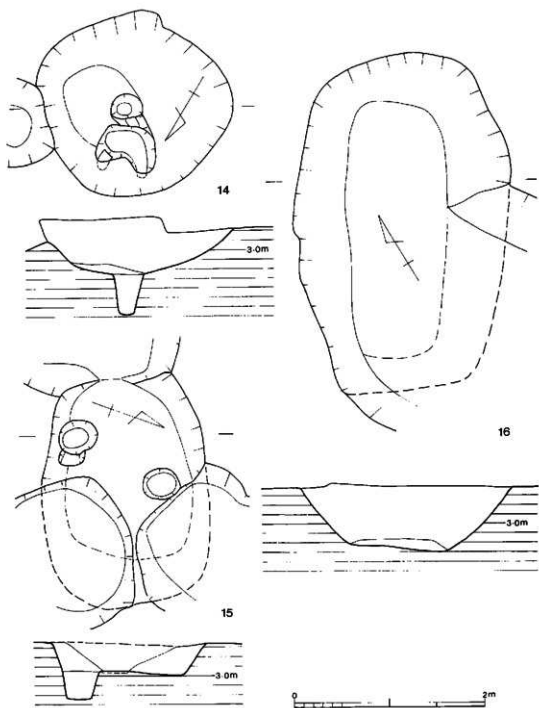
出土遺物（第17図）

須恵器椀（第17図22） 高台付椀の小片で、短く直立した高台で、畳付けは平坦である。内外ともクロコヨコナデ仕上げである。

須恵器甕（第17図23） 底部付近の資料で、外面は格子目文のタタキ、内面は青海波文のタタキで仕上っている。色調は灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。

15号土壌（第20図）

14号土壌の北側にあって、新しい攪乱坑や近代の井戸などで破壊され、その大半を欠失した



第 20 图 14~16号土坑实测图 (1/40)

楕円形プランの土壌で、底面から3個のビットが検出された。現存部での規模は東西240 cm、南北172 cm、深さは北壁で31 cmを測る。埋土中から土師器・須恵器小片が少量出土しただけである。

16号土壌（図版14、第20図）

3号竪穴の東側、12号土壌の北側にあって、東壁の一部と南壁が新しい擾乱坑で欠失した胴張り長方形プランの土壌である。現存部での規模は東西225 cm、南北約360 cm、深さは東壁側で約70 cmを測る。埋土中からは炭化物小片とともに、土師器・須恵器片が少量と土鍬片1、不明鉄器1点が出土した。

出土遺物（図版39、第16・17図）

土師器碗（第17図24） 復原高台径4 cmを測る高台付碗の破片資料で、高台は強く外反する。内面は器面風化のため不明であるが、体部外面と外底部はクロロコナデ仕上げである。色調は外面が黄褐色、内面が褐色を呈し、焼成は良好である。

土鍬（第16図24） 半欠品で、現存長4.1 cm、最大径2.25 cm、重さ14.44 gを測る。

17号土壌（第21図）

16号土壌の東側にあって、北壁と西壁の大半を新しい擾乱坑で欠失した楕円形プランの土壌である。現存部での規模は東西180 cm、南北120 cm、深さ約13 cmを測る。埋土中からは土器小片が数点出土しただけである。

18号土壌（第21図）

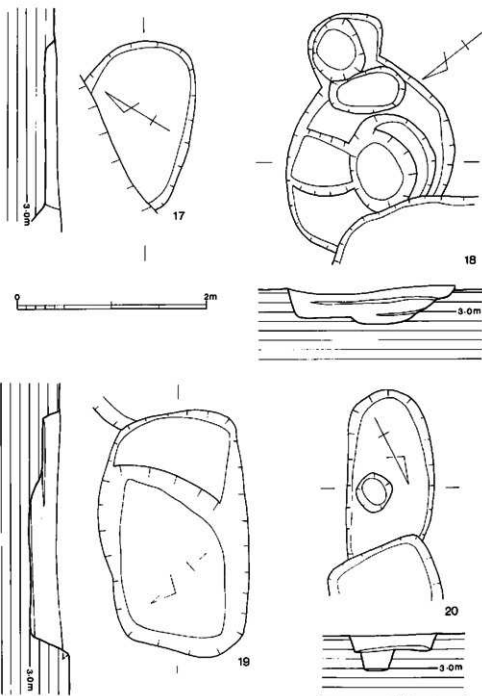
17号土壌の東側から検出された楕円形プランの土壌で、北東側は明確ではないが土壌状をなす遺構に切られている。底面には3個のビットが穿たれているものの、中央のP1は1号掘立柱建物跡の柱穴と思われる。出土遺物は土器小片と土鍬片1点が出土しただけである。

19号土壌（図版14、第21図）

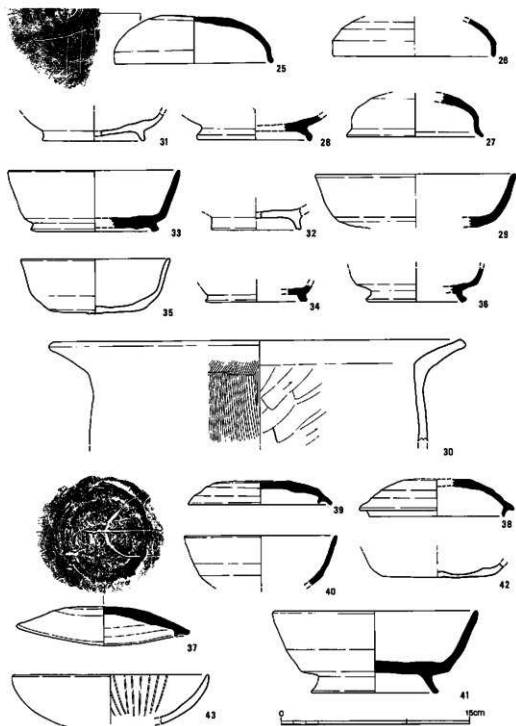
3号竪穴の北側から検出された隅丸長方形プランの土壌で、東壁側にテラスを設けている。埋土には他の土壌にもみられる炭化物小片が含まれるとともに、土師器・須恵器片が少量出土した。土壌の規模は東西260 cm、南北158 cm、深さはテラス部で18 cm、西壁側で80 cmを測る。

出土遺物（図版35、第22図）

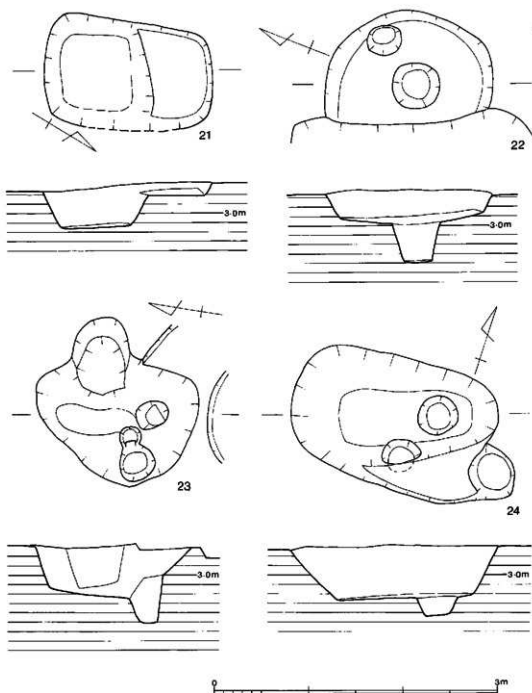
須恵器杯蓋（第22図25・26） いずれも体部外面の屈折稜が不明瞭な杯蓋である。25は口径12.5 cm、器高3.7 cmを測り、調整は天井部外面を回転ヘラ削り、他は内外ともクロロコナデで仕上げている。天井部外面にはヘラ記号が施されている。26は復原口径12.9 cmを測り、内



第 21 图 17~20号土壤实测图 (1/40)



第 22 图 土壤内出土土器实测图 2 (1/3)



第 23 图 21~24号上城実測図 (1/40)

外ともロクロヨコナデ仕上げである。色調は両者とも暗灰色を呈し、焼成も良好・堅緻な土器である。

20号土壙（第21図）

1号掘立柱建物跡の北側から検出された楕円形プランの土壙で、北壁側はビットに切られて欠失している。床面中央やや東壁側にはビットが穿たれている。現存部での規模は東西93 cm、南北165 cm、深さ16 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器小片が若干出土しただけである。

21号土壙（図版15、第23図）

20号土壙の東側から検出された隅丸長方形プランの土壙で、北半部がテラスをなし、南半部が一段下がっている。埋土中には炭化物小片も含むとともに、須恵器・土師器片が若干出土したのみである。土壙の規模は東西南壁部で116 cm、北壁部で100 cm、南北178 cm、深さは南壁で40 cm、北壁で13 cmを測る。

出土遺物（第22図）

須恵器蓋（第22図27） 口縁端部が外方に強く開く蓋で、おそらく小さな宝珠形の鈕がつくものと思われる。復原口径は10.8 cmを測る。調整は天井部外面を回転ヘラ削り、他は内外ともロクロヨコナデしている。色調は黒灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。

22号土壙（図版15、第23図）

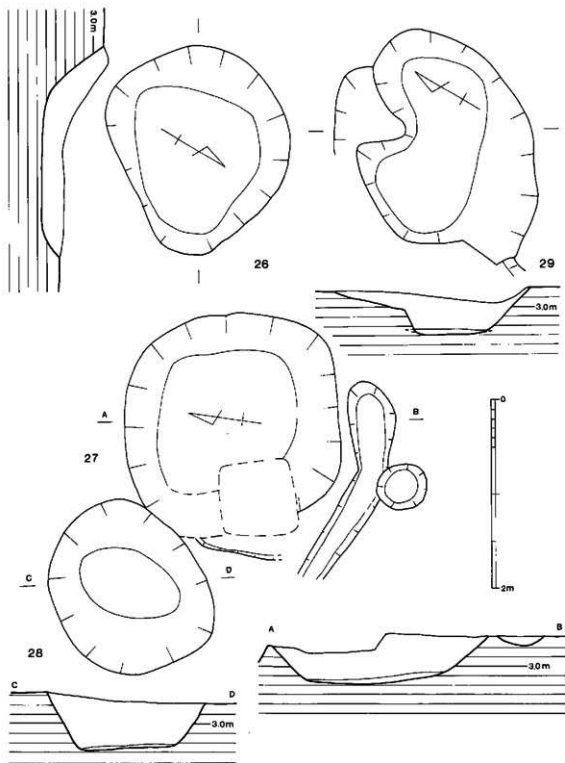
20号土壙の西側に近接して検出された円形プランの土壙で、南半部は攪乱坑で破壊されている。底面からは2個のビットが検出されているが、中央のP1は2号掘立柱建物跡の柱穴であり、建物より土壙が新しいことが判る。規模は現存部で東西120 cm、南北176 cm、深さ30～34 cmを測る。出土遺物としては土師器・須恵器小片が少量出土しただけである。

23号土壙（図版16、第23図）

22号土壙の北西側から検出された不整楕円形プランの土壙で、西壁で一部新しい時期のビットと重複している。底面は狭い長楕円形をなす。規模は東西が最大部で130 cm、南北172 cm、深さ約55 cmを測る。埋土中から他の土壙と同様、少量の炭化物小片が検出された。出土遺物も土師器・須恵器小片などが数点出土しただけである。

24号土壙（図版16、第23図）

23号土壙の北側から検出された東壁側が狭い楕円形プランの土壙で、底面東壁側にはビットが穿たれている。規模は東西220 cm、南北最大部で130 cm、深さ56 cmを測る。埋土中からは



第 24 图 26~29号土坑实测图 (1/40)

土師器・須恵器片などが少量出土した。

出土遺物（第22図）

黒色土器碗（第22図28） 高台付の黒色土器碗の小破片で、復原高台径9 cmを測る。調整は内外とも風化が著しく不明である。

25号土壌（第3図）

22号土壌の南側から検出された円形プランの土壌で、北側は攪乱坑で破壊されている。底面東壁際にはビットが穿たれている。埋土中からは炭化物小片少量と土師器・須恵器小片が若干出土した。現存部での土壌の規模は、東西135 cm、南北約80 cm、深さ約28 cmを測る。

26号土壌（図版17、第24図）

21号土壌の北東側から検出された不整楕円形プランの土壌である。規模は東西224 cm、南北最大部で200 cm、深さは残りの良い西壁で約60 cmを測る。埋土中から多数の土師器・須恵器片と土鍾などが出土した。

出土遺物（図版35・39、第16・22図）

須恵器杯（第22図29） 復原口径16 cmを測る杯で、内外ともクロコナデで仕上げた暗灰色を呈す焼成良好な土器である。

土師器壺（第22図30） く字状に大きく外反した口縁を有す甕で、復原口径33 cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面へう削り、口縁部内外はコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部付近外面は二次焼成により赤変している。

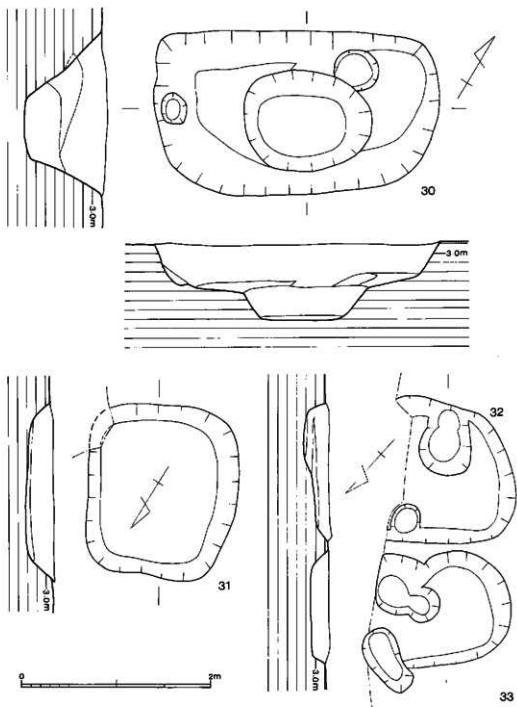
土鍾（第16図25～27） 25・26は中型、27は大型タイプである。25は長さ7.2 cm、径1.6～1.8 cm、重さ20.08 gを測る朱塗りの土鍾である。27は長さ7.85 cm、径1.9 cm、重さ28.14 gを測る。

27号土壌（図版18、第24図）

24号土壌の北側から検出された胸張りの隅丸方形プランの土壌で、西壁の一部を28号土壌に切られている。また、南壁に沿って幅35 cm、深さ10 cmの小溝が弧状にめぐっている。規模は東西約230 cm、南北230 cm、深さは中央で約52 cmを測り、断面は緩やかなU字状をなす。埋土中には他の土壌と同様、炭化物小片が含まれ、土師器・須恵器小片も少量出土した。また、弧状にめぐる溝内からは耳環（金環）が1個出土している。

出土遺物（図版44、第13・22図）

土師器碗（第22図31） 高台付碗の体部下半の破片資料で、復原高台径6 cmを測る。調整は外面は風化が著しく不明だが、内底部はナデ、体部下半内部はクロコナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。



第 25 图 30-33号土坑实例图 (1/40)

耳環（第13図5） 銅地金張り製の耳環で、径3.15 cmを測る。

28号土墳（図版19、第24図）

27号土墳の西壁の一部を切った状態で検出された楕円形プランの土墳である。規模は東西160 cm、南北190 cm、深さは残りの良い北壁側で58 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器などの小破片が少量と土鍾1点が出土した。

出土遺物（図版39、第16・22図）

土師器碗（第22図32） 高台付碗の高台部の破片で、復原高台径7.1 cmを測る。調整は器面風化のため不明で、色調は黄褐色を呈し、焼成は良い。

土鍾（第16図28） はほぼ完形の中型品で、長さ7.7 cm、最大径1.8 cm、重さは現存部で約24.04 gを測る。色調は淡黄褐色を呈し、焼成も良い。

29号土墳（第24図）

28号土墳の南側から検出された不整楕円形プランの土墳で、西壁側は攪乱坑で破壊されているものの、下位の壁面をわずかに残している。規模は東西215 cm、南北は最大部で190 cm、深さは中央で52 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器小片が少量出土したのみである。

30号土墳（図版20、第25図）

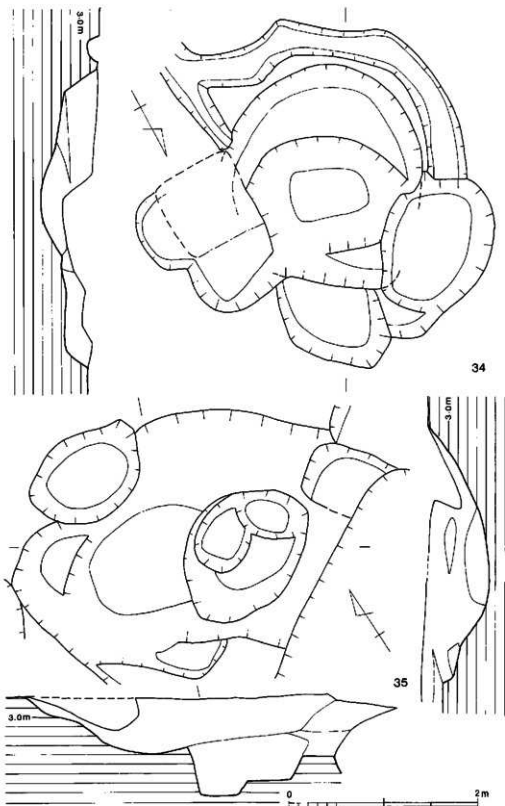
27号土墳の東側から検出された胴張りの長方形プランをなす土墳で、底面中央には大きなピットが掘り込まれている。埋土には他の土墳と同様な炭化物小片がかなり含まれていた。出土遺物としては土師器や須恵器片多数と土鍾4点などがある。土墳の規模は、東西302 cm、南北175 cm、深さは西壁側で45 cm、中央部で78 cmを測る。

出土遺物（図版39、第16・22図）

須恵器碗（第22図33・34） いずれも高台付碗の破片資料である。33は復原口径13.6 cm、高台径10.1 cm、器高4.8 cmを測る。調整は内底部ナデ、外底部はヘラ切りで、体部と高台部付近はクロコヨコナデで仕上げている。34はひとまわり小さい碗で、復原高台径6.1 cmを測る。両者とも高台は短く外傾している。

土鍾（第16図29～32） 29は2/3残、31は半欠品、30はほぼ完形、32は完形品で、29は中型品、30～32は大型品である。30は長さ7.9 cm、最大径2.1 cm、重さは約26.60 gを測り、断面は扁球形をなしている。32は製作時に形成された屈折稜を良く残す資料である。長さ8.2 cm、最大径2.35 cm、重さは32.45 gを測る。色調は淡茶褐色ないしは茶褐色を呈す。

31号土墳（図版20、第25図）



第 28 图 34·35号土坑实测图 (1/40)

発掘区北東隅付近から検出された隅丸方形プランの土壌で、一部南東隅は未掘である。規模は東西159 cm、南北185 cm、深さ30 cmを測る。他の土壌と同様に、埋土中にはかなりの炭化物小片が含まれていた。出土遺物は土師器・須恵器片が少量と土鍔片1点が出土している。

出土遺物（図版39、第16図）

土鍔（第16図33） 中型タイプの半欠品で、現存長5 cm、最大径1.8 cm、重さ14.4 gを測る。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。

32号土壌（図版21、第25図）

発掘区北東隅から検出された楕円形プランの土壌で、北半部は未掘である。底面には2個のビットが穿たれていた。現存部での規模は、東西150 cm、南北125 cm、深さ約18 cmを測る。遺物は土師器片が若干出土しただけである。

33号土壌（図版21、第25図）

32号土壌の西側に近接して検出された不整楕円形プランの土壌で、一部ビットと重複し、北半部は未掘である。現存部での規模は東西118 cm、南北152 cm、深さは約20 cmを測る。出土遺物は土器小片が若干出土しただけである。

34号土壌（図版21、第26図）

30号土壌の北側から検出された不整円形プランの土壌で、西壁から南壁に沿って幅約30 cm、深さ約12 cm前後の小溝が半弧状にめぐっている。土壌内は南壁側と北壁側にテラスを形成し、中央底面は緩やかなU字状をなす。土壌の規模は、現存部で東西197 cm、南北245 cm、深さは中央で約60 cmを測る。埋土中からは炭化物小片とともに、土師器・須恵器片が少量出土した。

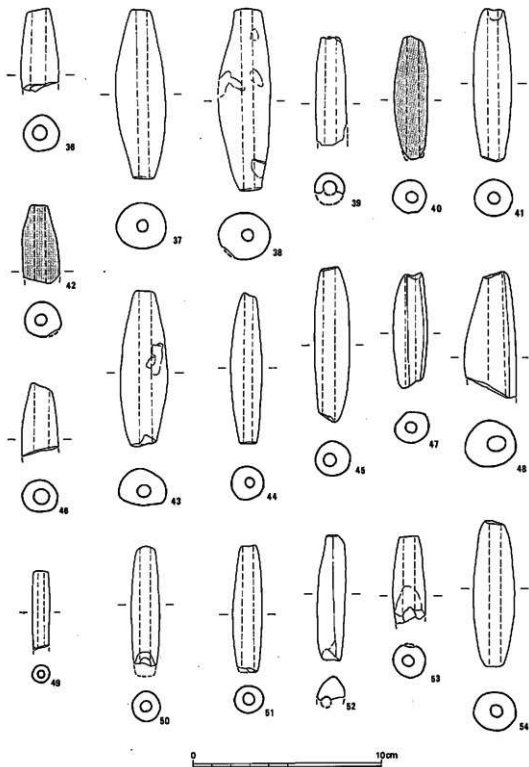
35号土壌（第26図）

30号土壌に東壁側を切られた状態で検出された不整楕円形プランの土壌で、底面には大きなビットが穿たれている。現存部での規模は、東西285 cm、南北約255 cm、深さは北壁側で約47 cmを測る。埋土中から土師器・須恵器片多数と土鍔8点が出土した。

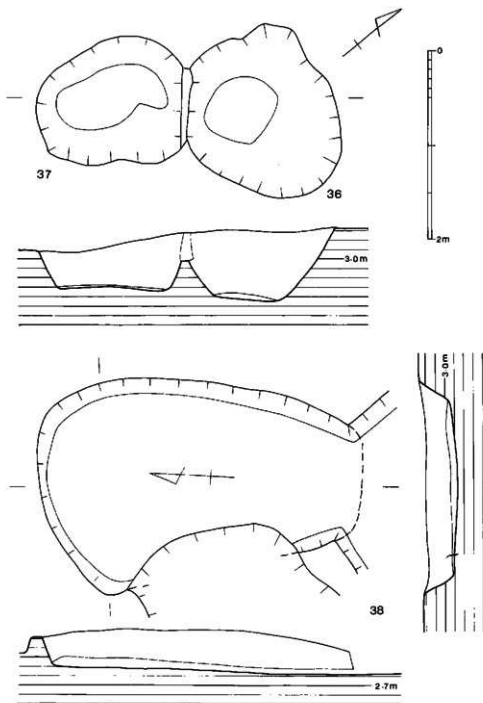
出土遺物（図版39・40、第16・27図）

土鍔（第16・27図34～38） 大・中・小の3タイプがある。34・35は小型品で、いずれも朱塗りの土鍔である。36は中型品、37・38は大型品で、37は長さ8.7 cm、最大径2.7 cm、重さ51.65 g、38は長さ9.3 cm、最大径2.7 cm、重さ50.36 gを測る。

36号土壌（図版19、第28図）



第 27 圖 土坑內出土土鏃實測圖 2 (1/2)



第 28 图 36~38号土坑实测图 (1/40)

28号土壌の西側に近接して検出された不整楕円形プランの土壌で、37号土壌とも南壁が接しているものの切り合い関係は明確でない。断面は緩やかなU字状をなしている。規模は東西185 cm、南北157 cm、深さは北壁側で77 cmを測る。出土遺物は土器小片が若干出土したのみである。

37号土壌（図版19、第28図）

36号土壌に南接して検出された楕円形プランの土壌で、底面はわずかに北側に傾斜している。土壌の規模は東西が最大部で140 cm、南北163 cm、深さ北壁側で約60 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器小片が若干出土した。

38号土壌（図版22、第28図）

37号土壌の西側から検出された胴張りの長方形プランの土壌で、西壁の一部と南壁は新しい攪乱坑で破壊され、欠失している。現存部での規模は、東西が北壁側で223 cm、南壁側で123 cm、南北は約330 cm、深さは約40 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器片多数と、土鍾、炭化物小片が多数検出された。

出土遺物（図版35・40、第22・27図）

須恵器杯身（第22図35） 復原口径11.8 cm、器高4.3 cmを測る杯身で、調整は外底部が風化のため不明であるが、内底部はナデ、体部内外はクロコナデで仕上げている。色調は褐色を呈す土師質の土器である。

土鍾（第27図39～41） 39・40は小型、41は中型品である。40はほぼ完形で長さ6.4 cm、最大径1.8 cm、重さ16.34 gの朱塗りの土鍾、41は完形品で長さ7.9 cm、最大径1.9 cm、重さは28.26 gを測る。

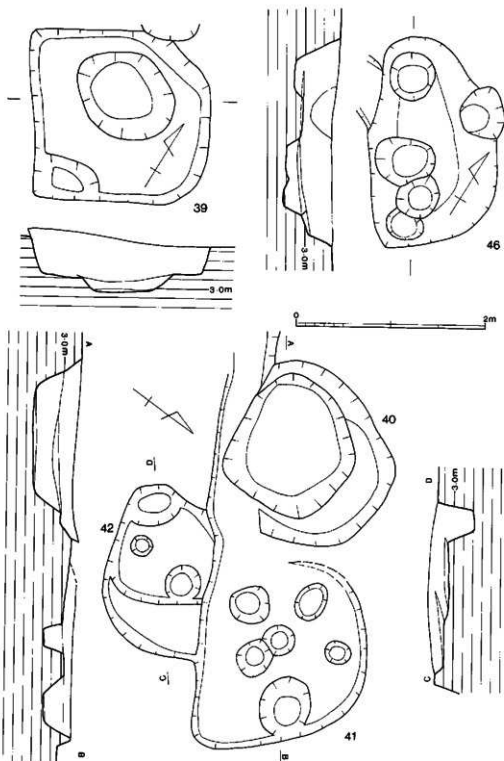
39号土壌（図版22、第29図）

9号土壌の北側に近接して検出された不整方形プランの土壌で、底面にはビットが2個穿たれている。土壌内からは土師器・須恵器片などが少量出土した。土壌の規模は東西約190 cm、南北182 cm、深さは残りのよい北壁側で48 cmを測る。

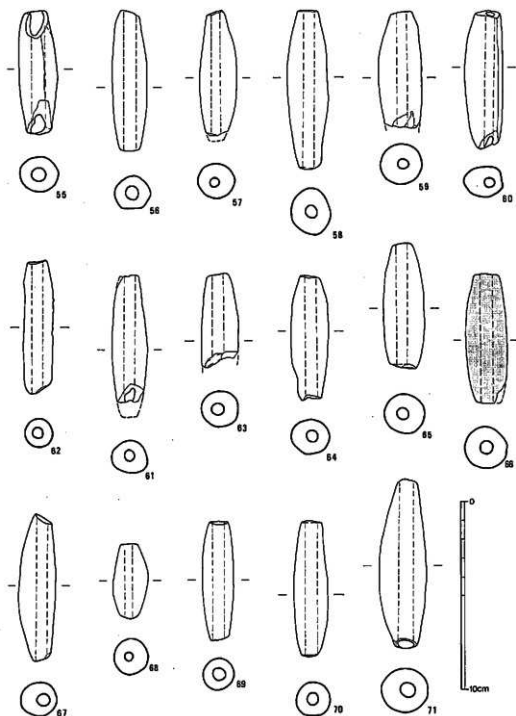
40号土壌（図版22、第29図）

7号壁穴の南東隅を切った状態で検出された胴張りの方形プランを呈す土壌で、北壁と東壁側にテラスを形成する。現存部での規模は東西175 cm、南北173 cm、深さは約50 cmを測る。埋土中からは他の土壌と同様、炭化物小片がかなり検出された。遺物としては土師器・須恵器片が少量と土鍾片2点が出土した。

出土遺物（図版40、第27図）



第 28 图 39~42·46号土壤尖测图 (1/40)



第 30 図 土質・ピット内出土土鉢実測図 (1/2)

土鍾（第27図42・43） 42は朱塗りの土鍾で中型品、43は大型品ではほぼ完形品である。43は長さ8.1 cm、最大径2.45 cm、重さ約31.9 gを測り、断面は扁球形に変形している。

41号土壙（図版24，第29図）

40号土壙の北東から検出され、42号土壙を切って作られた胴張りの方形プランを呈す土壙で、西壁は削平により欠失し、底面からはビット6個が検出された。規模は現存部で東西約175 cm、南北180 cm、深さ約11 cmを測り、全体に削平が著しい。埋土中からは若干の土師器・須恵器片が出土した。

出土遺物（第22図）

須恵器碗（第22図36） 高台付碗の小破片で、復原高台径8 cmを測る。高台は強く外方に開き、畳付けは外傾している。調整は内外ともクロロヨコナデ仕上げである。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。

42号土壙（図版24，第29図）

41号土壙に北壁側を切られた状態で検出された楕円形プランの土壙で、東壁にテラスを設け、西側底面には3個のビットが穿たれている。埋土中からは炭化物小片が少量検出されるとともに、土師器片・土鍾などが出土した。土壙の規模は東西162 cm、南北は現存部で110 cm、深さは約20 cmを測る。

出土遺物（図版40，第27図）

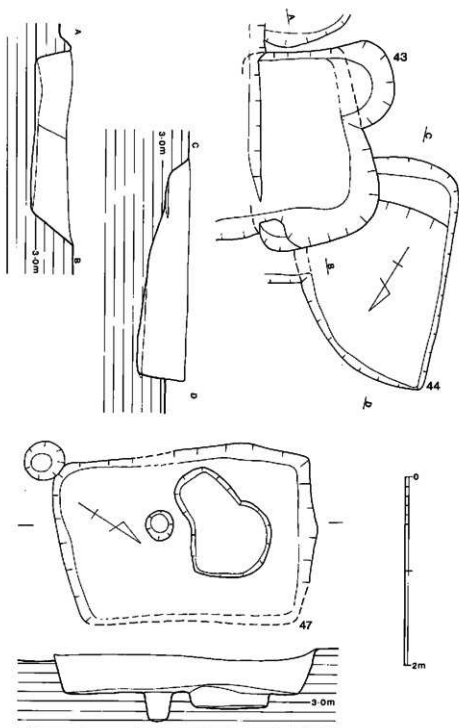
土鍾（第27図44・45） いずれも完形の中型品である。44は長さ7.75 cm、最大径1.9 cm、重さ20.35 g、45は長さ8 cm、最大径1.9 cm、重さ22.6 gを測る。色調は44が淡灰色、45が黄灰褐色を呈し、焼成は良好である。

43号土壙（第31図）

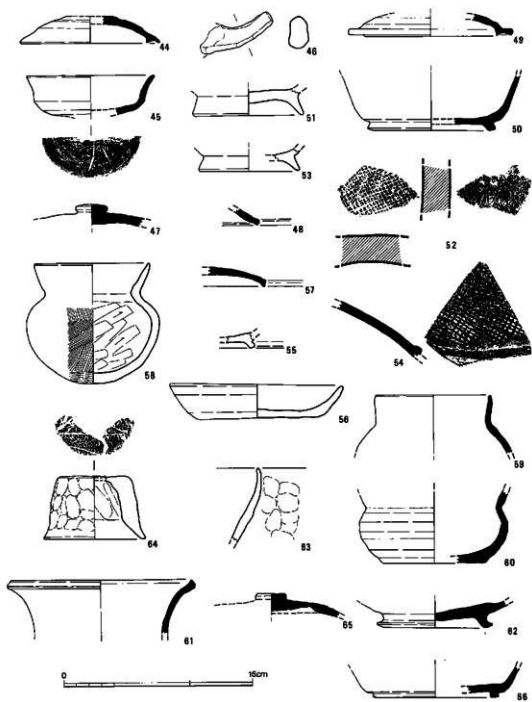
38号土壙の南側から検出された東壁側を擾乱坑で欠失した隅丸方形プランの土壙で、南西隅はビットと重複している。規模は現存部で東西125 cm、南北205 cm、深さ約40 cmを測る。埋土中からは床面より少し浮いた状態で土師器・須恵器がかなり出土し、他の土壙の少ないあり方とは極めて異っている。また、他の土壙の埋土にもみられた炭化物小片もかなり検出されている。

出土遺物（図版35・40，第22・27図）

須恵器杯蓋（第22図37～39） いずれも身受けの返りを有す杯蓋である。37の天井部外面にはヘラ記号がみられる。調整は天井部外面を37が静止ヘラ削り、38・39が回転ヘラ削り、体部内外はいずれもクロロヨコナデ仕上げで、37の天井部内面はナデで仕上げている。体部径は37



第 31 图 43·44·47号上壤实测图 (1/40)



第 32 图 上城內出土土器实测图 3 (1/3)

は歪んでいるものの13.6 cm, 38は復原体部径12.2 cm, 39は11.3 cm, 器高は37が最大部で3 cm, 38が2.9 cm, 39が1.8 cm を測る。色調は37が暗灰色, 38・39が暗赤紫色を呈し, 焼成は良好である。

須恵器碗(第22図40・41) いずれも高台付碗の破片資料である。40は復原口径12.2 cm を測る碗で, 高台部が欠失している。体部内外ともクロロコナデで仕上げている。41は高く強く張り出した高台を有す碗で, 体部外面下半の屈折稜も明瞭である。復原口径16.1 cm, 器高6.4 cm, 高台径10 cm を測る。調整は体部内外と高台付近はクロロコナデ, 内外底部はナデで仕上げている。

土師器杯(第22図42・43) 42は平底の杯で, 外面は風化が著しく調整は不明だが, 内面はクロロコナデのあとナデで仕上げている。43は丸底をなす杯で, 内面にはタテヘラ磨きの暗文が施され, 外面ヨコヘラ磨きで仕上げた褐色を呈す作りの良い土器である。

土鍾(第27図47・48) いずれも欠損しているが, 47は中型, 48は大型品である。47・48の体部には製作時に形成された平坦面を良く残している。色調は47が淡黄褐色, 48が茶褐色を呈し, 焼成は良好である。

44号土壌(第31図)

43号土壌に南東隅を切られた状態で検出された不整楕円形プランの土壌で, 南壁側にはテラスを形成し, 底面は北壁側に緩やかに傾斜している。規模は東西150 cm, 南北約240 cm, 深さは北壁で約50 cm を測る。埋土中からは土師器・須恵器などの破片多数と, 土鍾は破片も含めると15点も出土した。

出土遺物(図版36・40, 第27・32図)

須恵器杯蓋(第32図44) 身受けの返りを有す低平な杯蓋で, 復原体部径11 cm, 器高2.2 cm を測る。調整は天井部外面を静止ヘラ削り, 内面ナデ, 体部内外はクロロコナデで仕上げている。色調は外面灰色, 内面暗赤紫色を呈し, 焼成は良好である。

須恵器高杯(第32図45) 体部外面に屈折稜を有す小型高杯の杯部の破片資料と思われる。高杯には珍しいが, 外底部にはヘラ記号が施されている。復原口径は10.1 cm を測る。

土師器把手(第32図46) 細身の把手で, いかなる器種につくのかは不明である。

土鍾(第27図49～54) 三種類あって, 極小(49), 小型(50～53), 中型(54)に分けられる。51はほぼ完形品で, 長さ6.6 cm, 最大径1.6 cm, 重さ13.86 g, 54は完形品で, 長さ7.5 cm, 最大径2.3 cm, 重さ29.37 g を測る。52は製作時に形成された平坦面を明瞭に残し, 断面菱形を呈すようである。

45号土壌(第3図)

19号土壌に切られた状態で検出された隅丸方形プランの土壌で、西壁側は未掘のため不明である。現存部での規模は、東西約100 cm、南北約180 cm、深さは北壁側で約70 cmを測る。出土遺物としては土師器・須恵器片が少量出土しただけである。

出土遺物

須恵器杯蓋（第32図47・48） いずれも杯蓋の一部の資料で、47は宝珠形の鈕付近、48は口縁端部の小破片である。両者とも内外ともにクロコナデで仕上げている。色調はいずれも淡灰色を呈し、焼成は48は良いが47はやや不良である。

46号土壌（第3図）

16号土壌の東側から検出された不整楕円形プランの土壌で、底面には4個のビットが穿たれている。規模は東西135 cm、南北220 cm、深さ中央で約33 cmを測る。他の土壌と同様、埋土中には炭化物小片がかなり含まれていた。遺物としては土器小片若干と土鍾2点が出土したのみである。

出土遺物（図版40、第30図）

土鍾（第30図55・56） いずれも中型品で、56は完形品、長さ7.35 cm、最大径1.85 cm、重さ19.25 gを測る。55・56とも体部には製作時に形成された平坦面を残している。

47号土壌（図版25、第31図）

39号土壌の北側から検出された長方形プランの土壌で、底面にはビットが穿たれていて、東壁は新しい溝で破壊されている。規模は現存部で東西約165 cm、南北270 cm、深さ約40 cmを測る。遺物は土師器・須恵器・瓦などの破片と土鍾2点が出土した。

出土遺物（図版40、第30・32図）

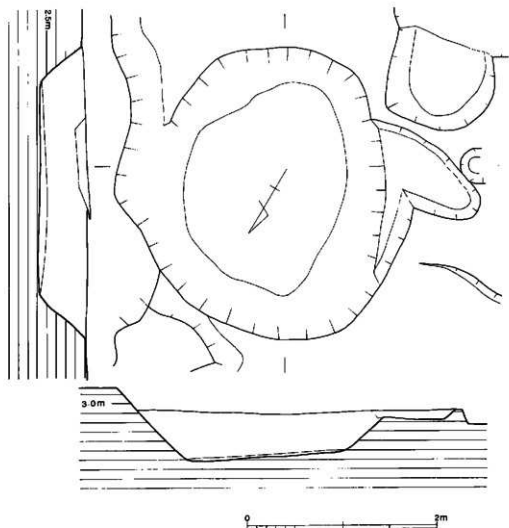
須恵器杯蓋（第32図49） 身受けの返りを有す低平な杯蓋で、復原体部径12.9 cmを測る。調整は内外ともクロコナデ仕上げである。

須恵器碗（第32図50） 口縁部を欠く高台付碗の破片資料で、復原高台径は10 cmを測る。高台は低く外方に開き、覺付けは外傾している。底部内外をナデで仕上げている他は、クロコナデ仕上げである。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

土師器碗（第32図51） 外方に強く開いた高台の資料で、復原高台径8.8 cmを測る。調整は底部内外ナデ、他はクロコナデ仕上げである。色調は外面黄褐色、内面淡灰色を呈す。

瓦（第32図53） 平瓦の小破片で、外面は無文で、内面は粗い布目を残している。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。

土鍾（第30図57・58） 57は中型、58は大型品である。58は完形で、長さ8.25 cm、最大径2.4 cm、重さは37.3 gを測る。58の体部にも製作時に形成された平坦面が残っている。色調は両者



第 33 図 48号土坑実測図 (1/40)

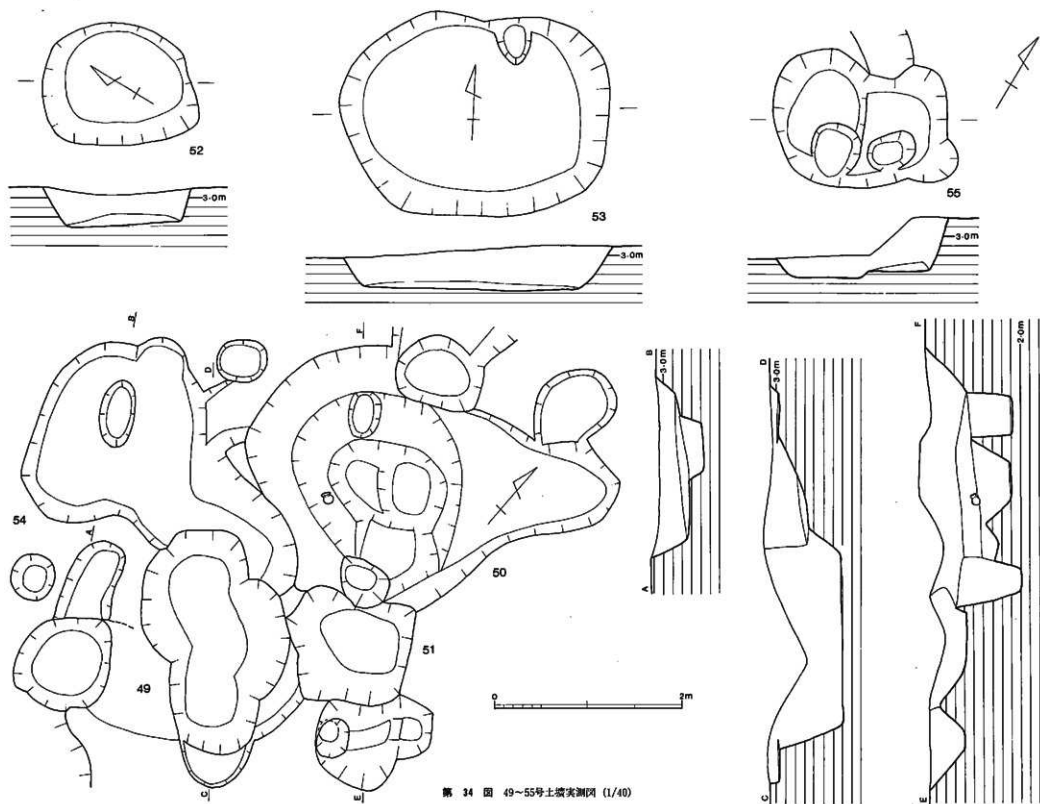
とも黄褐色を呈し、焼成は良好である。

48号土坑（第33図）

47号土坑の北側から検出された楕円形プランの土坑で、東西305 cm、南北は最大部で285 cm、深さは残りの良い南壁で77 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器片が少量と、炭化物小片が少量検出された。

出土遺物

土師器碗（第32図52） 高台付碗の高台付近の小破片で、復原高台径8 cmを測る。高台付近



第 34 图 49~55号土质探测网 (1/40)

はロクロヨコナデ、内底部はナデ調整である。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

49号土壙（図版25、第34図）

48号土壙の西側から検出された不整楕円形プランの土壙で、51・54号土壙を切って作られている。規模は東西最大部で140 cm、南北237 cm、深さは約80 cmを測る。埋土中からは少量の炭化物小片と土器片や土鍾が若干出土したのみである。

出土遺物（図版40、第30図）

土鍾（第30図59） 欠損しているが大型のタイプで、現存長6 cm、最大径2.2 cm、重さは26.86 gを測る。色調は淡黄褐色を呈し、焼成も良好である。

50号土壙（図版25、第34図）

49号土壙の北側にあつて、51・54号土壙に南壁と東壁の一部を切られた状態で検出された土壙で、底面には多数のビットが穿たれている。土壙内南壁側からは完形の土師器小型壺が出土した。また、埋土中からも土器片が若干出土した。

出土遺物（図版36、第32図）

土師器壺（第32図58） 完形の小型壺で、口径10.1 cm、器高9.5 cm、胴部最大径は10.5 cmを測る。胴部外面は細かい刷毛、内面はへら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。二次焼成を受けたのか外面全体に煤の付着がみられる。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。

51号土壙（図版25、第34図）

50号土壙を切った状態で検出された隅丸方形の小さな土壙である。規模は東西115 cm、南北112 cm、深さ30 cmを測る。埋土中には他の土壙にもみられる炭化物小片が検出されている。遺物は土師器片が少量出土しただけである。

52号土壙（第34図）

51号土壙の南東側から検出された楕円形プランの土壙である。規模は東西130 cm、南北163 cm、深さ約35 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器小片が少量と土鍾1点が出土しただけである。

出土遺物（図版40、第30図）

土鍾（第30図60） 一部欠損しているが中型品で、現存長7.2 cm、最大径2 cm、重さ24.58 gを測る。体部には製作時に形成された平坦面を残し、断面は扁球形をなしている。

53号土壙（図版26、第34図）

52号土壌の北側から検出された楕円形プランの土壌で、底面北壁際にビットが穿たれている。規模は東西290 cm、南北215 cm、深さは残りの良い東壁側で46 cmを測る。出土遺物は土師器・須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第32図）

須恵器壺（第32図54） 胴部破片で、肩部に1条の凸帯がめぐる。外面は格子目のタタキ、凸帯付近はヨコナデ、内面は青海波文のタタキのあとクロコヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。埋土上層出土。

54号土壌（第34図）

49号土壌に切られ、50号土壌を切って作られた不整楕円形の上層である。底面西側には楕円形のビットが穿たれている。規模は東西320 cm、南北は最大部で200 cm、深さは約30 cmを測る。埋土中からは緑釉陶器・土師器・内黒土器などの小破片が若干出土した。

出土遺物（図版36、第32図）

緑釉陶器（第32図55） 内外とも施釉された緑釉の高台付碗である。釉調は淡緑色を呈し、胎土は乳白色で精良である。

土師器杯（第32図56） 口径13.7 cm、器高2.7 cmを測る杯で、底部の切り離しは糸切り手法である。内底部ナデ、体部内外はクロコヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

55号土壌（図版27、第34図）

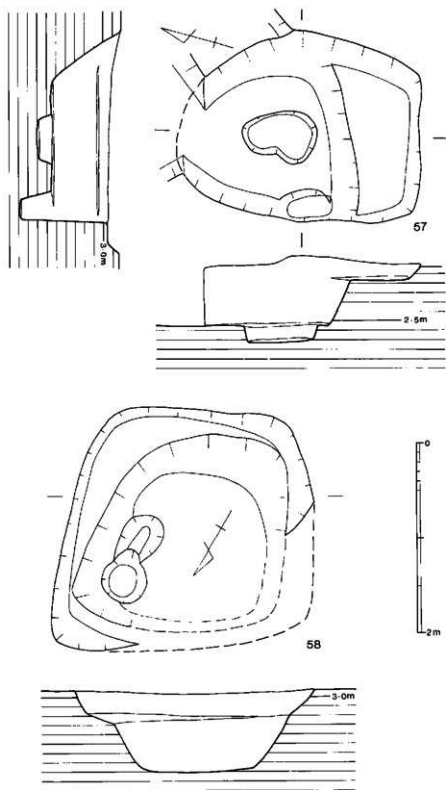
27号土壌の北側から検出された不整楕円形プランの土壌で、その大半は攪乱坑により削平されて浅くなっている。底面は東半部が一段高くテラスを形成し、底にはビットが穿たれている。規模は東西183 cm、南北は最大部で145 cm、深さは東壁側で58 cm、西壁側は20 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器小片が若干出土しただけである。

56号土壌（第3図）

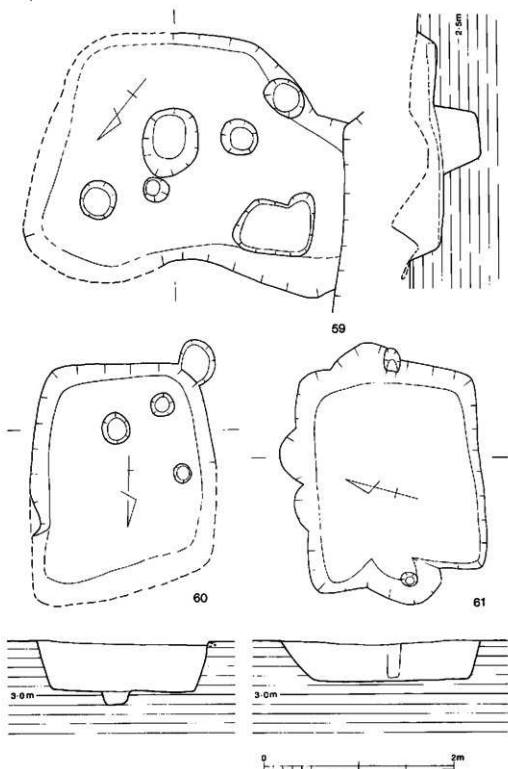
41号土壌の東側から検出された不整形な土壌で、他の土壌とは若干異なり、複数のビットが重複した遺構の可能性もある。その意味では北側の長方形プランの遺構のみを土壌として取り扱っておく。規模は東西242 cm、南北約103 cm、深さ約50 cmを測る。出土遺物としては土師器・須恵器片が少量と土鍬2点が出土した。

出土遺物（図版40、第50・32図）

須恵器杯蓋（第32図57） 口径部付近の小破片で、端部は断面三角形を呈す。内外ともクロコヨコナデ調整で、色調は灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。



第 35 图 57・58号土坑夹测图 (1/40)



第 38 図 59~61号土壺尖副図 (1/40)

土鍾(第30図61) 欠損品ではあるが中型品で、現存長6.5 cm, 最大径1.9 cm, 重さは18.05 gを測る。

57号土壙(図版28, 第35図)

56号土壙の北側から検出された不整長方形プランの土壙で、北壁は攪乱坑により破壊され、欠失している。底面は二段をなし、南壁側にテラスを形成する。遺物は何等出土しなかった。土壙の規模は東西200 cm, 南北は現存部で約250 cm, 深さは北壁側で60 cm, 南壁側では17 cmを測る。

58号土壙(図版29, 第35図)

30号土壙で切られた状態で検出された胴張りの方形プランを呈す土壙で、東壁から南壁側には三日月状の狭いテラスが形成されている。現存部での規模は、東西250 cm, 南北260 cm, 深さは83 cmを測る。埋土中からは炭化物小片が多数検出された。出土遺物は土師器・須恵器片が多数と鉄器片、土鍾片3点が出土した。

出土遺物(図版40・44, 第13・30図)

土鍾(第30図63) 半欠品で、長さ4.8 cm, 最大径2 cm, 重さは16.86 gを測る中型品である。

鉄器(第13図7) 上端左右に5 mm 前後の突起を有す用途不明鉄器で、断面は方形を呈す。現存長8.6 cmを測る。漁撈具の一種と思われる。

59号土壙(図版29, 第36図)

58号土壙の南側から検出された不整長方形プランの土壙で、ビットや攪乱坑でその大半を欠失している。現存部での規模は、東西約315 cm, 南北約240 cm, 深さは残りの良い北壁側で52 cmを測る。埋土には他の土壙と同様、炭化物小片が多数含まれているとともに、土師器・須恵器片が少量と土鍾5点が出土した。

出土遺物(図版40・44, 第30図)

土鍾(第30図64～67) 65・66が一部欠けるものの、ほぼ完形ないしは完形品である。長さは67か7.7 cmと大きい他は、6.4～6.7 cmで、重さも64が18.01 gと軽い、他は22.85 g～27.24 gを測る。66は朱塗りの土鍾である。

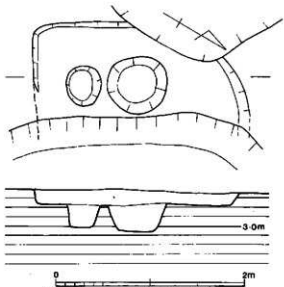
60号土壙(図版30, 第36図)

9号土壙を切って、8号土壙に切られた状態で検出された隅丸長方形プランの土壙で、北西隅と北東隅の一部が欠失している。床面からは3個のビットが検出された。規模は現存部で、東西195 cm, 南北245 cm, 深さは約50 cmを測る。埋土中からは土師器・須恵器片が多数出土

した。

出土遺物（図版36・44、第13・32図）

須恵器壺（第32図59・60） 59は短頸の直口壺で、復原口経9.1 cmを測る。内外ともロクロヨコナデ仕上げで、色調は暗灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。60は口縁部を欠くが広口の小型壺で、底部は平底である。復原底部径8 cm、胴部最大径11.7 cmを測る。調整は胴部外面と外底部が回転ヘラ削りのままで、内底部はナデ、胴部内面と口縁部内外はロクロヨコナデで仕上げている。



第 37 図 62号土壺実測図 (1/40)

須恵器甕（第32図61） 大きく立ち

気味に外反する口縁を有する小型甕の口頸部付近の破片資料で、復原口径14.4 cmを測る。内外ともロクロヨコナデ調整で、端部はつまみ出し気味に仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。

須恵器碗（第32図62） 高台付碗の底部付近の破片資料である。高台は強く外方に張り出し、畳付けは外傾している。復原高台径9 cmを測る。内外底部はナデ、他はロクロヨコナデ調整で仕上げている。

土師器（第32図63・64） 63は焼塩壺の破片で、外面には指頭圧痕がみられ、器面は二次焼成を受け赤変している。64は手埴の支脚形土器ともいえるもので、上面には木の葉痕がみられる。

砥石（第13図11） 砂岩製の仕上げ砥石で、研砥面は四面である。現存長14.5 cmを測る。

61号土壺（図版30、第36図）

10号土壺の北側から検出された隅丸長方形プランの土壺である。調査時には2号堅穴として取扱っていたものである。埋土中からは他の土壺と同様、炭化物小片が多数検出された。遺物としては土師器・須恵器などの破片が少量出土した。土壺の規模は、東西約220 cm、南北192 cm、深さは約40 cmを測る。

出土遺物（第32図）

須恵器杯蓋（第32図65） 低平で小さい宝珠形の鈕を有す杯蓋の破片資料である。色調は淡黄灰色を呈し、焼成も良好である。

須恵器碗(第32図66) 低くほぼ直に立つ高台を有す碗で、復原高台径10 cm を測る。内外ともクロコヨコナデ調整で仕上げた灰色を呈す焼成良好な土器である。

62号土墳 (図版32, 第37図)

12号土墳に切られた状態で検出された不整隅丸方形プランの土墳で、東壁側は攪乱坑で欠失している。底面には2個のビットが穿たれていて、埋土中からは多数の炭化物小片が検出された。遺物は土器小片が若干出土しただけである。

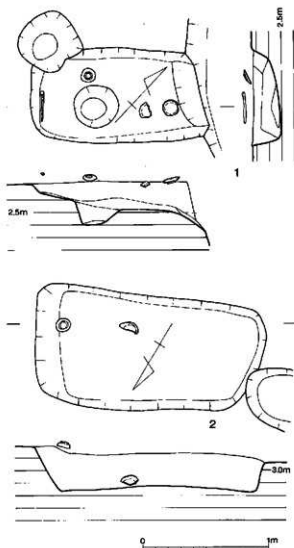
(4) 土墳墓 (図版31~33)

1号土墳墓 (第78図)

21号土墳の北側から検出された隅丸長方形プランの上墳墓で、北側小口部は攪乱坑で破壊され、欠失している。墓域内からは床面より15 cm 前後浮いた状態で、南小口に沿って刀子1本、中央から北小口側にかけて高台付皿2個と青磁碗1個が副葬されていた。床面中央やや南小口側にビットが1個穿たれていた。床面は南小口から北小口にかけて傾斜していて、副葬品の出土状態からすれば木棺墓の可能性が高い。これら副葬品はいわゆる棺外(棺上)に副葬されたものと考えられるだろう。規模は現存部で長径130 cm、短径中央で76 cm、深さは南小口部で7 cm、北側で23 cm を測る。時期は10世紀前半に比定できる。

出土遺物 (図版36・44, 第39・40図)

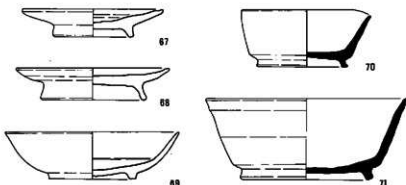
刀子(第39図) 全長20.1 cm, 刃部長11.2 cm, 柄部長8.9 cm, 刃部幅



第 38 図 土墳墓実測図 (1/30)



第 39 図 土墳墓出土鉄器実測図 (1/2)



第 40 図 土墳墓出土土器実測図 (1/3)

中央で1.1 cm, 身厚0.25 cm を測る。刃部は内反りで、柄部には木質が残っている。

土師器皿(第40図67・68) いずれも高台付皿で、1 は口径11.1 cm, 高台径6.3 cm, 器高2.15 cm, 2 は少し大きく口径12.2 cm, 高台径8.4 cm, 器高2.5 cm を測る。調整は1・2とも体部内外はクロコヨコナデで、内底部はさらにナデで仕上げ、1 の外底部には板目底がみられる。色調は淡黄褐色ないしは黄褐色を呈し、焼成は良好である。

青磁碗(第40図69) 杯部の浅い高台付碗で、内面身辺には不明瞭ながらも圈線がめぐる。釉調は黄緑色を呈し、胎上は乳白色で焼成も良好である。復原口径13.8 cm, 高台径6.9 cm, 器高3.7 cm を測る。

2号土墳墓(図版33, 第38図)

1号土墳墓の北側、31号土墳の南側から検出された隅丸長方形プランの土墳墓である。墓坑内から中央よりやや東側から床面よりわずかに浮いた状態で須恵器碗が、東小口際からは床面より34 cm も浮いた状態で甕形の高台付碗が検出された。このような遺物の出土状態からすれば、1号土墳墓と同様、木棺が安置されていた可能性が高い。墓坑の規模は長径182 cm, 短径91 cm, 深さは残りの良い東小口部で36 cm を測る。時期は7世紀後半に比定できる。

出土遺物 (図版36, 第40図)

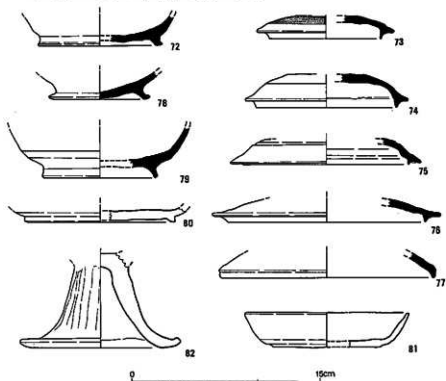
須恵器椀 (第40図70・71) 70は小型, 71は大型の高台付椀である。70はわずかに歪んでいるが, 口径10.3 cm, 高台径7.3 cm, 器高4.5 cm を測る。71は復原口径15.8 cm, 高台径10.4 cm, 器高6.4 cm を測る。いずれも体部下半の屈折稜が明瞭で, 高台も外方に強く張り出すタイプである。調整は両者ともクロコナデ仕上げである。色調は70が暗灰色, 71が灰色を呈し, 焼成は良好な土器である。

(5) 溝状遺構 (第3図)

発掘区南端のほぼ中央付近から検出された北西から南東に走る全長3.3 m, 幅0.4~1 m, 深さ20~25 cm を測り, 断面はU字形を呈す。西端部は攪乱坑で消失している。埋土中から土師器・須恵器片が少量と, 土壌内埋土と同様の炭化物小片もかなり検出されている。

出土遺物

須恵器椀 (第41図72) 高台付椀の体部下半の破片資料で, 復原高台径9.9 cm を測る。高台は外方に強く張り出し, 壺付けは平坦である。調整は底部内外ナデ, 他はクロコナデで仕上っている。色調は灰色を呈し, 焼成は良好である。



第 41 図 溝・ピット内出土土器実測図 (1/3)

(6) ピット・包含層出土の遺物

ピット出土の遺物 (第41図)

須恵器杯蓋 (第41図73~77) 73~76は身受けの返りを有す低平な杯蓋で、大小ある。復原口径は73が10.9 cm, 74が13 cm, 75が14.9 cm, 76が18 cm を測る。77は口縁端部を嘴状につくり出した杯蓋で、復原口径16.8 cm を測る。調整は天井部外面を73がカキ目, 74・75が回転ヘラ削り, 76がナデ、内面は73・76ともナデ、体部内外はいずれもクロヨコナデで仕上げている。色調は73が暗灰色の他は、全て灰色を呈し、焼成も良好である。

須恵器椀 (第41図78・79) 高台が強く外反し、曇付けが外傾する高台付椀で、高台径8 cm を測る。79は細身の高台を有す椀で、復原高台径9 cm を測る。調整は内底部ナデ、体部と高台部付近はクロヨコナデ仕上げである。

土師器椀 (第41図80) 直立した低い高台を有す椀で、復原高台径12 cm を測る。底部内外をナデ、他はクロヨコナデで仕上げている。色調は褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

土師器杯 (第41図81) 復原口径13 cm, 底径8.5 cm, 器高2.7 cm を測る杯で、底部の切り離し手法は糸切りである。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

土師器高杯 (第41図82) ラッパ状に開く脚部の資料で、裾部径12.7 cm, 脚部高7.4 cm を測る。調整は柱状部外面ヘラ削り、内面ナデ、裾部内外はヨコナデ仕上げである。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。

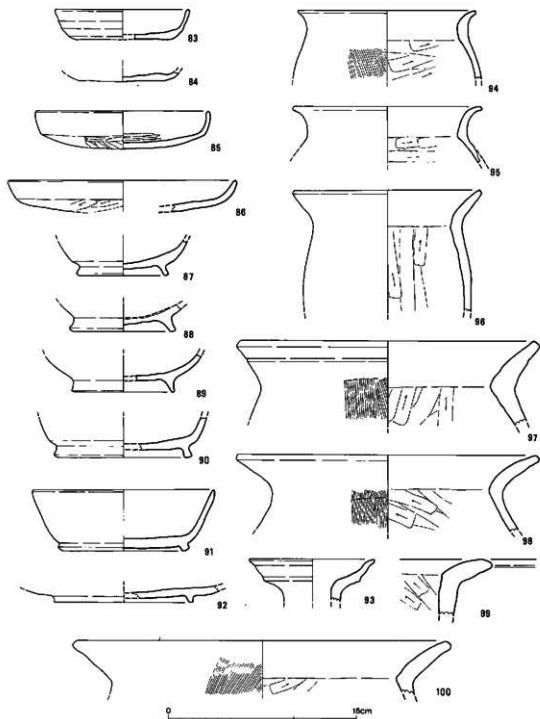
土鏝 (第30図68~71) 大中小があり、小型でも68は特異なタイプである。長さは68が4 cm, 69が6.2 cm, 70は7 cm, 71は8.6 cm, 最大径は68が1.95 cm, 69が1.75 cm, 70が1.85 cm, 71が2.5 cm, 重さは68が11.8 g, 69は現存部で16.67 g, 70は20.65 g, 71は39.80 g を測る。

鉄器 (第13図8) 7.5 mm×5.5 mm の断面長方形を呈す棒状の鉄器で、現存部で長さ4.8 cm を測る。

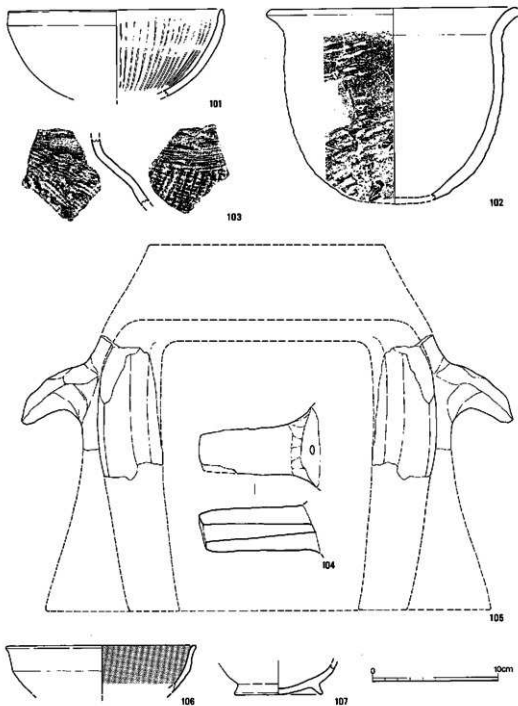
包含層出土の遺物 (第42~45図)

土師器皿 (第42図83・84) 小型の皿で、83は復原口径10.6 cm, 底径7.4 cm, 器高2.3 cm を測る。83・84とも底部の切り離し手法はヘラ切りである。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

土師器杯 (第42図85・86) 大小あり、85は口縁部が内湾し、86は内湾気味に立ち上がる杯で、復原口径は85が13.7 cm, 86が18 cm を測る。調整は85が内外底部をヘラ磨き、体部内外をヨコナデ、86は内底部ナデ、外底部はヘラ削り、体部内外はヨコナデで仕上げている。色調はいずれも褐色を呈し、焼成は良好である。



第 42 圖 包含層出土土器実測圖 1 (1/3)



第 43 圖 包含層出土器実測圖 2 (1/3)

土師器鉢（第42図87～91） 大小あり、87～89は小型、90・91は大型品である。高台はいずれも外反が強いタイプで、91の高台は特に低く畳付けは外傾している。復原高台径は87が7.2 cm、88が8.2 cm、89が8.1 cm、90が11 cm、91は復原口径14.3 cm、高台径10.2 cm、器高4.8 cmを測る。いずれも器面の風化が著しく調整が不明な点が多い。87の内面には煤の付着がみられる。色調は88・90が淡褐色で、他は黄褐色を呈し、焼成も良い。

土師器盤（第42図92） 高台部付近の破片であるが盤と思われる。復原高台径11 cmを測る。調整は風化が著しく不明である。色調は褐色を呈し、焼成も良い。

土師器壺（第42図93） 小型壺の口頸部付近の破片資料である。復原口径9.5 cmを測る複合口縁で、その形状からして縁の口頸部破片と思われる。内外ともクロコナデ調整で仕上げている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

土師器甕（第42図94～100） 強く「く」字状に外反する口縁を有す甕で、大中小がある。94～96は小型、97・98は中型、100は大型品で、復原口径は94が14 cm、95が15 cm、96が15 cm、97が23.8 cm、98が24 cm、100が30 cmを測る。調整は胴部外面を刷毛（94・97・98・100）、内面はいずれもへら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。96は外面が二次加熱を受け、赤変し、器面が剥落している。96と97の口縁部内面、99の口縁部外面には煤の付着がみられる。色調は95が茶褐色、98が褐色の他は全て黄褐色を呈し、焼成も良好である。

土師器鉢（第43図101） 復原口径16.9 cm、現存器高6.9 cmを測る楕形の鉢で、外面には赤色顔料の塗布がみられ、内面はへらによる放射状の暗文が施されている。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

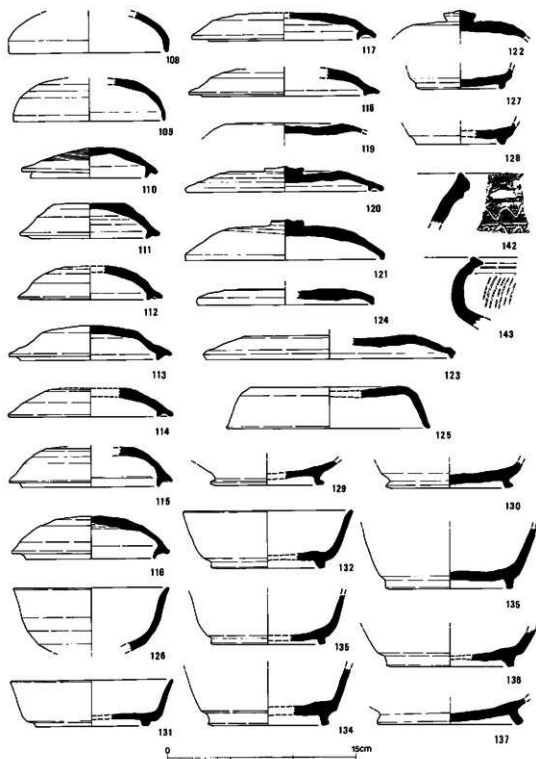
埴壇土器（第43図102・103） 102は球形の胴部に緩やかに外反する口縁部がつく甕で、復原口径20 cm、器高15.6 cmを測る。胴部外面は粗いタタキ目、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。103は肩部付近の破片で、102とは異なり、頸部が強くしぼまる甕である。胴部外面は格子目のタタキ、内面は平行タタキを施し、頸部はヨコナデ調整している。102の胴部下半と口縁部外面には著しい煤の付着がみられる。色調はいずれも茶褐色を呈し、焼成は良好である。

注口土器（第43図104） 器形は不明であるが注口部の破片資料で、長さ9 cm、径は最大部で4 cmを測る。調整はナデで仕上げていて、色調は茶褐色を呈し、焼成良好である。

カマド（第43図105） 移動式のカマドで、把手と庇の一部を残す破片資料である。調整は外面ナデ、内面はへら削りである。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

内黒土器（第43図106） 内黒の碗の体部破片で、体部外面には屈折稜がみられる。復原口径15 cmを測り、高台が付くと思われる。内外ともクロコナデで仕上げ、色調は黄褐色を呈す焼成良好な土器である。

瓦器碗（第43図107） 体部下半の高台付碗の破片で、復原高台径7 cmを測る。器面は風化が



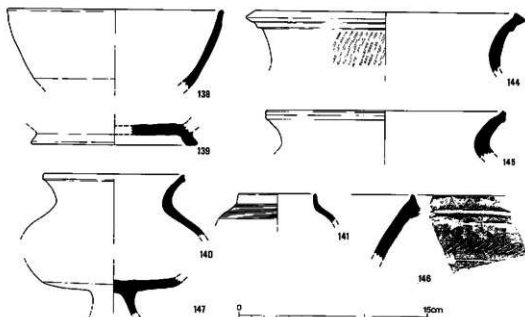
第 44 图 包含鼎出土器实测图 3 (1/3)

著しく調整は不明である。色調は灰色で、胎土・焼成とも良好である。

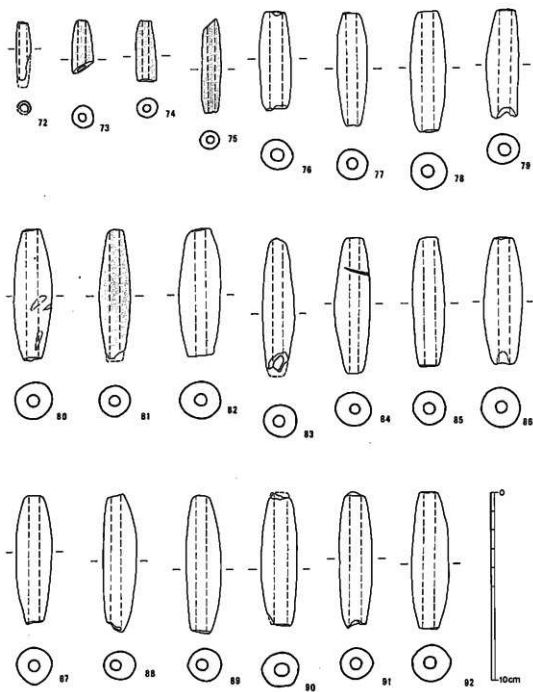
須恵器杯蓋（第44図108～125） 108・109は体部外面に不明瞭ながらも屈折線を有す杯蓋、110～118は身受けの返りを有す杯蓋で、全体に低平なものが多く、115・116のような天井部が丸味をもつ古い様式を残すものもある。120～123は宝珠形の鈕を有す杯蓋で、口縁端部が嘴状を呈すもの（121・123）と身受けの返りを有すもの（120）がある。また、125のような身受けの返りをもたない杯蓋で、天井部が平坦になるものもある。調整は基本として天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外をロクロヨコナデで仕上げているのが一般的である。110は天井部外面にカキ目を施している。色調は112が黄褐色、113・117が淡黄灰褐色を呈す土師質のものである他は、灰色ないしは暗灰色を呈すもので、いずれも焼成良好である。復原口径ないしは体部径は、108が12.6 cm、109が11.9 cm、110が10.8 cm、111が11 cm、112が11.5 cm、113～115が13 cm、116が12.3 cm、117が14.5 cm、118が15 cm、120が15.5 cm、121が15.8 cm、123が20 cm、124が13.9 cm、125が16 cmを測る。

須恵器杯身（第44図126） 復原口径12.2 cm、現存器高5.1 cmを測る深目の杯身で、内外ともロクロヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。体部外面には著しい煤の付着がみられる。

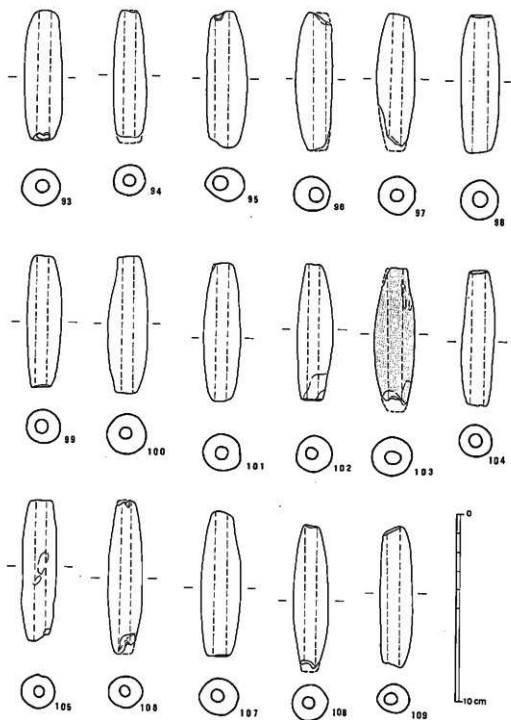
須恵器椀（第44・45図127～139） いずれも高台付椀で、大中小がある。復原高台径127・128は7 cm と小さく、129～136は9～10 cm の中型、139は13 cm の大型品である。調整は基本とし



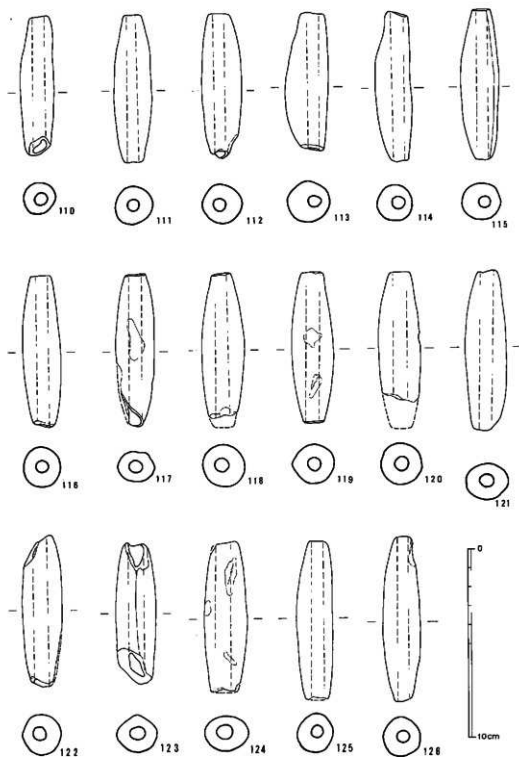
第 45 図 包含層出土土器実測図 4 (1/2)



第 46 图 包含层出土土铤实测图 1 (1/2)



第 47 图 包含层出土土鍾实测图 2 (1/2)



第 48 圖 包含層出土之鏃實測圖 3 (1/2)

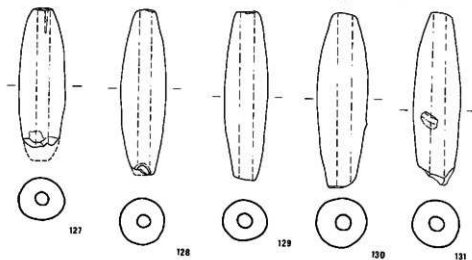
て底部内外をナデ、他はクロコヨコナデで仕上げている。131・136・137の外底部はヘラ切りのままである。色調は130・137が淡茶褐色、138が茶褐色の他は、灰色ないしは暗灰色を呈し、焼成はいずれも良い。高台の特徴からすれば、高台が低く直に立つもの（127・128・131～136）、強く外方に屈折するもの（129・130）、外反するもの（137・139）の三種に別けることができる。

須恵器壺（第45図140・141） 141は強く外反する口縁を有す壺で、復原口径11 cmを測る。内外ともクロコヨコナデで仕上げた茶灰色を呈す焼成良好な土器である。141は短頸の直口壺で、復原口径6.1 cmを測る。調整は肩部外面カキ目、他はクロコヨコナデで仕上げている。色調は淡灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

須恵器甕（第44図142～146） 強く外反する甕の口頸部付近の破片資料である。口縁下に段状の凸帯がめぐるもの（142～144）、口縁部を肥厚させたもの（145・146）があり、142の凸帯下には粗いヘラ描き波状文が施されている。復原口径は144が22 cm、145が18.9 cmを測る。色調は145が茶灰色の他は、灰色ないしは暗灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

須恵器高杯（第45図47） 杯部と柱状部の一部の破片資料である。調整は杯部内底はナデ、外底部は同転ヘラ削り、体部と脚部内外はクロコヨコナデで仕上げている。色調は外面灰色、内面暗赤紫色を呈し、焼成は良好である。

土鍾（第46～49図） 大きくは大中小で、72のような超小型品もある。長さ、最大径については大差ないが、重さからみると7種類に大別できる。①2 g以下の超小型品（72）、②3～4 gのもの（73～75）、③14～16 gのもの（77・79・81・88）、④18～21 gのもの（76・78・83～85・



0 10 cm

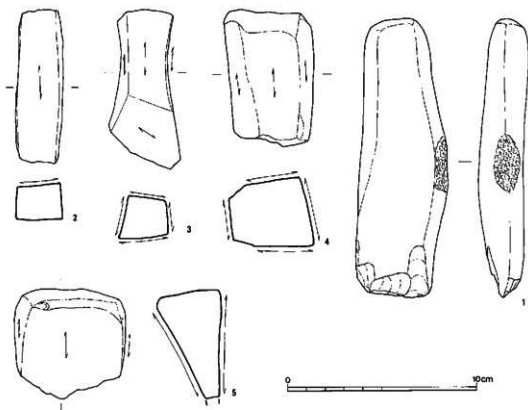
第 49 図 包含層出土土鍾実測図 4 (1/2)

87・89・91・94・99・102・104・109・110) ⑤23~27gのもの(80・82・86・90・92・93・95~97・100・101・103・105・107・108・111・116・117), ⑥28~32gのもの(98・112・113・115・119~121・124~126), ⑦39g以上のもの(128~131)の7種である。④タイプ14例, ⑤タイプ18例, ⑥タイプ10例の3種が最も一般的ようである。その中でも130・131のような50gを越す大型品もある。また, 朱塗りの土罐(73~75・103・118)もある。一方, 製作時に形成された平坦面を明瞭に残すもの(95・96・106・110・115・119・123・125・126)もある。

紡錘車(第13図2・3) 2は滑石製, 3は緑泥片岩製の紡錘車で, いずれも半欠品である。現存部の最大径は2が3.6cm, 3が5.35cmを測る。

鉄器(第13図9・10) 9は断面7.5×8mmの方形を呈す棒状の鉄器で, 現存長6.8cmを測る。10は刀子の切先の破片で, 現存長3.9cm, 刃部幅0.8cmを測る。

石器(第50図) 1は硬質砂岩製の石斧で, 縄文時代のもと思われる。2~5は砥石で, いずれも砂岩製である。3は全面が研砥面として使用されている。



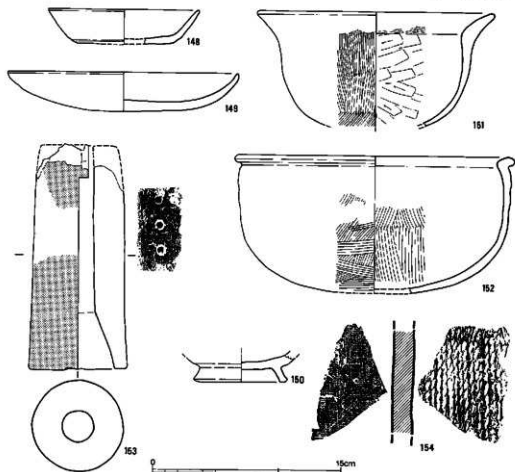
第 50 図 包含層出土石器実測図 (1/2)

表採及び攪乱層出土の遺物 (図版38・42・43, 第51～54図)

土師器杯 (第51図148・149) 148は復原口径12 cm, 底径7.2 cm, 器高2.7 cmを測る小型の杯で, 底部の切り離し手法は糸切りである。149は内弯気味に緩やかに立ち上がる体部を有す浅い杯で, 復原口径18.2 cm, 器高3.15 cmを測る。調整は148がロクロヨコナデ仕上げで, 149は器面の風化が著しく不明である。

土師器碗 (第51図150) 高台付碗の高台部の破片資料で, 高台は外方に強く張り出したもので, 復原高台径7.4 cmを測る。調整は内底部ナデ, 他はロクロヨコナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈し, 焼成は良好である。

土師器鉢 (第51図151・152) 151は口縁が強く外反し, 最大径が口縁部にある鉢で, 復原口径18.9 cmを測る。152は丸味をもった胴部に短かく強く外反する口縁がつく鉢で, 鍋状をな

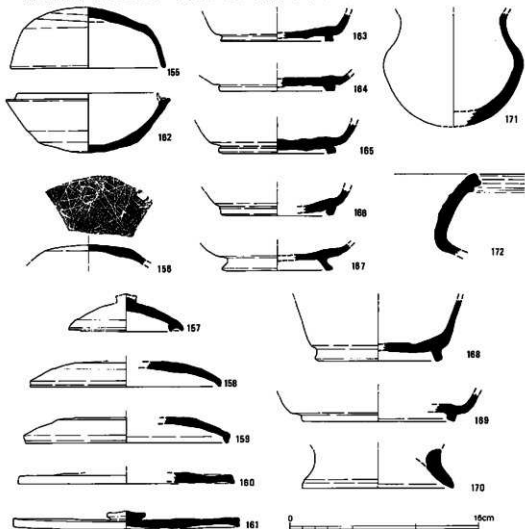


第 51 図 表採及び攪乱層出土土器実測図 1 (1/3)

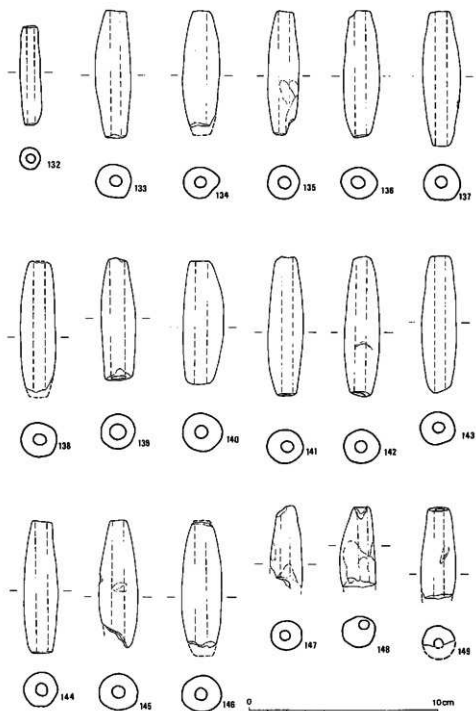
す。復原口径22 cm, 器高10.9 cm を測る。調整は胴部内面を151がへう削り, 152は刷毛, 外面は両者とも刷毛, 口縁部もヨコナデで仕上げている。152の外面全体には著しい煤の付着がみられる。

須恵器杯蓋 (第52図155~161) 体部外面に不明瞭ながらも屈折線を有するもの (155) と身受けの返りを有するもの (157), 口縁端部が嘴状をなし, 低平な宝珠形の鈕をもつもの (158~161) の三種がある。調整は基本として天井部外面は回転へう削り, 内面ナデ, 体部内外はクロヨコナデで仕上げている。156の天井部外面にはへう記号状の線刻がみられる。復原口径は155が12.1 cm, 157は体部径9.1 cm, 158が15 cm, 159が16 cm, 160が17 cm, 161が17.8 cm を測る。色調は157が淡茶灰色の他は, 灰色ないしは暗灰色を呈し, 焼成も良好である。

須恵器杯身 (第52図162) 蓋受けの返りを有す杯身で, 体部は丸味をもつ深いタイプであ



第 52 図 表採及び横乱層出土土器実測図 2 (1/3)

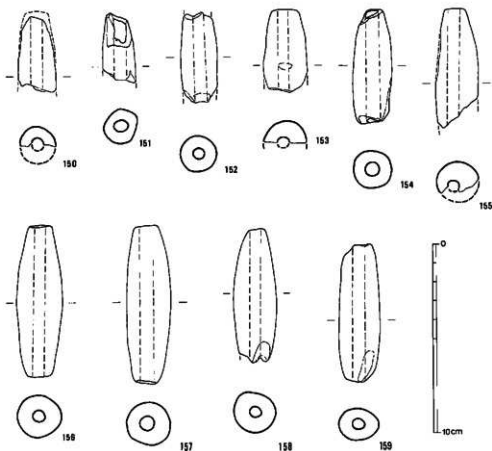


第 53 図 表採及び攪乱層出土土鏡実測図 1 (1/2)

る。復原体部径13 cmを測る。調整は内底部ナデ、外底部回転ヘラ削り、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。

須恵器壺（第52図163～169） いずれも高台付壺で、高台の形状により大きく二つのタイプに分けられる。163～166・169のような高台が低く直に立つもの、167・168のような外方に強く張り出したものの2種類である。調整は基本として内外底部ナデ、他はロクロヨコナデが一般で、163・164の外底部のようにヘラ切りのままのものもある。復原高台径は163・166が9 cm、164が9.1 cm、165が9.2 cm、167が8.8 cm、168が10 cm、169が12 cmを測る。色調はいずれも灰色ないし暗灰色を呈し、焼成は良好・堅緻な土器である。

須恵器壺（第52図170・171） 壺の高台部の破片資料と思われる。内外ともロクロヨコナデで仕上げた暗灰色を呈し、胎土・焼成とも良好な土器である。復原高台径は12.1 cmを測る。171は扁球形の胴部に立ち気味に外反する口頸部がつく小型壺で、胴部最大径は上位にあり、11 cmを測る。調整は器面の風化が著しいために不明である。色調は淡灰色を呈す。



第 54 図 表採及び視乱層出土七輪実測図 2 (1/2)

須恵器甕(第52図172) 強く外反する口縁部を有す甕の口頸部の小破片で、口縁下には1条の凸帯がめぐる。内外ともクロコヨコナデ仕上げである。色調は灰色から黒灰色を呈し、焼成は良好で、内外に灰かぶりが見られる。

瓦(第51図154) 平瓦の小破片で、表面は縄目文、裏面は細かい布目を残している。色調は灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

羽口(第51図153) 先端部を一部欠くがほぼ全体を知りうる。長さ17.6 cm, 最大径7.8 cm, 内径は中央部で2.5 cm, 吹込み口はさらに大きく径 cm を測る。体部外面上位には竹管文が3個陰刻されている。羽口先端部は強火でガラス質に溶解し、先端部付近は黒変している。羽口の時期は明確ではないが、犬鳴日原鉄山2号下殿治場から出土した例に類似しているので、近世までさかのぼる羽口かもしれない。

土鍾(第53・54図) 大きさでも大中小があり、5 cm 前後のもの(132), 6~7 cm 前後のもの(133~146・159), 8 cm 前後のもの(156・157)がある。重さからみると6種類に大別できる。①6 g 前後のもの(132), ②14~16 g 前後のもの(135・139), ③18~21 g 前後のもの(133・134・136・141・143・144), ④23~27 g 前後のもの(137・138・140・142・145・146・159), ⑤28~32 g 前後のもの(158), ⑥39 g 以上のもの(156・157)である。③・④タイプが最も一般的である。体部に製作時に形成されたと思われる平坦面を残すものが6例(133・134・137・143・151・157)ある。



第 55 図 瓦礫風景

表2 土鍾計測一覧表

(単位 cm)

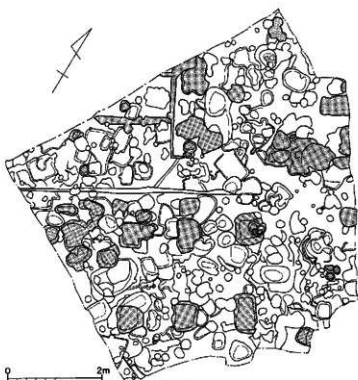
No	造橋・層位	長さ	径	重さ	台帳	No	造橋・層位	長さ	径	重さ	台帳
1	堅穴1	6.45	1.5~1.6	13.2	246	41	土壌38	7.9	1.9	28.26	370
2	堅穴	6.3	1.6	14.3	233	42	土壌40	(4.15)	1.9	(13.16)	291
3	堅穴	6.9	1.85~2.0	25.34	251	43	土壌40	8.1	2.45	(31.90)	195
4	堅穴	8.05	1.7~2.1	27.0	248	44	土壌42	7.75	1.75~1.9	20.55	166
5	堅穴	8.3	1.85~2.0	27.5	247	45	土壌42	8.0	1.7~1.9	22.6	210
6	堅穴	(8.0)	1.9	(27.77)	252	46	土壌43	(3.9)	(1.8~2.0)	(9.69)	198
7	堅穴	8.45	1.9~2.0	28.77	250	47	土壌43	(6.0)	1.65~1.9	(14.95)	196
8	堅穴2	6.2	2.8	(37.74)	281	48	土壌43	(6.5)	2.4~2.75	(37.64)	197
9	堅穴3	(3.9)	(1.5)	(5.95)	282	49	土壌44	(4.1)	0.95	(3.8)	223
10	堅穴5	(6.05)	1.85	(15.45)	283	50	土壌44	(6.2)	1.6	(12.93)	215
11	堅穴5	7.4	2.15~2.35	33.14	88	51	土壌44	6.6	1.45~1.6	(13.86)	214
12	堅穴7	6.6	1.5	16.13	182	52	土壌44	(6.4)	(1.45)	(10.3)	216
13	堅穴7	(6.95)	1.8	(11.43)	185	53	土壌44	(4.4)	1.8	(11.43)	219
14	堅穴7	(6.7)	2~2.25	(28.15)	183	54	土壌44	7.5	2~2.3	29.37	213
15	堅穴7	(5.0)	1.7~2.1	(15.35)	184	55	土壌46	6.3	1.8~1.95	()	235
16	堅穴8	5.7	1.8~1.95	22.78	324	56	土壌46	7.35	1.65~1.85	19.25	234
17	堅穴8	7.75	2.0	27.58	323	57	土壌47	(6.35)	1.9	(17.3)	240
18	土壌2	(3.85)	(1.95)	(10.64)	284	58	土壌47	8.25	2.1~2.4	(37.3)	239
19	土壌3	(5.7)	1.6~1.85	(12.73)	168	59	土壌49	(6.0)	2~2.2	(26.86)	244
20	土壌6	(5.2)	1.85	(14.55)	329	60	土壌52	(7.2)	1.6~2.0	(24.58)	261
21	土壌9	6.75	1.85	(21.71)	230	61	土壌56	(6.5)	1.7~1.9	(18.05)	333
22	土壌9	8.3	2.3~2.7	(51.2)	229	62	土壌58	6.85	1.5	17.34	337
23	土壌11	7.9	2~2.3	(31.54)	271	63	土壌58	(4.8)	2.0	(16.86)	336
24	土壌16	(4.1)	2.25	(14.44)	66	64	土壌59	6.5	1.7~2.1	18.01	338
25	土壌26	7.2	1.6~1.8	20.08	160	65	土壌59	6.4	2.2	(24.25)	334
26	土壌26	(6.6)	1.8~2.0	(20.55)	161	66	土壌59	6.7	2.2	27.24	340
27	土壌26	7.85	1.9	28.14	159	67	土壌59	7.7	1.9	22.85	339
28	土壌28	7.7	1.8	(24.04)	260	68	P106	4.0	1.95	11.8	355
29	土壌30	(6.1)	1.65~1.9	(15.39)	245	69	P79	6.2	1.75	(16.67)	293
30	土壌30	7.9	1.7~2.1	(26.60)	164	70	P104	7.0	1.75~1.85	20.65	354
31	土壌30	(3.8)	(1.9~2.2)	(17.05)	165	71	P62	8.6	2.5	39.80	295
32	土壌30	8.2	1.85~2.35	32.45	163	72	D5 黄褐色砂層	(3.1)	0.75	1.10	121
33	土壌31	(5.0)	1.8	(14.4)	228	73	C5 黄褐色砂層	(2.6)	1.2	(3.61)	23
34	土壌35	(4.3)	1.3	(6.24)	180	74	D5-D6 黄褐色砂層	(3.2)	1.1	(3.66)	300
35	土壌35	(3.6)	1.6	(8.41)	179	75	B6 黄褐色砂層	(4.85)	1.05	(4.24)	172
36	土壌35	(3.9)	1.95~2.1	(13.45)	176	76	C4 黄褐色砂層	5.1	1.65	21.7	28
37	土壌35	8.7	2.5~2.6	51.65	175	77	C5 黄褐色砂層	5.9	1.6	13.59	137
38	土壌35	9.3	2.4~2.7	50.36	174	78	D3 黄褐色砂層	6.1	1.85	20.70	68
39	土壌38	(5.6)	1.75	(11.26)	167	79	C4 黄褐色砂層	(6.5)	2.1	(29.95)	25
40	土壌38	6.4	1.8	(16.34)	274	80	D5 黄褐色砂層	6.75	2~2.1	25.18	122

(単位 cm)

No	造構・層位	長さ	径	重さ	台帳	No	造構・層位	長さ	径	重さ	台帳
81	D4 黄褐色砂層	6.7	1.8	(15.65)	91	121	C4 黄褐色砂層	8.3	2.2	(31.49)	26
82	C6 黄褐色砂層	6.65	2~2.2	27.85	98	122	C5 黄褐色砂層	5.9	2.1	(26.55)	16
83	D4・D5 黄褐色砂層	(6.7)	1.75	(16.96)	48	123	C2 黄褐色砂層	(7.2)	1.85~2.1	(24.35)	237
84	C6 黄褐色砂層	7.1	1.9	18.19	126	124	D4 黄褐色砂層	7.75	1.7~2.2	28.55	42
85	C6 黄褐色砂層	6.8	1.8	19.04	124	125	D5 黄褐色砂層	8.15	1.9	(28.56)	206
86	C6 黄褐色砂層	(6.6)	2~2.15	(24.26)	133	126	C6 黄褐色砂層	8.6	2~2.1	31.29	127
87	D5 黄褐色砂層	6.75	2.0	(21.56)	207	127	D4 黄褐色砂層	(7.05)	2.1~2.4	(34.0)	43
88	C6 黄褐色砂層	7.2	1.4~1.7	16.24	128	128	D5 黄褐色砂層	8.5	2.45	43.65	113
89	B2 黄褐色砂層	7.15	1.65~1.85	19.59	362	129	D5~D5 黄褐色砂層	8.8	2.3	39.30	211
90	C5 黄褐色砂層	6.85	2.0	(23.2)	44	130	C4 黄褐色砂層	9.1	2.6	57.20	74
91	C1 黄褐色砂層	7.0	1.7	19.74	138	131	C5 黄褐色砂層	(8.7)	2.4	(48.31)	20
92	B4 黄褐色砂層	7.1	1.9~2.0	23.64	194	132	C2 カクラン層	5.05	1.1	6.25	259
93	C5 黄褐色砂層	6.8	2.0	26.44	18	133	表層	6.65	1.8~1.9	20.18	368
94	C4 黄褐色砂層	6.6	1.75	18.76	76	134	D4 カクラン層	(6)	1.95	(17.83)	36
95	D5 黄褐色砂層	7.1	1.9~2.1	26.30	114	135	C5 カクラン層	6.5	1.7	(15.89)	5
96	D3 黄褐色砂層	7.2	2.0	(24.1)	69	136	D4 カクラン層	6.6	1.9	18.70	32
97	C4 黄褐色砂層	7.1	2.1	(23.76)	61	137	表層	7.0	1.8~1.95	22.95	371
98	C4 黄褐色砂層	7.05	2.05	32.47	75	138	D5 カクラン層	(6.8)	1.9	(29.95)	33
99	C5 黄褐色砂層	6.75	1.8~1.9	21.90	102	139	C4 西側の カクラン坑	6.4	1.8	16.5	1
100	D5 黄褐色砂層	7.3	2~2.15	27.34	110	140	C6 カクラン層	6.3	2.1	26.24	40
101	D4・D5 黄褐色砂層	7.3	2.0	(26.64)	47	141	C6 カクラン層	7.25	1.8	21.08	41
102	D3 黄褐色砂層	7	1.9~2.0	21.94	67	142	C5 カクラン層	7.3	1.9	23.24	4
103	C4 黄褐色砂層	(7)	2.0	(26.99)	78	143	C5 カクラン層	7.1	1.7	17.55	369
104	B4 黄褐色砂層	7.1	1.85	20.54	193	144	表層	6.9	1.8	20.25	367
105	D5 黄褐色砂層	7.3	1.9	(24.54)	85	145	C2 中央の カクラン坑	(6.8)	2.1	(22.13)	13
106	C6 黄褐色砂層	7.9	1.75~1.85	(21.48)	132	146	D4 カクラン層	(6.4)	2.15	(24.44)	37
107	B2 黄褐色砂層	7.6	1.9~2.1	26.24	361	147	C5 カクラン層	(4.7)	1.7	(8.87)	7
108	D5 黄褐色砂層	(7.25)	2.0	(23.69)	189	148	D4 カクラン層	(4.2)	1.7	(10.34)	15
109	D5 黄褐色砂層	7.4	1.6~1.7	(18.50)	149	149	C5 カクラン層	(4.8)	1.7	(11.74)	6
110	C5 黄褐色砂層	(7.3)	1.9	(18.9)	19	150	C4 西側の カクラン坑	(3.9)	1.9	(5.94)	3
111	C6 黄褐色砂層	7.75	2.0	26.80	125	151	B5 カクラン層	(3.7)	1.8	(9.29)	12
112	C3 黄褐色砂層	7.6	2.1	30.04	17	152	B5 カクラン層	(4.7)	1.9	(26.59)	11
113	C5 黄褐色砂層	7.1	2~2.3	30.45	100	153	C5 カクラン層	(4.3)	2.3	(10.94)	8
114	C5 黄褐色砂層	7.8	1.85	22.40	101	154	C4 内側の カクラン坑	6	2	(23.70)	2
115	B5 黄褐色砂層	7.8	1.9~2.1	28.70	148	155	C2 中央の カクラン坑	(6.2)	2.2	(14.74)	14
116	C2 黄褐色砂層	7.75	2.0	27.4	236	156	C6 カクラン層	7.95	2.3	39.14	39
117	D5 黄褐色砂層	7.85	1.7~2	(23.95)	84	157	土壌38	8.3	2.1~2.4	43.25	372
118	C6 黄褐色砂層	7.5	2.2~2.4	(35.05)	130	158	B1 カクラン層	(7)	2.3	(28.78)	10
119	C6 黄褐色砂層	7.75	2~2.2	32.81	129	159	B5 カクラン層	7.2	2.1	(23.10)	9
120	C5 黄褐色砂層	(6.5)	2.1	(29.95)	79						

Ⅳ 吉塚操車場跡期の遺構と遺物

昭和40年前後まで存続したといわれる操車場跡期の遺構については、その後の博多保線区の妙見宿舎建設時に、その大半が取り壊されたらしく、唯一、井戸1基が検出されただけであった。今回、国鉄精算事業団の御協力により昭和30年頃の操車場諸施設配置図をみる事ができた。その配置図と今回調査した地区を重ねたところ、そこには明確な施設はなく、その大半は引き込み線路であったことが判った(第56図)。一部、北西隅付近には引き込み線路に伴う乗降場があったようであるが、明らかにできなかった。



第 56 図 昭和50年頃の妙見宿舎基礎穴配置と攪乱坑 (1/400)

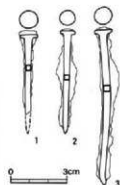
一方、福岡市埋蔵文化財課が平成3年11月に調査した北側の地区からはレンガ造りの基礎等が発見されている。配置図からすれば機関車等の修理・点検を行った建物があった所のようにある。

(1) 井戸 (図版34, 第58・59図)

15号土壌を切った状態で検出された。掘り方は胴張りの方形プランを呈し、方形の井戸枠が二段組み合せた構造となっている。上段の井戸枠は94×95 cm、下段は60×62 cmで、上段は横板三枚、下段は二枚を重ねて、それぞれ釘留めしている。井戸枠の裏込めは粗い白色砂と砂礫を混入している。下段の井戸枠は粗い白色砂層を切り込んでいる。掘り方の規模は東西145 cm、南北現存部で135 cm、深さ137 cmを測る。内部からは奈良時代の土師器・須恵器片とともに



第 58 図 井戸

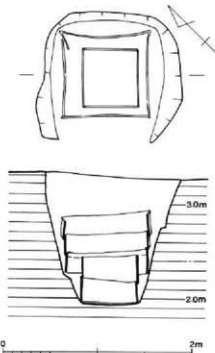


第 60 図
井戸出土鉄釘実測図 (1/2)

に、粗雑な板ガラス片 1 枚、釘数点
が出土しただけである。

出土遺物 (図版 43, 第 60 図)

鉄釘 (第 60 図 1~3) いずれも井戸枠を留めた釘で、頭部
は円形で、足は断面方形を呈す。大小あり、1・2 は 5.5 cm, 3
は 8.5 cm を測る。



第 59 図 井戸実測図 (1/40)

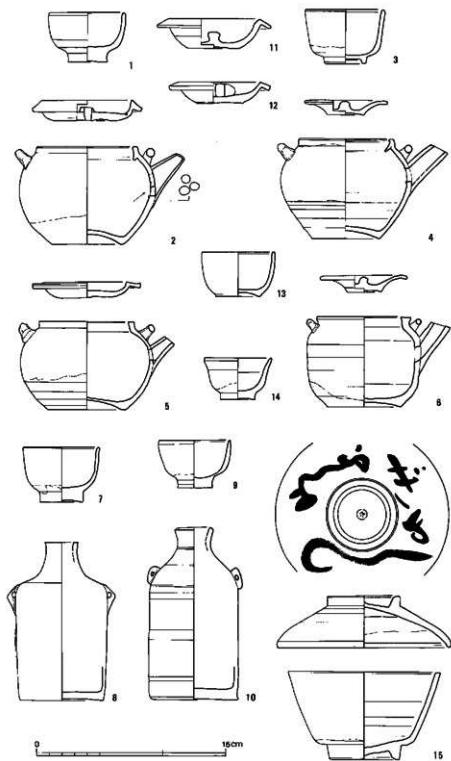
(2) 駅弁関係遺物と瓶類

多くは昭和 50 年頃の国鉄妙見宿舍の基礎穴から出土したもので、駅弁関係の遺物と瓶類であ
る。

駅茶瓶・坏・蓋付碗 (第 61 図, 図版 45, 表 2)

茶瓶 (2・4・5・6・8・9) 茶瓶は急須型と徳利型に大きく分けられ、これらに坏がセッ
トとして付く。急須型は蓋の上面に坏が伏せて乗せられ、徳利型は口縁に坏を伏せて乗せられ
る。耳あるいは把手を通した針金が持ち手になる。胎土・焼成から 1・2, 3・4, 7・8, 9・10 が
対になるようである。容量は急須型は 2 合 (360 cc) と 1 合 5 勺 (270 cc), 徳利型は 1 合 5 勺
入りが出土している。胎土は、きめ細かく微細な鉄粒や砂粒を含む陶土。釉薬は透明釉を掛け
たものが多く、胎土の鉄分によって黄味白から黄橙色に発色している。施釉は外面には胴中位
から下位, 内面は掛けないもの (2・4・6) と掛けたもの (5) がある。焼成は楽焼であまく
て軟質なものが多く、本焼のものもある。

胴部は口縁部を内面に折り返してかえりを付けたもの (2・4) と、かえりを持たないもの (5・
6) がある。注口の根は一孔式のものが多いが、2 は三孔式である。



第 61 圖 歌弁関係容器

蓋は口縁部をくの字に折り返し外底を平に成形し皿状にしたものと、口縁が朝顔状に開くものがある。前者にはつまみ部を穿孔したもの(2)、粘土紐を斜めに切って平面形が菱形にしたもの(12)などがある。施釉は、2は外面の折れ部を除く部分、4・6は外面凹部とつまみ部、5は内面凸部のみである。

杯(1・3・7・9・13・14) 杯は底部が糸切りのものと削り出して高台を付けたものがある。容量は50 cc前後が多く、14のように25 cc程度のももある。胎土は茶瓶と同様な陶土製と磁石製がある。釉薬も茶瓶と同様なものと鉄釉・黄釉を掛けたものがある。

蓋付碗(15) 碗は腰部から口縁にかけてわずかに外方に直線的にのびる器形。腰部まで直角にちかく削っており、その部分が露胎している。口唇部が扁平で厚さ5 mmほどある。蓋は口縁部がわずかに直立する皿のタイプで、外面のつまみ部分の削り出しから口縁部近くまで削っている。外面に「うなぎめし」と鉄砂で書かれている。内面の口縁部2 cmほどが露胎。内面には、つまみと同径の重ね焼きの痕が残る。

表3 駅弁関係容器一覧表

No	種類	法検(単位: cm)			焼成	胎 上	色 調	釉薬
		口径	底径	器高				
1	杯	5.8	3.0	3.9	柴 焼	きめ細かく微細鉄粒を含む	薄黄・薄黄茶	透明釉
2	蓋 茶瓶	8.6 7.8	7.2 5.6	1.6 7.6	木 焼	きめ細かく微細鉄粒を含む	黄茶 薄オリーブ	透明釉
3	杯	6.2	3.4	4.3	柴 焼	きめ細かい	黄味白	透明釉
4	蓋 茶瓶	6.6 7.6	3.0 5.4	1.1 7.8	柴 焼	きめ細かい	薄黄 薄黄	透明釉
5	蓋 茶瓶	8.6 7.6	6.8 6.2	1.2 6.9	柴 焼	きめ細かい	黄味白 薄黄茶	透明釉
6	蓋 茶瓶	6.8 6.0	2.8 5.8	1.3 7.2	木 焼	きめ細かい	明オリーブ灰 黄茶	透明釉
7	杯	6.0	3.4	4.3	柴 焼	きめ細かい	明黄橙	透明釉
8	茶瓶	2.6	6.6	12.6	柴 焼	きめ細かい	黄味白	透明釉
9	杯	5.6	2.8	3.8	柴 焼	きめ細かい	明黄橙	透明釉
10	茶瓶	2.5	7.0	13.7	柴 焼	きめ細かい	黄味橙	透明釉
11	蓋	9.0	4.0	2.3	柴 焼	きめ細かく雲母を含む	黄味白	透明釉
12	蓋	8.0	3.6	1.6	木 焼	きめ細かく微細鉄粒を含む	におき味橙	無
13	杯	5.8	3.5	3.4	木 焼	磁器	におき	黄 釉
14	杯	4.5	2.8	3.3	木 焼	微細鉄粒を含む半磁器	暗黄茶	鉄 釉
15	蓋 碗	13.6 12.0	5.6 5.4	4.1 7.0	柴 焼	きめ細かく微細鉄粒を含む	明黄橙	透明釉

ガラス瓶・陶器瓶・その他（第62～64図、図版46～48、表3・4）

ガラス瓶としては牛乳・ビール・酒・ラムネ・サイダー・ソース・ニック・水素・目薬・インク・海苔佃煮があり、陶器瓶としてインク瓶が出土した。また他に泥めんこ鋳型があった。

牛乳瓶（1～10） 瓶は全て鋳型により作られており、表面には駅名・会社名・電話番号・容量などが陽刻されている。器形は容量の違いにより胴部の長さが異なり、また口縁部は玉縁状のものと直線的で肥厚なものがある。いずれもコルク栓が用いられていたようである。ただし8は内面にネジが刻まれてあり、ガラス製のネジ栓が付く。このタイプは宅配用の瓶で再利用されていたようである。容量をみると1～3・6は「一合五勺入」、4・7は「一合」「壹合」、9は「一、八勺入」の表示があるが実際に計てみると10 cc 程度多く、これから5は一合三勺入、8は一合入、10は八勺入であろう。

ビール瓶（11～14） 大瓶はサクラビール（11）と大日本麦酒（12）がある。器形は現在の型とは異なり肩がはる。（参考）に11に現在の瓶を重ねた。容量は現在は633 cc であるが当時は四合（720 cc）入であったようである。13・14はいずれも大日本麦酒の小瓶で容量は二合入り（360 cc）である。14は頸部の短い器形である。小瓶では他に「帝国麦酒株式会社」「IRON BEER MINAKATASHUZO」の表示のものがある。

酒瓶（15・16） 15は底部が丸く上底で、口縁に金具式密封栓が付く。15は口縁部を欠損する。器面には「嘉納合名会社 灘御影 白鶴 正味老合」と表示されている。

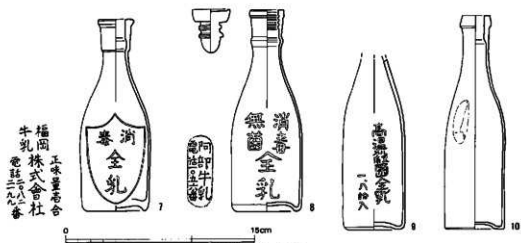
ラムネ瓶（17） 現在の瓶と同形である。ラムネは明治12年から売り初められ、当時はガラス瓶が珍しく回収出来なかったそうである。この瓶の器面にも「非売瓶」と表示されている。他に「大師ラムネ 村島商会」とある。容量が130 cc と外形に比して少ない。

サイダー瓶（18） 瓶の底面には三ツ矢のマークが入っている。他に「金線」「日本麦酒 鉾泉株式会社」の器面表示の瓶が出土している。これらは三ツ矢サイダー、金線サイダーの販売元が日本麦酒鉾泉株式会社である。

ソース瓶（19） 器面に「日本一の白玉ソース…」とぎっしりと宣伝文が書かれている。

インク（20・35・36） 20は陶器製で、胎土はきめ細かい暗黄茶色を呈す。粘土紐巻き上げ・板起こし技法で作られ、鉄軸を掛けている。口縁部は一方を押さえて片口状にしている。胴底部近くに「MARUZENINK★TOKYO」の陰印が押されている。35・36は卓上瓶で35の底面には「SIMUCO」の陽刻がある。

ニック瓶（21～25） 21は口唇部を製作時に折り離したままで、器面に「鳥栖 千鳥屋」の表示がある。容量が220 cc ありニックではなく他の駅売り飲料水の可能性がある。22・25は瓢形の瓶で容量は22は150 cc、25は25 cc で他にも容量が異なるものが出土している。口唇部は折り離し造り。23は八角形の瓶で卓上醤油瓶を思わせるが口縁はコルク栓止めである。24は酒



第 62 圖 瓶 ①



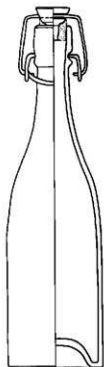
SAKURA BEER



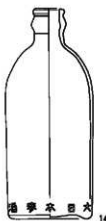
種 承 録 堂



13



15



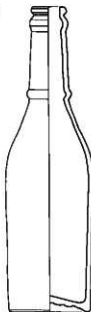
14



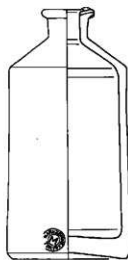
村島商會
非賣場



17



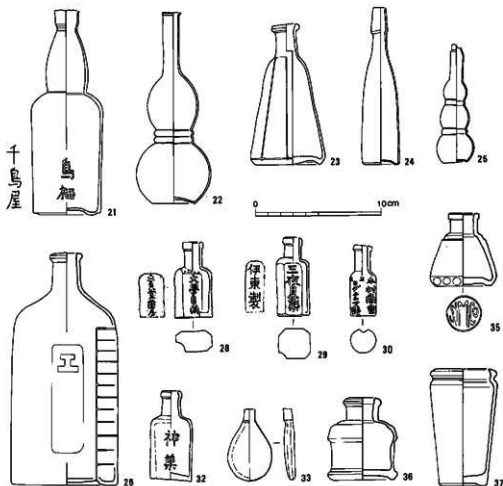
18



20



第 63 圖 瓶 ②



第 64 図 瓶 ③

瓶形で口唇部は折り離し造り。

水薬瓶 (26・27) 水薬・うがい薬瓶で、26は400 cc 入で団鉄の「工」印が表示されており国鉄病院のものであろう。27は200 cc 入で「戸早病院」の表示がある。他に「因幡町 井上病院」のものが出土している。

目薬 (28~31) 31は現在の瓶に近い器形であるが、他は器面に一条凹面があり、口径が器形に比して大きい。28には「大目薬 参天堂薬房」、29は「三夜目薬 伊東製」、30は「スエ ヨヂウム丁 幾 本村商会」とある。

薬瓶 (32~34) 32は透明でコバルトブルーを呈し、器面に「神薬」とある。33・34は仁丹瓶で大瓶と小瓶で、口縁にコルクの栓が付く。

海苔佃煮瓶 (37・38) 同形のものが現在もある。他に「磯志まん」の表示のものがある。

泥めんこ鍋型 (39) 蒸汽機関車の泥めんこ鍋型で、2.6×4.1 cm の方で厚さ1.7 cm、きめ細かい粘土で素焼きされている。

表 4 瓶一覧表

No.	種類	法量(単位: cm-cc)				色 調	検 合 瓶	気 泡	器 面 表 示	そ の 他
		口径	底径	器高	容量					
1	牛乳瓶	2.0	5.8	18.4	290	無色透明	○	○	トス牌 清毒全乳 正一合五勺入	目盛有り
2	牛乳瓶	2.0	6.0	17.5	290	無色透明	○	○	小倉牌村田 清毒全乳 本日詰一合五勺入	目盛有り
3	牛乳瓶	2.0	5.7	16.3	280	無色透明	○	○	折尾歌橋田 当日詰 清毒全乳 一合	目盛有り
4	牛乳瓶	2.4	5.2	16.5	190	無色透明	○	○	太宰府 吉田牧場 清毒全乳 一合	
5	牛乳瓶	2.4	6.0	15.3	240	無色透明	○	○	清毒 博多牌 全乳 宮川 電話五一三番	
6	牛乳瓶	2.0	5.8	18.4	280	無色透明	○	○	林屋牛乳株式会社 博多駅 清毒全乳 正味量一合五勺入	目盛有り
7	牛乳瓶	2.0	5.2	15.0	190	無色透明	○	○	清毒全乳 福岡牛乳株式会社 正味量一合五勺入 電話二〇八二・二一九九番	
8	牛乳瓶	2.6	5.4	15.6	180	淡青緑色透明	○	多い	清毒 無糖 全乳 阿部牛乳 電話一〇五六番	
9	牛乳瓶	—	4.9	—	190	淡緑色透明	○	多い	高塩殺菌全乳 一、八勺入	上部欠損
10	牛乳瓶	2.2	4.8	16.6	150	淡青緑色透明	○	○		
11	ビール (大)	2.4	7.7	30.0	720	茶色透明	○	○	サクラビール 登録 商標 SAKURA BEER	
12	ビール (大)	2.2	7.7	28.2	720	茶色透明	○	○	大日本麦酒株式会社醸造 登録商標	
13	ビール (小)	2.2	6.8	23.6	360	茶色透明	○	○	大日本麦酒株式会社醸造 登録商標	
14	ビール (小)	2.4	6.8	16.5	360	茶色透明	○	○	大日本麦酒株式会社製造	
15	酒	2.8	7.4	27.2	390	淡青緑色透明	×	○		密封式金具が付く
16	酒	—	5.4	—	180	淡青緑色透明	○	○	白鶴 正味一合 富納合名会社 酒類	上部欠損
17	ラムネ	2.2	4.8	19.3	130	淡緑色透明	○	○	大塚ラムネ 村島商會 非売瓶	
18	サイダー	2.6	5.4	24.3	360	濃緑色透明	○	×		底部に登録商標の三ツ欠
19	ソース	2.8	5.8	21.0	200	淡青緑色透明	○	×	日本一の白玉ソース 白玉ソース株式会社	
20	インク	3.8	9.6	19.6	780	茶色	—	—	MARUZENINKU★TOKYO	陶器
21	?	2.0	5.4	16.1	220	淡緑色透明	○	多い	鳥標 千鳥牌	
22	ニッケ	1.6	3.4	15.0	160	薄淡緑色透明	○	○		
23	?	2.2	6.0	11.0	110	淡緑色透明	○	多い		八角形
24	ニッケ	1.0	3.0	12.3	60	淡緑色透明	○	多い		
25	ニッケ	0.7	2.0	9.3	25	薄淡緑色透明	○	多い		
26	水素	2.4	5.2-8.2	18.3	400	薄淡緑色透明	○	○	工	目盛有り
27	水素	2.2	4.7-6.3	15.2	200	無色透明	○	○	戸部病院	目盛有り

No.	種類	注量(単位: cm・cc)				色 調	接合 数	乳 泡	器 面 表 示	そ の 他
		口径	底径	高さ	容量					
28	目薬	1.6	2.9	6.0	10	無色透明	○	○	大平目薬 参天堂薬房	
29	目薬	1.6	2.5-2.8	6.3	10	透緑色透明	○	○	三夜目薬 伊東製	
30	目薬	1.4	2.0	5.6	10	無色透明	○	○	スエ ヨザウウム丁薬 本村商会	
31	目薬	0.7	1.4-2.7	6.8	10	無色透明	○	×		廣形
32	くすり	1.4	3.3	7.0	20	コパルトブ ルー透明	○	多い	神薬	
33	くすり	0.9	—	5.7	?	無色透明	×	○		
34	くすり	0.7	—	4.8	?	無色透明	×	○		33の小瓶
35	インク	2.5	4.4	5.7	40	薄緑色透明	○	○	SIMCO	
36	インク	2.8	5.0	6.5	60	無色透明	○	○		
37	海苔飴煮	4.2	3.6	9.2	90	緑色透明	○	○		
38	海苔飴煮	4.4	5.2	9.2	160	緑色透明	○	○		

表5 出土品の当時の値段

商 品 名	明治末頃	大正中頃	昭和初頃
牛 乳 (1合)	3銭9厘(42年)	5銭(5年)	8~10銭(1年)
ビ ー ル (大)	30銭(43年)	35銭4厘(8年)	41銭(3年)
清 酒 (1 升) 中 等	40銭(39年)	1円(9年)	1円70銭(5年)
ラ ム ネ	3銭(43年)	5銭(10年)	5~6銭(6年)
サ イ ダ ー	10銭(40年)	24銭3厘(9年)	22銭(4年)
駅 弁 (上 等)	25銭(45年)	30銭(7年)	30銭(5年)
駅 弁 茶	4銭(45年)	7銭(9年)	5銭(5年)
イ ン ク (60 cc)		30銭(15年)	20銭(2年)
目 薬 (大 学 目 薬)	10銭(44年)	10銭(8年)	20銭(2年)
玄 米 (1 kg)	8銭9厘(43年)	16銭7厘(9年)	13銭3厘(5年)

参考文献 週刊朝日編 1988「銭貨史年表」・麒麟堂酒株式会社編 1969「麒麟堂酒の歴史」
 岐阜町誌編集委員会編 1977「岐阜町誌」

V お わ り に

遺跡は、ゴミ穴や建物の基礎穴などで著しく破壊されていたものの、掘立柱建物2棟、竪穴状遺構8基、土壇62基、土壇墓2基、溝状遺構1条など生活に係る多数の遺構と、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・緑釉陶器・青磁などの土器はじめ、多量の土鍾、紡錘車・砥石等の土製品・石製品など多数の遺物が発見された。古くは縄文時代晩期の縄文土器小片や打製石斧が出土し、数点ではあるが弥生時代中期初頭頃の弥生土器破片も出土している。とりわけ、遺跡の主体をなす時期は6世紀末から8世紀後半までの間といえる。遺構は砂丘という崩壊しやすい性質もあって、何回となく作り変えられたためか、遺構間の重複が著しい。

ここでは遺跡の主体をなす古墳時代から奈良時代におたる集落跡とその背景について若干触れ、まとめとしたい。また、当該地に吉塚操車場があった頃の遺物と思われる主に明治から大正・昭和初期までわたる珍しい駅弁関係の資料や各種生活容器が多数出土している。新しい資料であるとはいえ、近代期の生活様式を知る貴重な資料であり、一応のまとめをしておきたい。

1. 集落跡とその背景

(1) 時 期

時期を確定できる資料は、かならずしも充分ではなく不明な点を残すが、主体をなす時期は先にも記したように6世紀末から8世紀後半で、本遺跡は約200年前後の間に継続して形成された集落跡といえる。

時期としては、大きくⅠ期：6世紀末、Ⅱ期：7世紀前半、Ⅲ期：7世紀中頃から後半、Ⅳ期：8世紀前半、Ⅴ期：8世紀後半の五期に大別できる。各期の遺構の構成は、時期を確定できる資料が少なく不十分ではあるが、8基検出された竪穴遺構もⅠ期：8号、Ⅱ期：7号、Ⅲ期：6号、Ⅴ期：3号とⅣ期を除き、各期にそれぞれ1基ずつ形成されていたことになる。遺跡は南側にさらに拡大するので、数基が併存していたといえるだろう。

62基と多数検出された土壇で時期が判るものは、Ⅰ期：6号、Ⅱ期：4号・21号・60号、Ⅲ期：8号・13号・24号・38号・41号・43号・44号・

表6 竪穴遺構一覧表 (単位 cm)

No	規 模		平面形	出 土 遺 物	時 期
	基壇 × 竪穴	深さ			
1	248 × 265	51	隅丸方形	土鍾(1-7)	
2	235 × (200)	25.5	方 形	土鍾(8)	
3	343 × 505	88	楕円形	土器(1)、土鍾(9)	8C後半?
4	305 × 320	22	方 形	土器(2)、紡錘車(1)	
5	(226 × 135)	14	—	土鍾(10-11)	
6	(170 × 52)	18	—	土器(3-4)	7C後半
7	345 × 235	16	長方形	土器(5-7)、土鍾(12-15)	7C前半
8	295 × 490	40-57	隅丸長方形	土器(8-10)、土鍾(16-17)	8C前半-7C前半?

47号、Ⅳ期：12号・14号・30号、Ⅴ期：16号・27号・28号・61号などである。時期が確定できた資料だけでみれば、Ⅲ期が8基と最も多く、集落が最も隆盛した時期ともいえる。しかし、その大半が時期が不明なので、直ちに結論づけることはできないだろう。

また、2棟検出された掘立柱建物跡も時期は確定できないが、主軸が違うので時期は異なる

表7 土 溝 一 覧 表

(単位 cm)

No.	縦 横 長径×短径	深さ	平面形	出土遺物	時 期
1	152 × 116	47	横円形		
2	112 × 146	55	"	土器(18)	
3	156 × 135	72	"	土器(11・12)、土器(19)	
4	135 × 143	44	方 形	土器(13)	7C前半
5	145 × 70	55	横円形		
6	164 × 180	68	方 形	土器(14)、土器(20)	6C末
7	100 × 139	51	隅丸方形		
8	177 × 240	46	長方形	土器(15)	7C後半
9	132 × 206	27	隅丸方形	土器(21・22)、土玉(4)	
10	122 × 177	36	長方形		7C後半
11	196 × 143	87	横円形	土器(16)、土器(23)	
12	215 × 238	65	隅丸方形	土器(17・19)	8C前半?
13	(261 × 175)	52	—	土器(20・21)	7C中頃
14	195 × 139	59	不整形円形	土器(22・23)	8C前半?
15	(240 × 172)	31	横円形		
16	(225 × 360)	70	隅丸方形	土器(24)、土器(24)、鉄器(6)	8C後半?
17	(180 × 120)	13	横円形		
18	300 × 255	26	"		
19	280 × 158	18	隅丸方形	土器(25・26)	6C後半—末
20	(93 × 165)	16	横円形		
21	116 × 178	15~40	隅丸方形	土器(27)	7C前半
22	(120 × 178)	30~34	円 形		
23	130 × 172	55	不整形円形		
24	220 × 130	56	横円形	土器(28)	7C後半?
25	135 × 80	28	円 形		
26	224 × 200	60	隅丸方形	土器(31・30)、土器(25~27)	7C代
27	230 × 230	52	隅丸方形	土器(31)	8C後半?
28	160 × 190	58	横円形	土器(32)、土器(28)	8C後半?
29	215 × 130	52	不整形円形		
30	302 × 175	45	隅丸方形	土器(33・34)、土器(29~32)	8C前半
31	159 × 185	30	隅丸方形	土器(33)	
No.	縦 横 長径×短径	深さ	平面形	出土遺物	時 期
32	(150 × 125)	18	横円形		
33	(118 × 152)	20	不整形円形		
34	(197 × 245)	60	不整形円形		
35	(285 × 255)	47	不整形円形	土器(34~38)	
36	185 × 157	77	"		
37	140 × 163	60	横円形		
38	223 × 330	40	隅丸方形	土器(35)、土器(39~41)	7C中頃
39	190 × 182	48	不整形円形		
40	175 × 173	50	隅丸方形	土器(42・43)	
41	(175 × 180)	11	隅丸方形	土器(36)	7C後半
42	162 × (110)	20	横円形	土器(44・45)	
43	(125 × 205)	40	隅丸方形	土器(37~43)、土器(46~48)	7C中頃
44	150 × 240	50	不整形円形	土器(44~46)、土器(49~50)	7C中頃
45	(100 × 180)	70	隅丸方形	土器(47・48)	8C後半
46	135 × 220	33	不整形円形	土器(35~56)	
47	(165 × 270)	40	長方形	土器(49~51)、瓦(52)、土器(53~58)	7C後半
48	305 × 285	77	横円形	土器(53)	
49	140 × 237	80	不整形円形	土器(59)	
50	260 × 210	99	横円形	土器(50)	5C前半
51	115 × 112	30	隅丸方形		
52	130 × 163	35	横円形	土器(60)	
53	290 × 215	45	"	土器(54)	
54	320 × 200	30	不整形円形	土器(55~56)	13C前半
55	183 × 145	38	"		
56	242 × 103	50	長方形	土器(57)、土器(61)	
57	200 × (250)	60	不整形円形		
58	(250 × 260)	83	隅丸方形	土器(62・63)、鉄器(7)	
59	(315 × 240)	52	不整形円形	土器(64~67)	
60	(195 × 245)	50	隅丸方形	土器(59~64)、磁石(11)	7C後半
61	220 × 192	40	隅丸方形	土器(65~66)	8C中頃
62	222 × 100	8	不整形円形		

ものと思われる。建物と土壌の配置関係からすれば、2号掘立柱建物の時期は建物に近接しすぎる24号(Ⅲ期)と27号(Ⅴ期)を除く時期のものといえるだろう。一方、1号掘立柱建物の時期については、主軸・配置とも良い3号竪穴遺構や16号土壌などの示すⅤ期の時期が最も可能性が高いだろう。

(2) 遺構の性格とその背景

多数の遺構が密集して検出されたが、遺構としてのまとまりや、遺構の性格はかならずしも明らかではない。8基検出された竪穴状遺構は住居跡と考えているが、この時期の竪穴住居跡に通有のカマドや明確な柱穴もなく、確証に欠ける。しかし、包含層出土の移動式カマド(第43図105)を使用したとすればカマドについては問題ない。

また、62基検出された多数の土壌についてもその性格は明確でない。平面形も円形・方形・長方形・楕円形などさまざまで、一定していない。土壌から出土する遺物は、一般的集落跡などで出土する遺物と何等変わることもない。しかし、本集落の特殊性を示す資料ともいえる土鏝が多量に出土していることは他の遺跡と大きく異っている。多量に出土した土鏝に係る漁撈関係の機能を考えるべきであろう。土壌の性格を考える上で、27号・34号土壌の南側に近接してめぐる小溝は、少なからずその性格を暗示するものかもしれない。溝内への雨水の進入を防ぐ排水溝と思われ、土壌上には覆屋が存在した可能性が高い。

住居跡と思われる竪穴状遺構は8基と少ないのに対し、土壌は62基と多く集落の根幹をなす遺構とも考えられる。その意味では、380個という夥しい数の漁網鏝である土鏝の出土は、一般的な農耕集落のあり方とは明らかに異質で、漁撈を専業とした集団の存在を反映したものであろうし、海に近い本遺跡の背景を物語るものといえるだろう。多数検出された土壌の性格はかならずしも定かでないが、魚貝類の一時的な保存庫といった機能や、魚貝類の解体処理場といった機能、漁網・漁具の保管庫といった機能等も十分考えられることであろう。その他にも日常的な漁撈活動に係る施設として多目的に利用された可能性も高い遺構といえるだろう。

また、出土数は少ないものの製塩土器(第17・32・43図11・63・102)の存在も、自給的なものとはいえ、海に近い地理的位置にある集落の実態を示す遺物である。さらに、近海に良好な漁場があるか判らないが、アワビオコシとも思われる鉄器(第13図6～9)の出土も同様な背景を反映したものであろう。

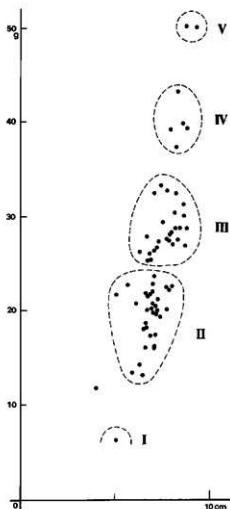
集落の規模は、すでに福岡市教育委員会が調査している吉塚駅東口団地(仮称)建設予定地内の結果からしても、さほど大規模な集落ではなかったと思われる。しかし、漁撈に係る多量の出土遺物は、漁撈を専業とする集団の集落の実態を物語るもので、約200年間も継続して集落を形成しえた背景には、漁撈集団としての自立と専門化が確立できたことを示すとともに、良好な漁場が確保できたことを示すものであろう。

(3) 土鍾について

分類 380個と多量に出土した土鍾は、いづれも管状土鍾である。大きさでは、ほぼ大中小といった分類は可能であるが、重さとかならずしも比例せず、ここでは漁網鍾としての機能から重量で大別することにした(第65図)。Ⅰ:10g以下,Ⅱ:13~23g前後,Ⅲ:25~34g前後,Ⅳ:37~44g前後,Ⅴ:50g前後の大きく5タイプに分類できる。また、第49図130のような57.2gといった重い例もあるが、土鍾としては例外品である。5タイプの土鍾の内、最も普遍的に使用された土鍾はⅡ・Ⅲタイプで、全体の80%以上を占めている。

このような5タイプの土鍾が、いかなる漁網の鍾として使用されたか定かではないが、ここでは明治11・12年頃の福岡県の漁業の実態を記録した「福岡県漁業誌」(註1)や、九州・山口ブロック水産試験場漁業分科会が編集された『西日本海域における刺網漁業』(註2)といった書物をもとに、網漁法の復原を少し考えてみたい。とりわけ、後者の書物は現場に即したもので、鍾の仕様や仕立て方まで詳しく説明されていて、大いに参考となった。とりわけ、「Ⅷ福岡県の刺網」の頃の筑前海の刺網が参考になる。刺網には流刺網・浮刺網・底刺網・まき刺網などがあるようで、さらに魚種によってサヨリ流刺網、トビウオ流刺網などと区別され、刺網漁法は複雑多岐である。

その中でも吉塚本町遺跡が立地する砂丘地帯は、博多湾沿岸でもかつて千代の松原とも呼ばれ親しまれた良好な砂質漁場である。砂質漁場で行われる漁法は、底刺網の一種である磯建網や浜建網漁法が一般的な漁法であるともいわれている。浜建網漁法の説明はないが、同様の建網である磯建網漁法の解説によれば、この漁法は筑前海一円で周年操業されている漁法で、ボラ・スズキ・クロダイなど多様な魚種を対象としているといわれている。中でも建網の沈子(鍾)の仕様が特に興味深く、2種類の沈子を



第 65 図 土鍾分類図

使用していることである。全長40.5 mの沈子網（建網の底網）に、重さ11 gの素焼の沈子（まさに土鍾そのもの）62個と30 gの鉛の沈子126個を使用している。沈子の間隔は22 cmで、鉛2個に素焼1個の順に配置するのが標準の仕立てと記されている。

同じ建網に2種類の沈子を使用する点は、本遺跡の土鍾の仕様を考える上で非常に参考になる。重さこそ異なるが、全体の80%以上を占めるⅡ・Ⅲタイプの土鍾が別々の漁網の沈子として使用されたことも考えられるが、筑前海で一般的に使用されている磯建網漁法の沈子の仕様と同様に、2種類の沈子が同時に使用された可能性は高いと思われる。従って、他のⅠ・Ⅳ・Ⅴタイプの土鍾についても、その仕様は多様であったと思われ、底刺網漁法以外にも、流刺網・まき刺網漁法といった漁法も今後考えていくべきものである。しかし、これとても単なる推論の域をでないものであり、今後の大きな課題でもある。

単に土鍾のみで、このような大胆な漁法の復原するのは極端といわれるのは当然であるが、あえて考古学における「もの」の分類と用途を個別的に区別したがる我々の弱点が大いに、今回の事例で反省させられたからである。また、用途や機能を推定する上で、私自身も含めて極めて不得手だからである。

土鍾の製作法 製作法の一端を知ることができる資料が39点もある。それは体部外面に成形時に形成されたと思われる平坦面をもち、断面は円形をなさない土鍾である。しかし、体部の断面は平坦面を有すなど変形しているものの、中心の孔は円形を保っていることも製作過程を知る上で貴重である。また、管状土鍾は紡錘形をなすのが一般的で、端部を指先でつまみ出したままのもの（64・114）や、明らかに面取りしたもの（11・17・22・60・66）などがあり、製作法の一端を知る良い資料である。

以上の点から簡単な土鍾の製作法を復原してみると、まず手頃な粘土塊をとりだし、中心の孔を形成するための断面円形の心棒を突きさすか、巻き込み、指先で紡錘形に概略整える。そして、板状の土台の上で、均整のとれた紡錘形をなすよう、丁寧に転がす。最後に、心棒を抜いて出来上りという工程である。体部が指先でつまみ出した事例（64・114）などは、心棒を抜く直前に指先で整形した結果で、端部が面取りされた事例（11・17・22・60・66）は、心棒を抜く直前にヘラ状工具でカットしたものといえる。まさに、体部に平坦面を残した多くの事例は、土鍾の製作が平坦な土上で転がし、成形されたことを知る良い例である。これが最も簡単な製作法の一つといえるだろう。

（井上）

注1 「福岡県史」近代史料編 農務誌・漁業誌 西日本文化協会 1982

注2 九州・山口ブロック水試漁業分科会編「西日本海域における刺網漁業」恒星社厚生閣版 1969

2. 吉塚操車場跡期の遺物

(1) 駅弁について

博多駅が開業したのは明治22年12月で、駅弁（註1）は明治24・25年頃に駅前の旅館主がはじめるが馴染みが薄く長続きしなかったようである。その後、明治29年から現在の寿軒が立売り営業で「にぎりめし」弁当を売っている。その当時の弁当は、ごま塩をかけたおにぎりめしにたくわんを添え竹皮に包んだもので、1個10銭であった。しかし、この当時は博多駅の利用客も少なく余り売れなかったようである。それから博多駅の利用客が多くなった大正時代になり駅弁が売れ初めている。

(2) 駅茶瓶について

駅茶瓶（註2）の生産地としては鳥栖の白石焼（実際には三養基郡北茂安町）と野間焼（福岡市南区皿山）が有名である。いずれも窯もプラスチック容器が出始める昭和30年代まで造られていたようである。両窯の特徴は白石焼は型物つくりで、野間焼はロクロ引き成形にある。販路は白石焼は鳥栖駅、野間焼は博多駅が中心であったようである。出土品はロクロ引きで多くは野間焼のようである。野間焼の茶瓶が焼かれ始めたのは駅弁が始まった直後のようで、当初は徳利型で軸葉は掛けてなく素焼き程度であった。その後、急須型も出来、軸葉を掛けて楽焼よりもやや高い温度で焼成するようになった。しかしそれでも「鉄分臭い」と言うことで本焼するようになったそうである。「うなぎめし」碗は野間焼現窯主の岡本光山氏によると昭和初期には父親が作っていたそうである。

(3) 牛乳販売について

牛乳が生産されはじめた明治初頃は非常に貴重品で、富裕者や病弱者が飲用する程度であったが、明治20年代後半に生産量が増加して一般に飲用されるようになり、牛乳を桶やブリキ缶に入れて天秤棒で担いで各戸を訪問しながら買う人の差出す容器に秤売りするようになる。しかし衛生的に問題が多く明治33年牛乳営業取締規則が公布されガラス瓶に詰められて販売されるようになった。しかしこの規則を満たすには膨大な資金と適当な立地が必要で、結果として資金力のある個人牧場や中小業者が合同で会社を設立して存続するようになる。その当時の個人牧場としては、筑紫郡鷺岡村の王丸牧場（福岡牛乳）、福岡市千代町の阿部牧場（阿部牛乳所）、太宰府町の吉田牧場（吉田牛乳所）、八幡市の村田牧場（後に小倉に移る）などがあった。その後、福岡近郊では昭和16～17年にかけて山崎牧場、粕屋牛乳、福岡牛乳を買収して子会社として福岡明治牛乳が創設され、福岡牛乳も系列に収められている。この頃から加工・販売は

大手資本会社が行うようになった(註3)。

(4) 出土品の年代について

牛乳は前述のようにビン詰めが始まるのが明治33年以降で、牛乳所が無くなるのが昭和16年頃になる。出土した瓶の正確な年代を決める資料に明治44年発行「驛勢一覽 鹿児島線之巻」(註4)の博多駅のなかに「構内営業 呼売 牛乳 宮川太一郎」とある。また大正3年発行「福岡実業案内記 前編」(註5)牛乳の部には「太宰府 吉田牛乳所」「福岡市 阿部牛乳所」が記載されている。また前述のように福岡牛乳・村田牧場は明治33年頃には営業していることから、出土品の多くは明治33年頃から大正初期には販売されていたようである。

ビール(註6)瓶には「サクラビール」「帝国麦酒株式会社」「大日本麦酒株式会社」の器面表示のものがある。帝国麦酒(株)は明治45年に門司に設立され(現サッポロビール門司工場)、大正2年にサクラビールを発売している。昭和4年に桜麦酒(株)に改称し、昭和18年に大日本麦酒(株)に合併している。大日本麦酒(株)は明治39年に大阪麦酒・日本麦酒・札幌麦酒の三社が合併して設立され、大正10年に博多工場(現アサヒビール博多工場)が竣工されている。その後、昭和24年に解散している。帝国麦酒瓶は大正2年から昭和4年頃のものであろう。また大日本麦酒瓶は明治39年～昭和24年になるが、博多工場が出来てから帝国麦酒(株)の終るころのものであろう。

サイダー(註7)瓶では底部に三ツ矢のマークや器面に「金線」「日本麦酒釀泉株式会社」の表示のものがある。日本麦酒釀泉(株)は大正10年に加富登麦酒・帝国釀泉・日本製瓶の3社が合併して設立され、大正14年に金線飲料(株)を合併している。その後、昭和8年に大日本麦酒(株)に合併されている。前述のことからサイダー瓶は大正10年から昭和8年頃のものと思われる。

水薬瓶では「工」のマーク瓶は国鉄病院のものと思われ、この国鉄病院は大正6年から門司に設けられ、現在はJR九州病院に改名している。戸早病院(註8)は明治後期から昭和15年まで福岡市馬出町の九大東門近くに内科医院を開業していた。

目薬では大学目薬は明治30年から発売され、参天堂薬房は明治後期頃から大正にかけて社名として使われているようである。三夜目薬は明治37年発行「九州薬業列傳 完」(註9)に「三夜目薬 筑後国浮羽郡吉井町田主丸 伊東八郎」、また明治43年1月12日 福岡日日新聞には「三夜目薬 小瓶5銭 大瓶10銭」の広告が記されている。

以上のように出土した遺物は概ね明治後半～昭和初期頃のものであろう。(日高)

註1 駅舎に関しては大貫隆文氏の教示を頂いた。記して感謝致します。

註2 白石焼 佐藤芳泉氏・野間焼 岡本光山氏の教示を頂いた。記して感謝致します。

- 註3 福岡県酪農協同組合連合会編 1976「福岡県酪農史」
- 註4 九州鉄道管理局営業課 1911「驛勢一覽 裏見鳥嶽之壺」
- 註5 早田孫太郎編 1914「福岡実業案内記 前編」
- 註6 参考文献 麒麟麦酒株式会社 1969「麒麟麦酒の歴史」
- 註7 山浦時彦氏に教示を頂いた。記して感謝致します。
- 註8 戸早氏に教示を頂いた。記して感謝致します。また明治44年3月7日付け福岡日日新聞の医院紹介欄に「内科診察 福岡大学醫院東隣 戸早内科醫院 醫學士 戸早幾太郎…」と記されている。
- 註9 後藤改平 1904「九州薬業列傳 完」

圖 版



(1) 発掘区全景 (北から)



(2) 発掘区西半部全景 (北から)



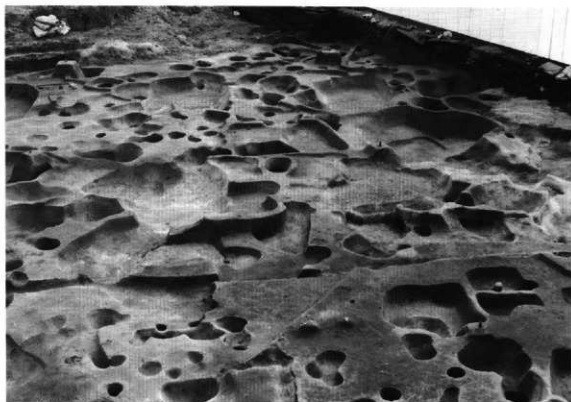
(1) 発掘区東半部全景 (北から)



(2) 発掘区北半部近景 (西から)



(1) 発掘区中央部近景 (西から)



(2) 発掘区中央部南半近景 (西から)



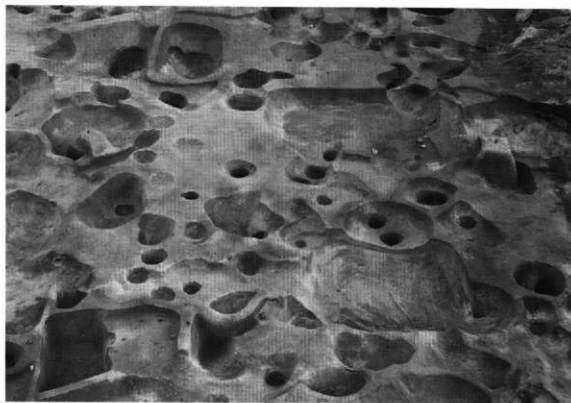
(1) 発掘区北西部近景 (西から)



(2) 発掘区中央部北半近景 (西から)



(1) 1号獨立柱建物跡 (南から)



(2) 2号獨立柱建物跡 (南から)



(1) 1・2号竪穴遺構と土壌群 (西から)



(2) 1号竪穴遺構 (西から)



(1) 1号竪穴内土鍾出土状態 (西から)



(2) 2号竪穴状遺構 (西から)



(1) 3号壑穴遺構 (北から)



(2) 4号壑穴遺構 (北から)



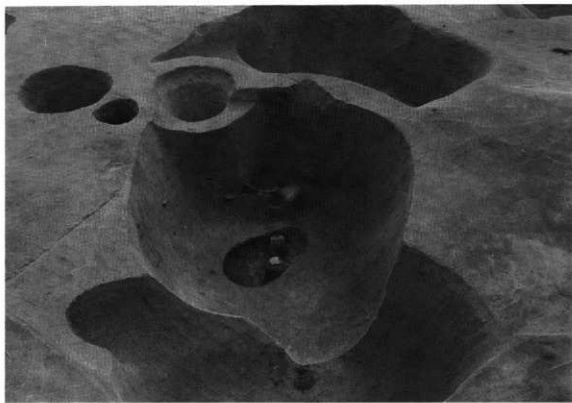
(1) 7号竖穴遺構 (南西から)



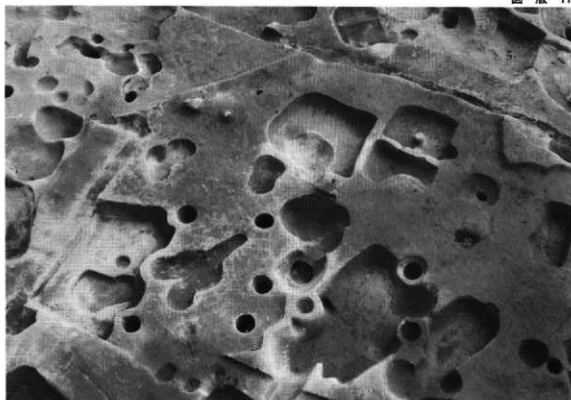
(2) 8号竖穴遺構 (東から)



(1) 1号土甕 (東から)



(2) 3号土甕 (西から)



(1) 8・9・39・47号土壌群 (西から)



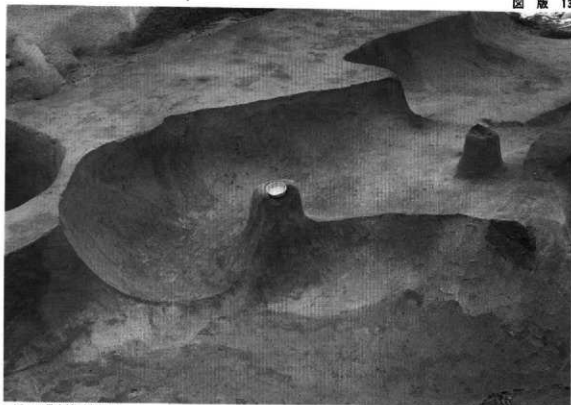
(2) 9号土壌 (東から)



(1) 11号土壌 (北から)



(2) 12号土壌 (西から)



(1) 13号土壇 (東から)



(2) 14号土壇 (北から)



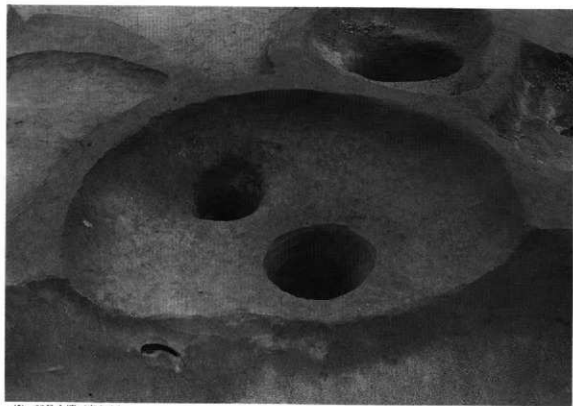
(1) 16号土壊 (北から)



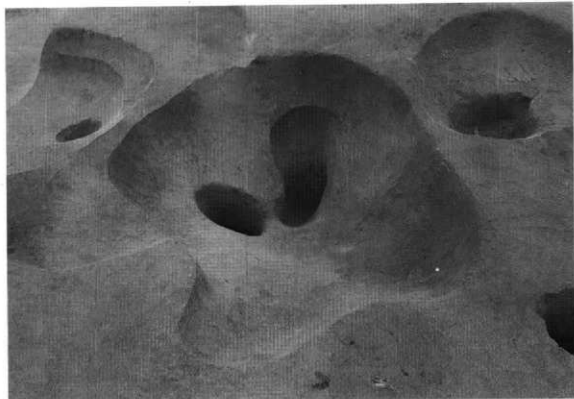
(2) 19号土壊 (北から)



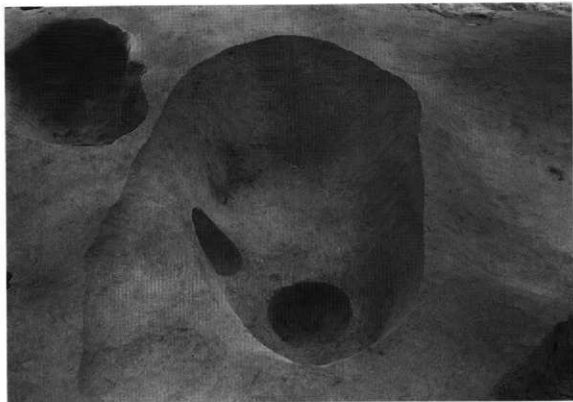
(1) 21号土壇 (東から)



(2) 22号土壇 (南から)



(1) 23号土壙（北から）



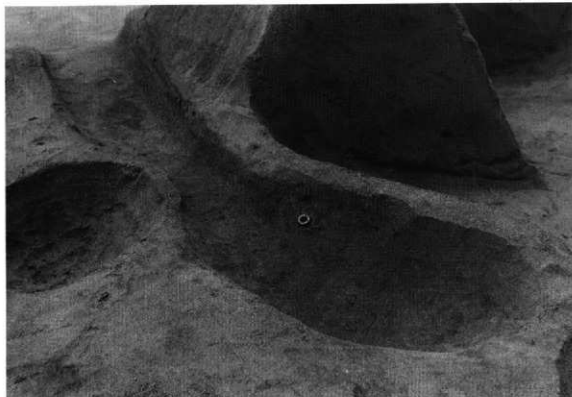
(2) 24号土壙（北から）



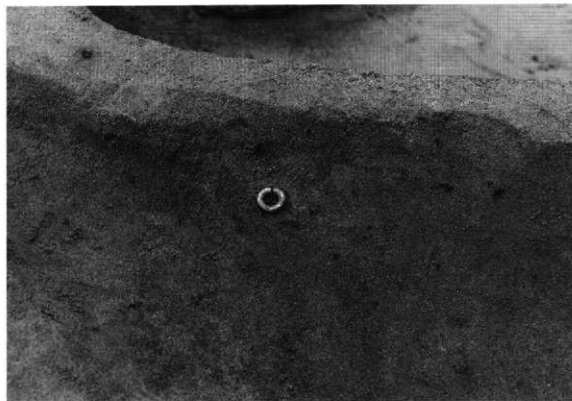
(1) 26号土壌 (東から)



(2) 27・28・36号土壌 (西から)



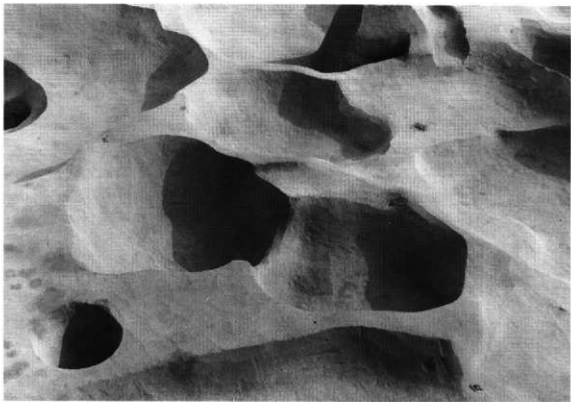
(1) 27号土城周溝（北から）



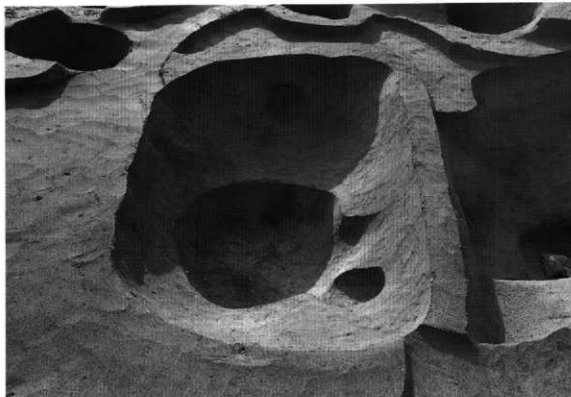
(2) 27号土城周溝内耳環出土状態（北から）



(1) 27・28・36・37号土壌群 (西から)



(2) 36・37号土壌 (西から)



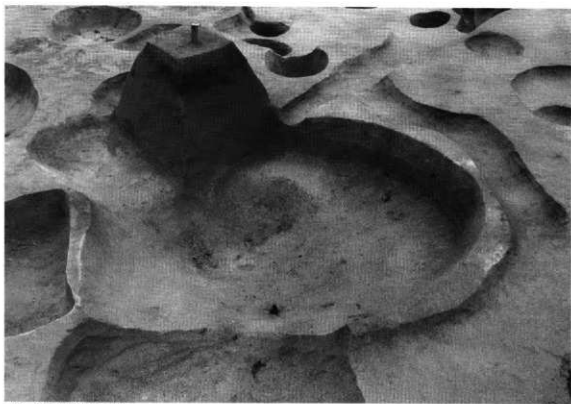
(1) 30号土壙 (北から)



(2) 31号土壙 (西から)



(1) 32・33号土壇 (東から)



(2) 34号土壇 (西から)



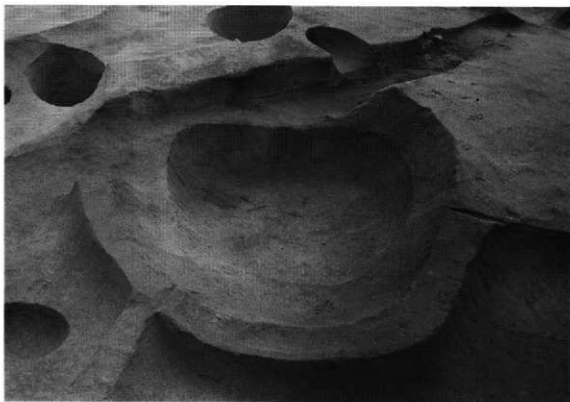
(1) 38号土坑 (南から)



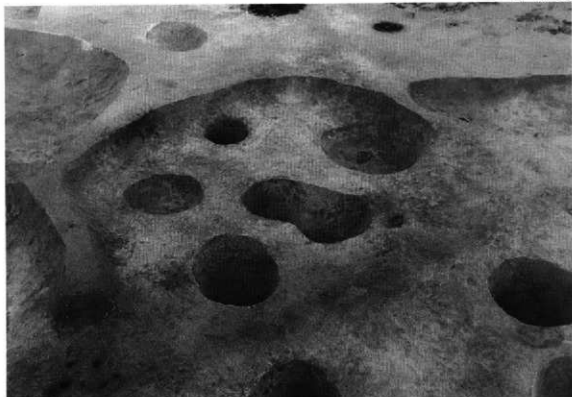
(2) 39号土坑 (北から)



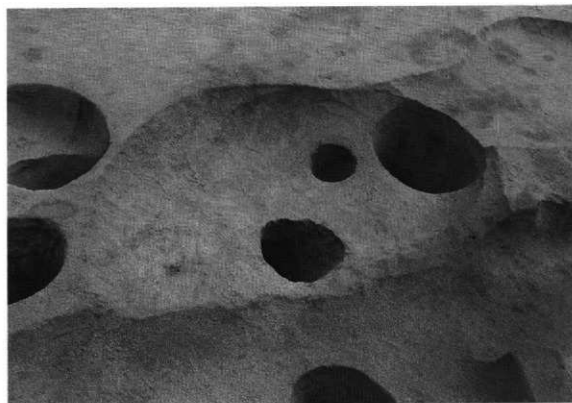
(1) 7号堅穴と周辺の土壌群（西から）



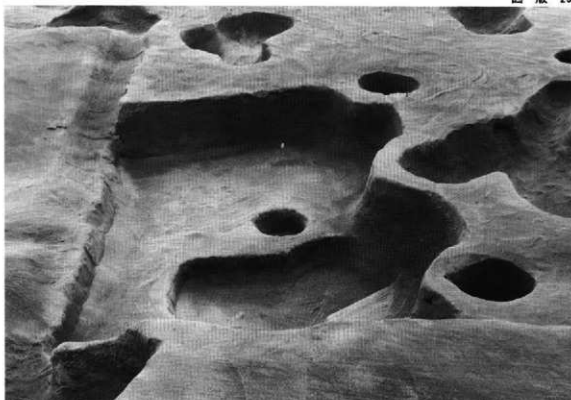
(2) 40号土壇（北から）



(1) 41号土壇 (東から)



(2) 42号土壇 (西から)



(1) 47号土壇 (西から)



(2) 49~51・54号土壇 (北から)



(1) 53号土壤



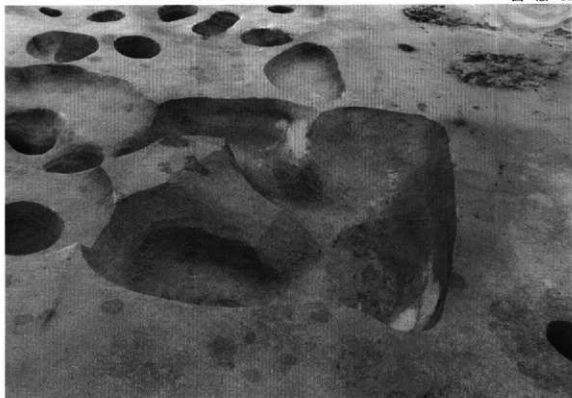
(2) 54号土壤



(1) 34・35・55・58号土坑群（西から）



(2) 55号土坑（西から）



(1) 56号土塊 (北から)



(2) 57号土塊 (北から)



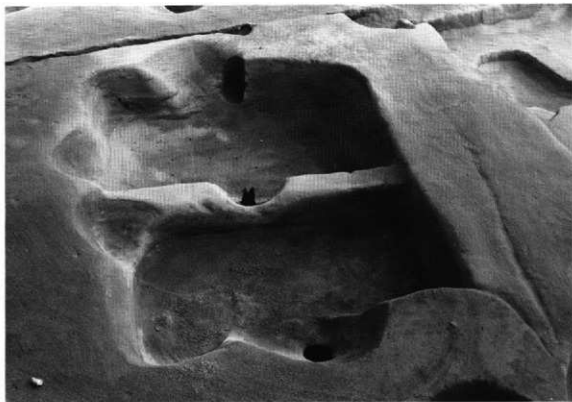
(1) 58号土塙 (西から)



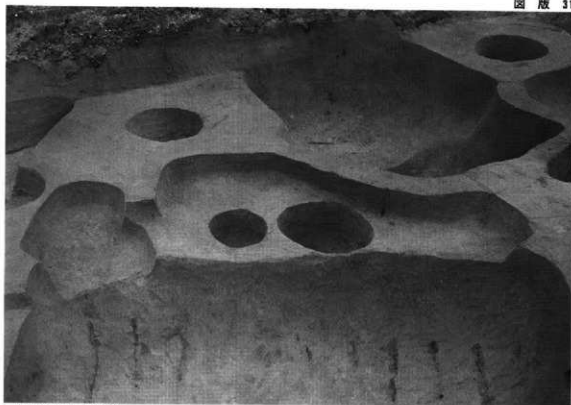
(2) 59号土塙 (北から)



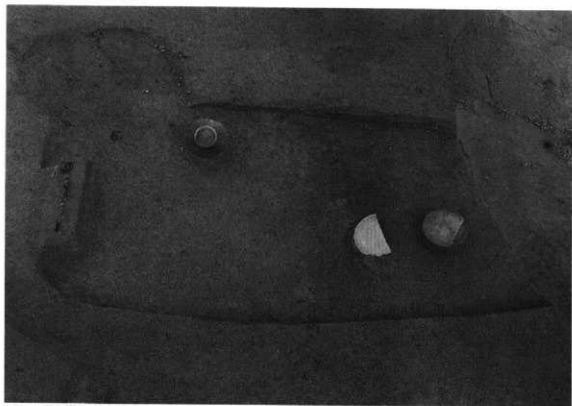
(1) 9・39・60号土塊 (東から)



(2) 61号土塊 (南から)



(1) 62号土坑（北から）



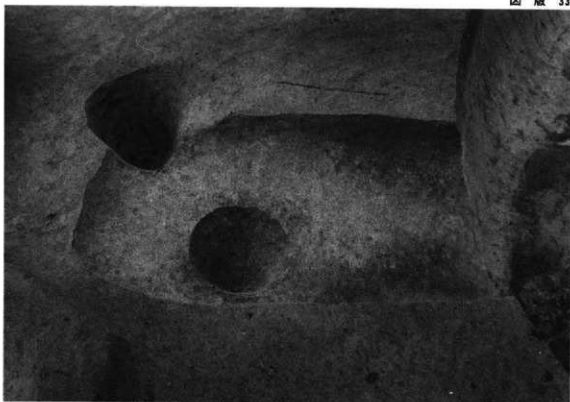
(2) 1号土坑墓（東から）



(1) 1号土壇墓内刀子・土師器出土状態（西から）



(2) 1号土壇墓内土師器・青磁出土状態（西から）



(1) 1号土墳墓(東から)



(2) 2号土墳墓(東から)



(1) 井戸土層断面 (南から)



(2) 井戸 (南から)



9



5



8



11



12



20



21



25



29



35



39



37



64



41



67



45



68



56



69



58



70



55



71



82



83



85



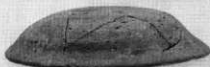
91



110



111



112



117



121



132



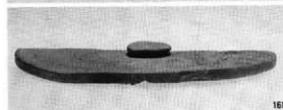
135



141



113



161

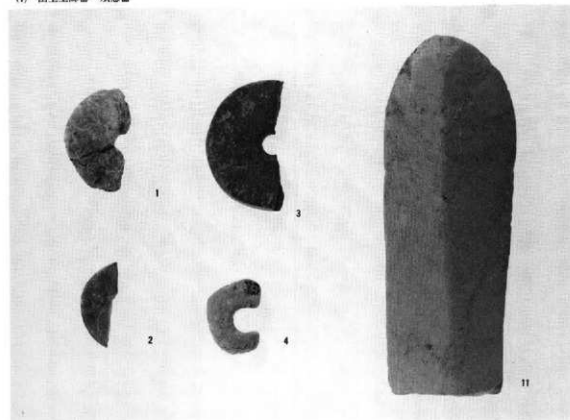


152

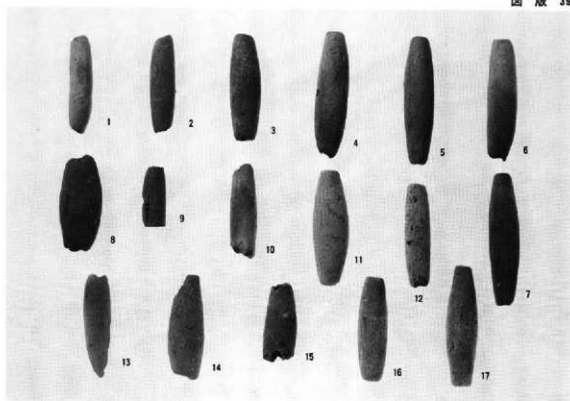


155

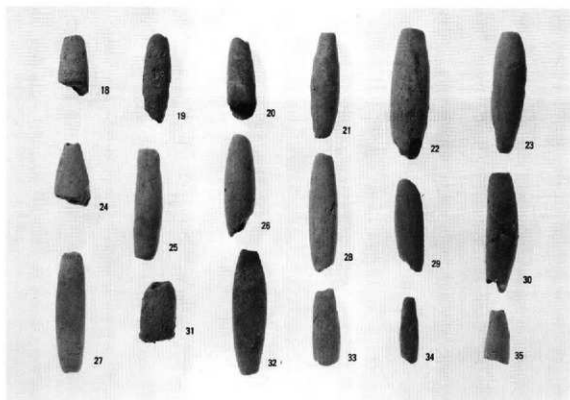
(1) 出土土師器・須恵器



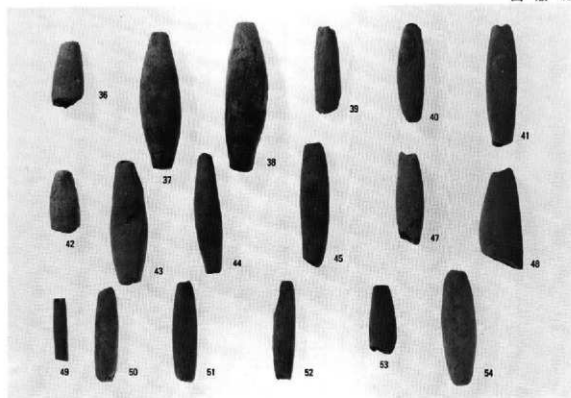
(2) 初鉢車・土玉・砥石



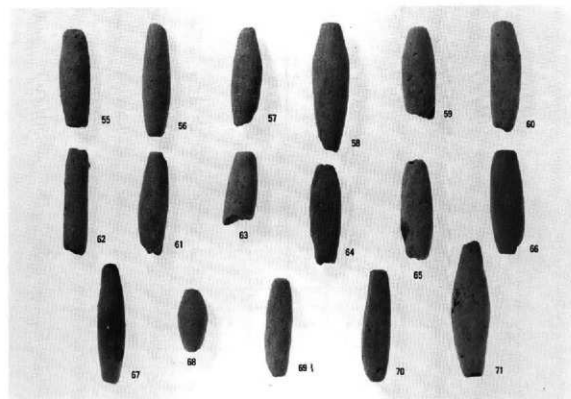
(1) 土器①



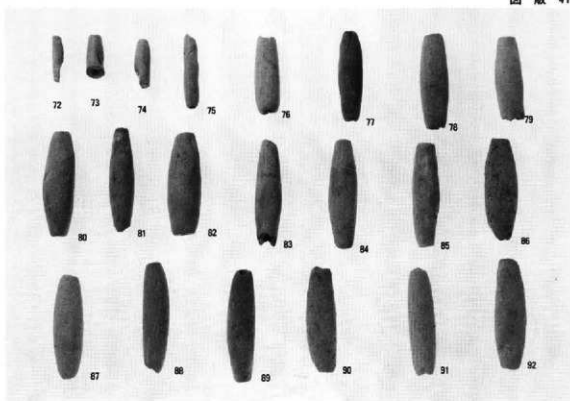
(2) 土器②



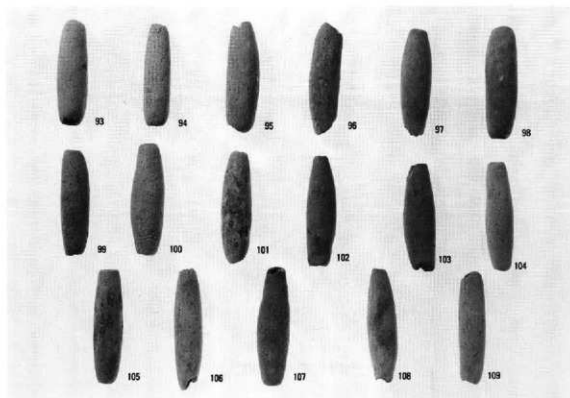
(1) 土鉢③



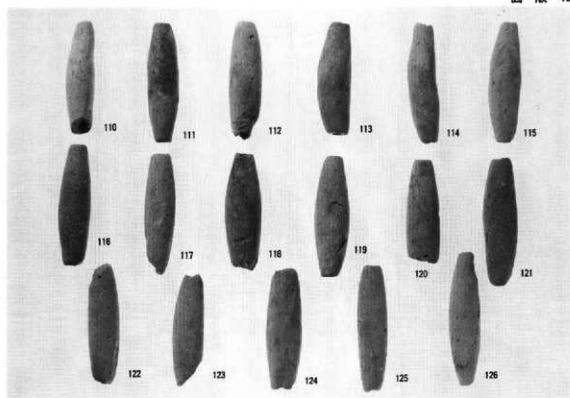
(2) 土鉢④



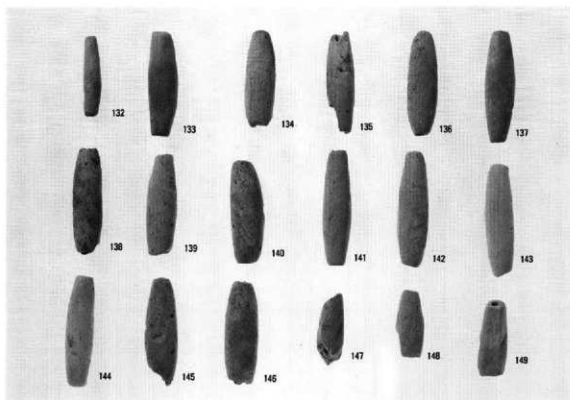
(1) 土鉢⑤



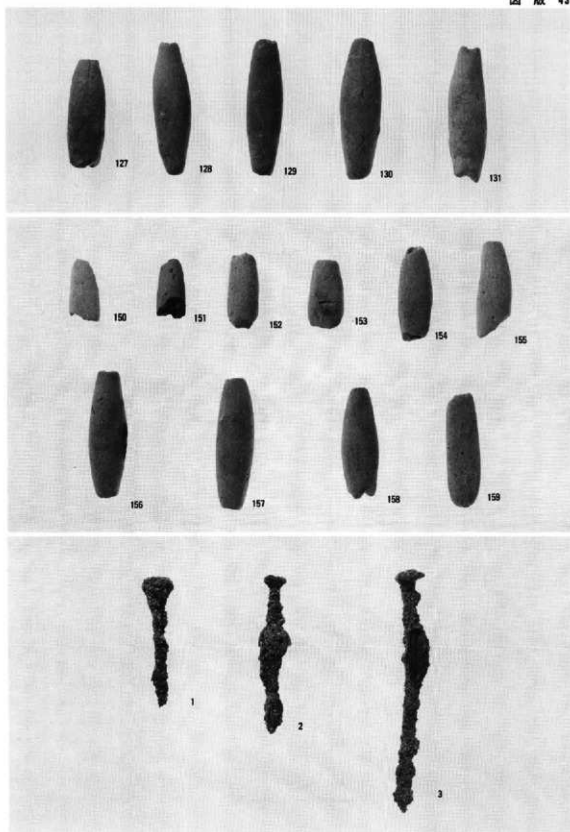
(2) 土鉢⑥



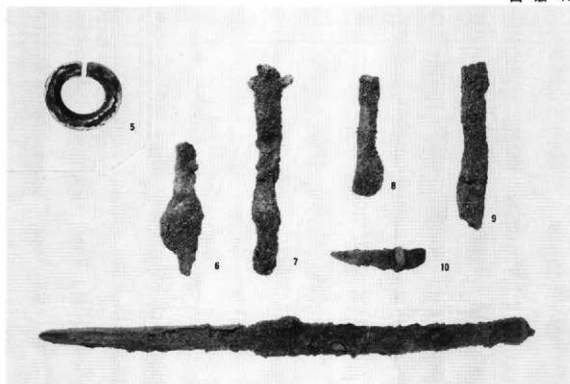
(1) 土鍬⑦



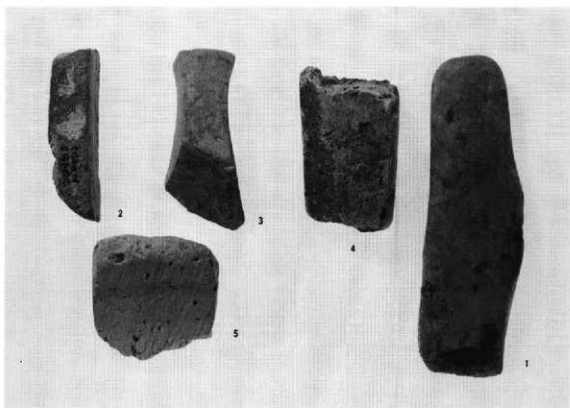
(2) 土鍬⑧



土鍬・鉄釘

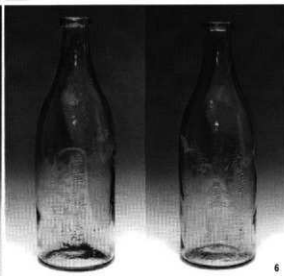
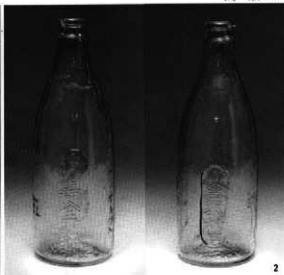


(1) 耳環・鉄器



(2) 石斧・砥石







11



12



13



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



26



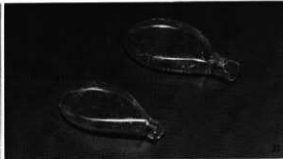
27



28



32



33



34



35



36



37



38

福岡県行政資料	
分類資料 JH	所属コード 2133051
登録年度 3	登録番号 13

吉 塚 本 町 遺 跡

平成 4 年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会

福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印 刷 秀 巧 社 印 刷 株 式 会 社

福岡市南区向野 2 丁目13-29